熊本県文化財調査報告　第２２０集

地　蔵　原　遺　跡

熊本県阿蘇郡南小国町大字中原字地蔵原所在の遺跡

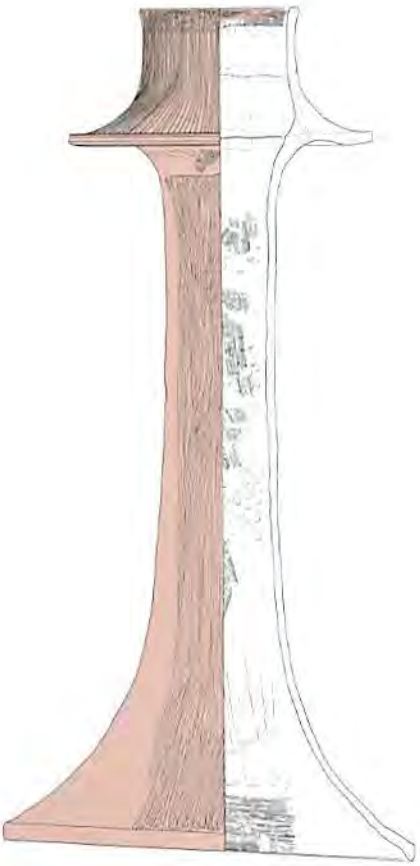
２００４年

熊　本　県　教　育　委　員　会

熊本県文化財調査報告　第２２０集

地　蔵　原　遺　跡

熊本県阿蘇郡南小国町大字中原字地蔵原所在の遺跡



２００４年

熊　本　県　教　育　委　員　会

序　　文

今回発掘調査報告書を刊行しました地蔵原遺跡は阿蘇郡南小国町に所在します。南小国町は県北に、また大分県九重町・上津江村との県境に位置しています。

本書は平成13年度に県道南小国上津江線単県道路改良事業に伴って発掘調査を実施した報告書です。調査の結果、旧石器～近世の遺構・遺物が出土しましたが、今回、特に注目されるのは弥生時代中期を中心とする大量の祭祀遺物です。特に筒形器台や注口脚付小型壺など当時の精神文化の充実を伺わせます。

今回の成果が学術のみならず、県民の皆様をはじめ多くの方々に広く活用され、埋蔵文化財に対する関心と御理解を深めていただく一助になれば幸いに存じます。

最後に埋蔵文化財の発掘調査に御協力いただいた県土木部・阿蘇地域振興局土木工務課・南小国町役場・南小国町教育委員会、および地元の方々に対し心より感謝申し上げます。

平成16年３月31日

熊本県教育長　田中　力男

例　言

1　本書は、県道南小国上津江線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査の調査報告書であり、平成13年度に実施した地蔵原遺跡調査報告書である。

2　熊本県土木部から委託を受け熊本県教育委員会が実施し、遺物の整理・保管は熊本県文化財資料室で行った。

3　現場での遺構実測・写真撮影・遺物取り上げは各調査員が行い、遺物実測・トレースは前田佳代子（嘱託）・西　慶喜（嘱託）・金子美代子・古閑満代・佐藤淳子・田中知恵美が行い、宮崎　拓（嘱託）の協力を得、一部、㈲埋蔵文化財サポートシステムの委託事業とした。データ作成に関しては、内田成香（嘱託）・杉井涼子（嘱託）・本多麻紀（嘱託）の協力を得た。遺物撮影は村田百合子・山下義満が行った。

4　科学分析は（株）古環境研究所・（株）パレオ・ラボの委託事業とした。

5　本書の地形図は、県土木部及び南小国町役場から提供を受けたものをもとにして作成した。

6　本書の執筆は下記の者が行った。

西　慶喜　　（第Ⅱ章）

宮崎　拓・山下義満（第Ⅴ章　第2節　石器 他　）

山下義満　　（上記以外）

7　本書の編集は熊本県文化財資料室で行い、山下が担当した。

凡　例

1　現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。

住居地　1/20　　土　坑　1/10　　不明遺構　1/10

2　本書作成の際には以下の縮尺とした。

住居地　1/30　　土　坑　1/20　　不明遺構　1/30　3/40

土　器　1/3～1/4　　石　器　1/2　1/3

3　遺構の方位は真北である。

4　出土遺物の解説は本文中に記したが、それらの計測値は第Ⅴ章の末に一括して掲載した。

5　土器色調については農林水産省水産技術会議事務局　監修「標準土色帳」（20版　1997）に準拠した。彩色遺物には着色を施した。

6　遺構内の特徴的な痕跡については、以下のような網目を使用した。

地　山　30%　　エリア　30%　　貼　床　20～0%

硬化面　10%　　撹　乱　5%

本文目次

序文　例言　凡例

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1

第1節　調査に至る過程 …… 1

第2節　調査の組織 …… 1

第3節　調査の経過 …… 2

第Ⅱ章　位置と環境 …… 3

第1節　地理的環境 …… 3

第2節　歴史的環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の概要 …… 9

第1節　調査の方法 …… 9

第2節　層位と包含層 …… 9

第Ⅳ章　遺構 …… 11

第1節　住居 …… 11

第2節　土坑 …… 16

第3節　不明遺構 …… 19

第Ⅴ章　出土状況及び遺物 …… 31

第1節　土器 …… 31

第2節　石器 他 …… 52

観察表 …… 56

第Ⅵ章　科学分析 …… 60

第Ⅶ章　総括 …… 72

写真図版

編集後記

挿 図 目 次

第１図　地蔵原遺跡位置図……5
第２図　地蔵原遺跡周辺主要遺跡分布図……6
第３図　遺跡模式土層図……9
第４図　遺構配置図（1・2）・グリッド図及び地形図……10
第５図　SH－01実測図……11
第６図　SH－01出土遺物実測図……12
第７図　SH－02実測図……12
第８図　SH－03実測図・出土遺物実測図……14
第９図　SH－03出土遺物実測図……15
第10図　SH－04実測図・出土遺物実測図……15
第11図　ST－01・02実測図……16
第12図　ST－03・04実測図・出土遺物実測図……17
第13図　ST－05・06実測図……18
第14図　SX－01実測図・出土遺物実測図……19
第15図　SX－02実測図・出土遺物実測図……20
第16図　SX－03実測図……21
第17図　SX－03出土遺物実測図（1）……22
第18図　SX－03出土遺物実測図（2）……23
第19図　SX－04実測図……23
第20図　SX－04出土遺物実測図……24
第21図　SX－05実測図・出土遺物実測図（1）……25
第22図　SX－05出土遺物実測図（2）……26
第23図　SX－05出土遺物実測図（3）……27
第24図　SX－06・07実測図……29
第25図　SX－08実測図及びSX－09・10位置図……30
第26図　第２トレンチ位置図……31
第27図　第２トレンチ出土遺物実測図……32
第28図　エリア・グリッド全体図……33
第29図　エリア1出土遺物実測図……33
第30図　エリア2・3出土遺物実測図……34
第31図　エリア4・5出土遺物実測図……35
第32図　エリア6・7出土遺物実測図……36
第33図　エリア8出土遺物実測図……37
第34図　エリア9出土遺物実測図（1）……38
第35図　エリア9出土遺物実測図（2）……39
第36図　エリア9出土遺物実測図（3）……40
第37図　エリア9出土遺物実測図（4）……41
第38図　エリア9出土遺物実測図（5）……42
第39図　エリア9出土遺物実測図（6）……43
第40図　エリア9出土遺物実測図（7）……44
第41図　エリア10出土遺物実測図（1）……45
第42図　エリア10出土遺物実測図（2）……46
第43図　エリア11出土遺物実測図……47
第44図　エリア12・13出土遺物実測図……48
第45図　エリア14出土遺物実測図……49
第46図　エリア15出土遺物実測図
第Ⅲ層 他の出土遺物実測図……50
第47図　他の出土遺物実測図……51
第48図　石器実測図（1）……53
第49図　石器実測図（2）……54
第50図　銅戈実測図……55
第51図　土器様式図……75
第52図　遺物集中区……75

表 目 次

第１表　地蔵原遺跡周辺主要遺跡地名表（1）　…7
第２表　地蔵原遺跡周辺主要遺跡地名表（2）……8
第３表　土器観察表（1）　……56
第４表　土器観察表（2）　……57
第５表　土器観察表（3）　……58
第６表　土器観察表（4）　……59
第７表　石器・他観察表　……59

写 真 図 版

図版１　遺跡航空写真（1）
　　遺跡航空写真（2）
図版２　遺跡航空写真（3）
　　関連資料　　六地蔵　銅戈
図版３　ＳＨ－01　検出状況
　　ＳＨ－01　出土遺物
　　ＳＨ－03　検出状況
図版４　ＳＸ－01　出土状況
　　ＳＸ－03　出土状況
　　ＳＨ－03　出土遺物
図版５　ＳＸ－05　出土状況
　　丹塗土器（1）
図版６　丹塗土器（2）高坏
　　丹塗土器（3）壺
　　非丹塗土器
図版７　丹塗土器（4）甕
図版８　丹塗土器（5）他
図版９　石　　器
図版10　丹塗土器（6）

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る過程

本遺跡の調査は県道南小国上津江線単県道路改良事業によるものである。この事業の着手は平成2年、完了は平成17年度を予定している。

事業の実施に先立ち地元研究者から遺跡の可能性の高いことを指摘され、また周知の遺跡「地蔵原」（じぞうばる）（43―443―031）であることから、事業地区内に文化財が所在する可能性が高く、試掘調査を実施し遺跡の存在が確認され、文化課と土木部局で文化財に影響の及ぶ範囲を確認し、調査区を設定した。

第２節　調査の組織

調査は平成13年度に行った。調査責任者・事務局は以下の通りである。

調査主体者　熊本県教育委員会

調査責任者

阪井大文　（文化課長）
小田信也　（課長補佐）
島津義昭　（課長補佐）
木崎康弘　（調査第２係長）

調査事務局

中村幸宏　（主幹兼総務係長）
広瀬泰之　（参事）
杉村輝彦　（主事）

調査担当

村崎孝宏　（参事　試掘担当）
山下義満　（文化財保護主事）
西　慶喜　（嘱託）

報告書担当

山下義満　（文化財保護主事）
前田佳代子　（嘱託）

調査指導及び協力者

武末純一　（福岡大学）
室原　博　（南小国在住　郷土史家）
北里紘一　（南小国町教育長）
緒方　徹　（阿蘇町教育委員会）
毛利美勝　（郷土史家・南小国町議会議員）
宗像清博　（郷土史家・元南小国町教育委員会）
波多野八郎　（小国史談会会長）
平田定幸　（福岡県春日市教育委員会）
石井扶美子　（福岡県朝倉郡夜須町教育委員会）
土居和幸　（大分県日田市教育委員会）
隈　昭志　（山鹿市立博物館長）
金田一精　（熊本市教育委員会）
上田龍児　（福岡大学）

第３節　調査の経過

発掘調査は平成13年9月17日から平成14年1月28日まで実施した。調査は基本土層Ⅱ層から開始し、第Ⅲ層は黒色土と同様の遺構色でこの検出に呻吟した。また山間部での急激な天候変化、降雪などの気象条件にも苛まれ調査の進捗は困難を極めた。特に調査後半は厳寒の時期に入り、早朝には－６度を記録し、路面凍結など調査員は初めてタイヤチェーンを購入したのである。

基本土層Ⅱ層より遺物が出土したため、この層から表土剥ぎを行ったが、遺跡東側からの山崩れによる堆積と認められた。遺跡中央に現代の貯水所があり、この地点の遺跡は破壊されていた。この位置を境に東側をⅠ区・西側をⅡ区と設定した（第４図 遺構配置図（1・2）・グリッド図及び地形図参照）。精査後にⅠ区の1/3は後世の撹乱を受けていることが判明したため、調査の中心はⅡ区となる。また基本土層Ⅱ層より遺物が出土したが、これは流れ込みの可能性が高くグリッドで取り上げた。

10月下旬よりⅢ層掘り下げを開始するが、遺物の出土は認められるものの、土色は黒色土で検出に時間を要し、特に後半に遺構で述べるが、方形・楕円形プランなど一部住居状遺構のプランの明確な確定が困難で、従って認定まで至らなかった。遺物集中区について協議を重ねたが明確な遺構は検出できず、無論、これは調査員の力量によるものである。12月下旬、ブロックの土器集中が見られたため、精査後ＳＸ－05の遺構を検出した。筒形器台を初めとして７個体の土器を出土し、本来の調査期間を延長して遺構の性格把握に努めた。

また埋蔵文化財について理解を深め、遺跡を還元する意味を含めて平成14年12月2日に行った遺跡見学は、参加者270名を数え大変盛況であった。また地域の関心も高く発掘中、見学者の絶える日はなかった。南小国町文化祭にも特別に展示があり、周囲のご理解と協力により、また掠り傷も含めて一人の事故もなく調査が終了したのは、調査員として一つの冥利であった。以下、調査日誌から抜粋する。

平成13年9月19日表土剥ぎ開始。基本土層Ⅱ層より調査。10月中旬より、一部基本土層Ⅲ層に移行。南小国地方では「早朝、空がキラキラと輝く時は、天気が崩れる。」という。10月はこのような朝を迎えた日が多く、この間、台風も襲来し天候には苛まされた。12月2日公開見学会は1日だけであったが、当日は現場での調査の成果と、プレハブにて出土品の公開を行う2方面に展開し、併せて発掘の様子も公開した。調査終了予定の12月中旬から出土数が顕著になる。契約のプレハブは撤収したが、調査期間は延長し、以後、厳寒の中、調査を敢行するが風雪の影響で調査は捗らず、艱難辛苦の中、明くる平成14年1月28日を持って調査は終了し、関係各者に挨拶を行い現場の撤収をした。

公開見学会（平成13年12月2日）

第Ⅱ章　位置と環境

第1節　地理的環境

熊本県の北東部、阿蘇北外輪山より北側の地域一帯は「小国」と呼ばれる。現在の行政区画では小国町・南小国町一帯にあたり、南で阿蘇町をはじめ各町村に接するほかは大分県に囲まれ、地理的にも気候的にも一風特殊な観がある。この小国地方は沸蓋山をはじめとする亀坊連山、久住山を中心とする久住連山、外輪山といった山々に周囲を囲まれた小盆地に似た地形である。こうした地勢を決定づけた要因は、約35万年前からの大きく４回に区分される阿蘇山を中心とした火砕流の噴出・流下によるところが大きい。なかでも紀元前3万3000年頃の阿蘇４火砕流を伴う噴火は、現在の阿蘇谷のカルデラ地形を形成した結果、小国地方と熊本地方の平野部とを一見地理的に隔絶したものとした。こののち阿蘇の大規模な火山活動はこれを最後に沈静化し、やがて山々から流れ出した水はひとつの川となって台地を侵食し、多くの小規模な侵食谷や河岸段丘を形成し、現在の基本地形を形作った。

河川は小国地方の歴史的特色を決定付けるうえで欠かせない要素である。小国地方を流れる湯田川・中原川・馬場川・田中川・満願寺川・田原川といった小河川は、いずれも北外輪山あるいは久住連山を水源とし太古から人々の生活に大きく係わってきた。これらは杖立川に合流し、やがて九州島で最大流域面積を誇る筑後川となって大分県日田地方・福岡県久留米地方を通り有明海に注ぐ。地蔵原遺跡はこうした小河川の一つ、北外輪山を水源とする中原川の浸食作用により形成された河岸段丘の一端、南小国町大字中原字地蔵原にある。

第2節　歴史的環境

【旧石器時代】

小国地方に人類の足跡が認められるのは、旧石器時代にさかのぼる。代表的なものとして小国町下城遺跡（424－004）、沸蓋山麓西側に位置する耳切遺跡（424－041）、外輪山山頂、象ヶ鼻付近の象ヶ鼻遺跡群（421－028～037）などが挙げられる。耳切遺跡・象ヶ鼻遺跡群など標高の高い地点での所在は注目すべきだが、下城遺跡の存在から小国地方全域で人々が活動していたと思われる。耳切遺跡ではＡＴ降下以前の文化層が２面確認されたほか、製品・石核・剥片などが出土し接合関係がみられた。下城遺跡では礫の集合と分布が確認されている。

生産地遺跡では、外輪山下城遺跡より北東に約３ｋｍの山中には黒耀石の原産地である下果遺跡（424－044）のほか、象ヶ鼻遺跡群近辺のカルデラ壁下部では、いわゆる「阿蘇産黒曜石」の原石露頭が確認されている。

【縄文時代】

縄文時代の遺跡は古くから表採資料によって存在が確認されているが、中心部では割合確認数は少ない。その一方で外輪山頂上周辺に多数の遺跡が知られている。こうした偏りは分布調査の限界によるものと思われ、小国地方全域にわたって未確認の遺跡が多数存在することが予想される。早期の遺跡として下城遺跡（押型文土器・撚糸文土器）、耳切遺跡（押型文土器・手向山式土器・平栫式土器・塞ノ神式土器）、小国町宮原の小国中学校内の上ノ下湯原遺跡（424－010、押型文土器・撚糸文土器・条痕文土器）、南小国町満願寺の肥前湯遺跡（423－065、押型文土器）、木落牧場遺跡群（421－015～018、押型文土器・条痕文土器）などが挙げられる。

前期の遺跡として確実なものは、先の肥前湯遺跡（曽畑式土器・轟式土器）耳切遺跡（曽畑式土器）城の園遺跡（424－020）がある。

中期・後期の遺跡は、表採資料によって確認されたもので若干数に過ぎない。肥前湯遺跡（中期、阿高式土器、御手洗ａ式土器）のほか、南小国町満願寺の田の原Ａ・Ｂ遺跡（423－063・064、中期、阿高式土器）、外輪山山頂付近の産山村笹蔓遺跡（425－009、中・後期）などを挙げうる。

晩期の遺跡は、耳切遺跡で突帯文期とみられる遺構が確認されているほか、南小国町菰田遺跡（423－026）周辺では、晩期の土器資料が表採されている。

【弥生時代】

この時期の遺跡の分布密度も、縄文時代と大きな差異は認められない。依然として、外輪山山頂付近に確認されている大部分の遺跡が存在する。注目されるのは、中心部の小河川沿いの平地に遺跡が出現することである。中原川流域では今回の調査対象である南小国町地蔵原遺跡（423－031、中期）、その対岸に立地する同町中原遺跡（423－035、後期）、馬場川と田中川との合流点付近では同町横瀬遺跡（423－014）・陣内遺跡（423－027、後期、野辺田式）、杖立川と樅ノ木川の合流点付近では先述した下城遺跡、同じく小国町宮原の上ノ下湯原遺跡では終末期の住居址２軒が調査されている。こうした傾向は、外輪山山頂付近で生活を営んでいた集団との差異によるものか、あるいは同集団の活動に起因するものか明確ではないが、少なくとも川沿いの方が集団規模も大きくかつ定住性を志向していたと思われ、農耕活動も活発に行われていたと推測される。

河川流域における集団の活動が活発であったことは、今回の調査も併せて小国町下城神社、同町宮原両神社、南小国町市の原天満宮に伝わる銅矛・銅戈が示している。これらは、いずれも中期末頃から後期前半頃の所産と思われ、福岡県地方から筑後川を媒介として搬入された威信財であり、活発な地域間交流があったことを示す資料といえる。小国地方の表採される土器資料は黒髪式土器以降であり、先の青銅器も併せて中期後半以降に人の活動が活発化したといえる。

【古墳時代】

この時代の確認されている遺跡は比較的少なく、外輪山頂上付近においては激減する傾向にある一方で、川沿いでは弥生時代から継続して活発な活動が展開していたと思われる。

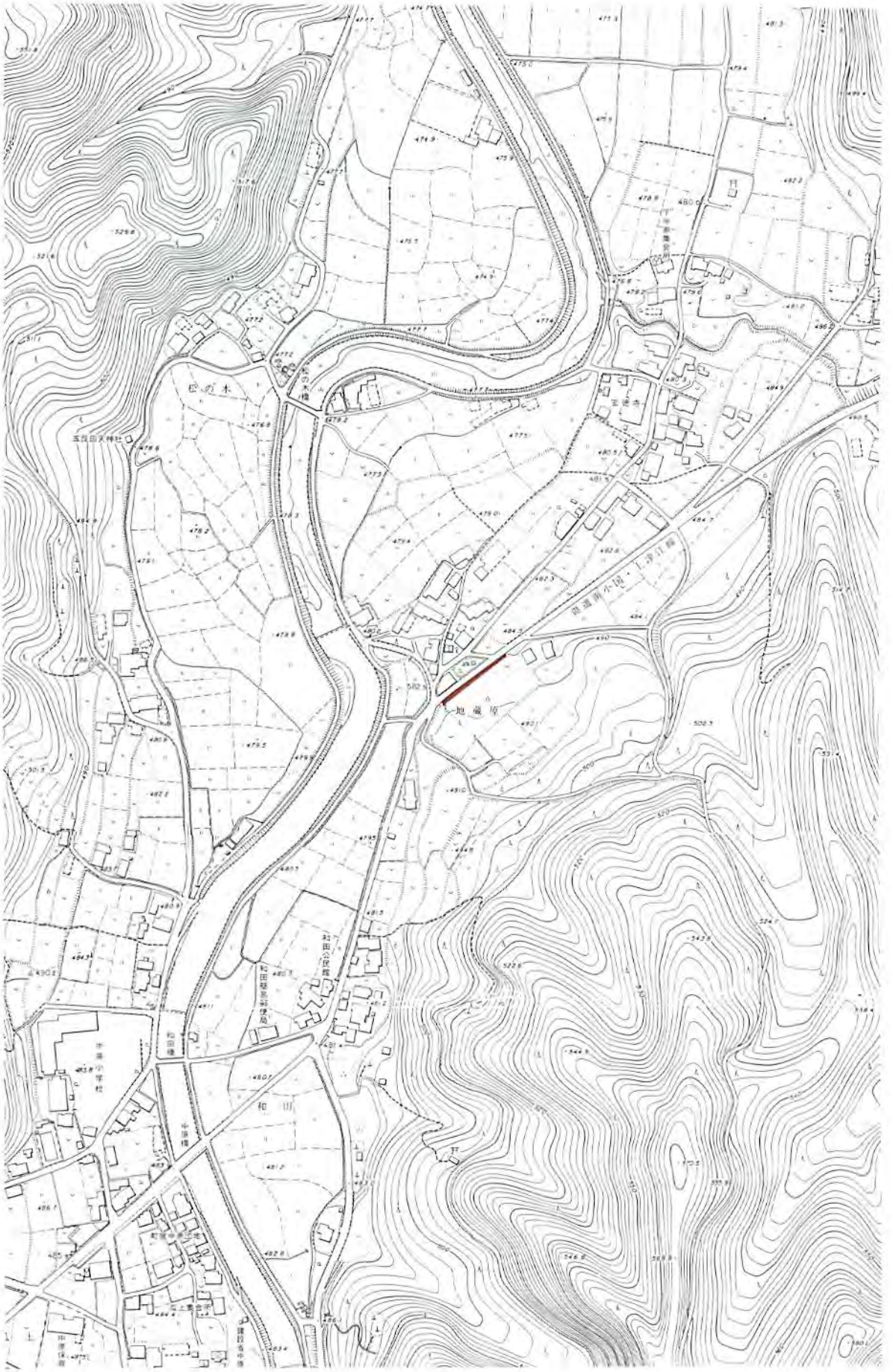
主な集落と思われる遺跡はすべて表採資料によるものだが、下城遺跡や地蔵原遺跡をはじめ、南小国町赤馬場所在の遠見塚遺跡（423－024）、田の原川流域の同町満願寺女子夫遺跡（423－044）などが挙げられる。墳墓は、満願寺から宮原にかけて流れる田の原川流域に多くみられる。その形態は古墳・箱式石棺・横穴がある。古墳は現在確認できるもので、宮原に梅木古墳（424－011）、小国町上田所在の城の園古墳（424－019）がある。後者は組合式箱式石棺が３基あり、うち２基には直刀と石鏃数個が副葬されていたと伝わる。箱式石棺は、宮原・下城付近で数ヶ所発見されたといわれるが、詳細は不明である。また小国町北里に所在する石櫃城（424－015）は築城の際に石棺が発見されたことに名の由来がある。横穴は、宮原より西へ約1ｋｍ付近に田の原川を挟んで東帯田横穴群（424－016）、神篭山横穴群（424－016）がある。神篭山横穴群では、勾玉・管玉・金環・銀環が出土している。こうした墳墓の造墓活動に対応した集落は、現状から未だ確認されていないものが多く存在することが予想される。

【古代～中世】

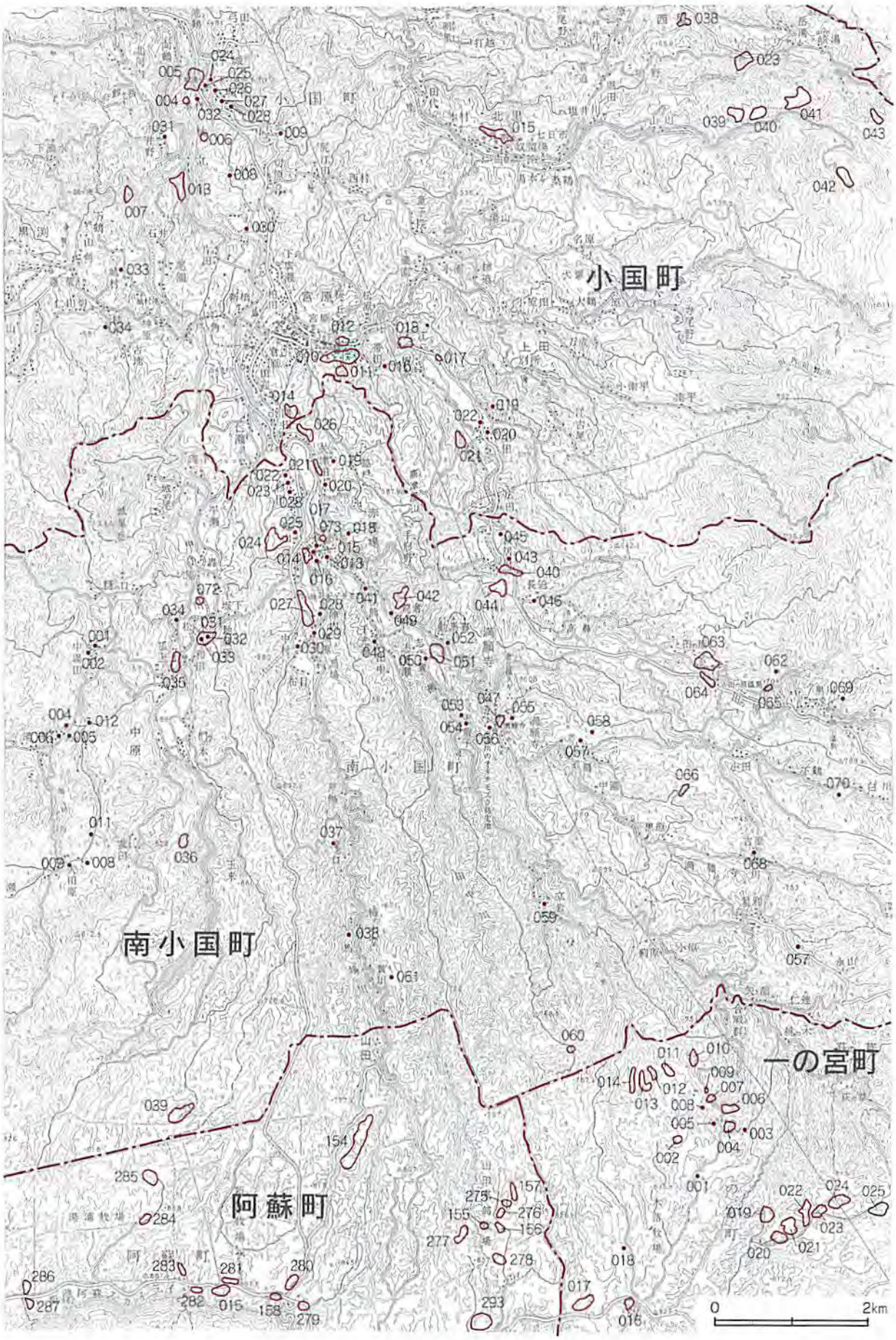
古代の遺跡は表採資料により数ヶ所が確認されているに過ぎない。古代から中世にかけての生産遺跡として黒川たたら跡（423－069）、金山たたら跡（423－070）が挙げられる。

古代以来小国地方は阿蘇氏の勢力下にあったが、1255年（建長7年）鎌倉幕府５代執権北条時頼の弟である遠江守六郎時貞が鎮西奉行として下向し、著名な満願寺を建立する。こうしたこともあって小国地方には中世の石塔をはじめ多くの文化財が伝わっている。

鎌倉幕府滅亡後は下城氏と北里氏が台頭し、各所で城を築いた。中世城については、『小國郷史』（禿　迷　盧）に詳しい。中世末期の島津氏の来寇後は、加藤清正などの支配を経て、細川氏の治世となる。



第 1 図　地蔵原遺跡位置図 (S:1/5000)



第２図　地蔵原遺跡周辺主要遺跡分布図

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	形態	備考
小国町					
004	下城神社	下城 本村	縄文・弥生	包蔵地	広鉢・銅矛4
005	下城	下城 下城	旧石器～中世	集落・城	
006	鳶ノ尾城跡	下城 鳶ノ尾	中世	城	
007	子鶴城跡	黒渕 向力山	中世	城	
008	十三塚(六地蔵)	下城	中世	石造物	
009	名称不明	下城 宇土		寺社	
010	上ノ下湯原	宮原 上下湯原	縄文・弥生	包蔵地	縄文早期・前期土器・弥生土器
011	梅木古墳	宮原 上下湯原	古墳	古墳	人骨
012	両神社	宮原 宮原	弥生	包蔵地	広鉢・銅矛1
013	木戸城跡	宮原 城戸	中世	城	
014	鎮力城跡	宮原 城山	中世	城	
015	石橋城跡	北里	中世	城	
016	東帯田横穴群	宮原 東帯田	古墳	古墳	
017	神籠山横穴群	上田 坂本	古墳	古墳	勾玉・管玉・金環・銀環
018	入江城跡	宮原	中世	城	
019	城の園古墳	上田 城の園	古墳	古墳	土師器・須恵器
020	城の園	上田 城の園	縄文	包蔵地	縄文前期土器
021	西原城跡	上田 蔵鶴	中世	城	
022	阿弥陀寺跡	上田 城の園	中世	寺社	
023	守護神城跡	西里 守護神	中世	城	
024	花山六地蔵	下城 坂下	中世	石造物	
025	花山五輪塔群	下城 坂下	中世	石造物	
026	大正八年銘五輪塔	下城 坂下	中世	石造物	
027	坂下笠塔婆	下城 坂下	中世	石造物	地蔵尊
028	坂下笠塔婆	下城 坂下	中世	石造物	阿弥陀
030	土田六地蔵	宮原 土田(はんだ)	中世	石造物	
031	市井野五輪塔	黒渕 市井野	中世	石造物	
032	高屋敷	下城 坂下	中世	包蔵地	
033	城村大杉と石塔	黒渕 城村	中世	石造物	
034	柿木の五輪塔	黒渕 柿木	中世	石造物	
038	北里A	北里 明野	縄文	包蔵地	
039	西里A	西里	旧石器・縄文	包蔵地	
040	西里B	西里	旧石器・縄文	包蔵地	
041	耳切	西里 耳切	旧石器・縄文	集落	
042	西里C	西里	縄文	包蔵地	
043	西里D	西里	縄文	包蔵地	
南小国町					
001	中湯田の六地蔵	中湯田	中世	石造物	
002	中湯田の口屋跡	中湯田	近世	包蔵地	
004	湯田の口屋跡	湯田	近世	包蔵地	
005	湯田の六地蔵	湯田	中世	石造物	
006	湯田の宝篋印塔	湯田	中世	石造物	
008	月山妙鏡禅尼墓	矢田原	中世	墓	
009	矢田原の石塔	矢田原	中世	石造物	
011	耳取の道標	耳取	近世	石造物	
012	湯田の猿田彦大神	湯田	近世	石造物	
013	市の原天満宮銅戈	赤馬場市原・上町	弥生	考古資料	奉納品で出土地不明
014	横瀬	市原・横瀬	弥生	包蔵地	
015	本町道標	市原・本町	近世	石造物	
016	秋葉山大明神	市原・本町	中世	寺社	
017	下町道標	市原・下町	近世	石造物	
018	赤馬場の猿田彦尊	赤馬場	近世	石造物	
019	脇戸の猿田彦大神	脇戸	近世	石造物	
020	矢津田の猿田彦	矢津田	近世	石造物	
021	法性寺の厚度佛	矢津田	中世	有形	
022	下杉田の五輪塔	下杉田	中世	石造物	
023	中杉田の猿田彦	中杉田	近世	石造物	
024	遠見塚	遠見塚	弥生～中世	包蔵地	
025	上杉田の庚申塔	上杉田	中世	石造物	
027	陣内	満願寺 陣内	弥生	集落	野辺田式
028	菅原神社の鳥居	森園	近世	建造物	
029	長福寺の供養塔	黒原	中世	石造物	
030	中村の猿田彦大神	中村	近世	石造物	
031	地蔵原	地蔵原	縄文～中世	包蔵地	
032	地蔵原の六地蔵	地蔵原	中世	石造物	
033	地蔵原の道標	地蔵原	近世	石造物	
034	猿田彦大神	轟	近世	石造物	
035	中原	瓜上	弥生	包蔵地	弥生後期
036	菰田	菰田	弥生～中世	包蔵地	
037	銭甕塚	西梅木堂	中世	墳墓	
038	岩屋	西梅木堂	縄文～中世	包蔵地	
039	押戸の石	中原 湯風呂		祭祀	
040	亀ヶ城跡	満願寺 陣内 外	中世	城	中世城跡
041	竹の熊の六地蔵	竹の熊	中世	石造物	
042	比良(平)城跡	平	中世	城	
043	陣内の石塔	満願寺 陣内	中世	石造物	
044	女子夫	女子夫	縄文～中世	包蔵地	
045	旗返の経碑	旗返	中世	石造物	

第１表　地蔵原遺跡周辺主要遺跡地名表（1）

遺跡番号	遺跡名	所在地	時代	形態	備考
046	長迫の猿田彦大神	長迫	近世	石造物	
047	満願寺の伝経果大和尚の墓	満願寺	中世	墓	
	満願寺石塔群	満願寺 堂の本	中世	石造物	
	満願寺の宝塔	満願寺 志津	中世	石造物	文中四年銘(1375)
	満願寺庭園	満願寺 志津	中世	園池	
048	千光寺板碑	赤馬場 千光寺	中世	石造物	天養元年銘　十一面観世音菩薩立像・四天王立像・千手観音立像
049	薬師堂	荒倉	中世	建造物	普面金剛あり
050	志賀瀬の六地蔵	志賀瀬	中世	石造物	
051	動目喜城跡	満願寺 城山	中世	城	
052	動目喜の道標	満願寺 動目喜	近世	石造物	
053	志童子の摩崖仏	志童子	中世	石造物	
054	志童子猿田彦大神	志童子	近世	石造物	
055	千人塚	満願寺 堂の本	中世	墳墓	
056	満願寺の五輪塔	川西	中世	石造物	
057	扇の宝篋印塔	扇	中世	石造物	
058	志賀殿の墓	扇	中世	墓	
059	立岩の猿田彦大神	立岩	近世	石像物	
060	城ヶ鼻城跡(陣ヶ鼻城跡)	満願寺 作ヶ倉	中世	城	縄文式土器が出土する
061	午房草の猿田彦大神	午房草	近世	石造物	
062	黒川の道標	満願寺 黒川	近世	石造物	
063	田の原A	満願寺 田の原	縄文	包蔵地	
064	田の原B	満願寺 田の原	縄文	包蔵地	
065	肥前湯	満願寺 田の原	縄文	包蔵地	縄文中期土器・十字形石器
066	臼内切	満願寺	縄文	包蔵地	
067	永山の猿田彦大神	永山	近世	石造物	
068	猿田彦大神	吉宗	近世	石造物	
069	黒川たたら跡	満願寺 黒川	古代・中世	生産	
070	金山たたら跡	満願寺 金山	古代・中世	生産	
071	瀬の本の石塁	瀬の本	近世	石塁	
072	中原田尻	中原田尻	弥生	包蔵地	土器片
073	東市原	赤馬場字市合	弥生	包蔵地	土器片
一の宮町					
001	合戦群A	中通 北山	縄文	包蔵地	
002	合戦群B	中通 北山	縄文・弥生	包蔵地	
003	合戦群C	中通 北山	旧石器・縄文	包蔵地	
004	合戦群D	中通 北山	縄文	包蔵地	
005	合戦群E	中通 北山	古墳	包蔵地	土師器片採集
006	合戦群F	中通 北山	縄文	包蔵地	
007	合戦群G	中通 北山	旧石器・縄文	包蔵地	
008	合戦群H	中通 北山	旧石器	包蔵地	
009	合戦群I	中通 北山	縄文	包蔵地	
010	合戦群J	中通 北山	縄文	包蔵地	
011	合戦群K	中通 北山	縄文～古墳	包蔵地	
012	合戦群L	中通 北山	縄文	包蔵地	
013	合戦群M	中通 北山	縄文	包蔵地	
014	合戦群N	中通 北山	縄文	包蔵地	
016	木落牧場B	中通 北山	縄文	包蔵地	
017	木落牧場C	中通 北山	縄文	包蔵地	
018	木落牧場D	中通 北山	縄文	包蔵地	石鏃採集
019	小柏谷A	中通 北山	古墳	包蔵地	土師器片採集
020	小柏谷B	中通 北山	縄文	包蔵地	
021	小柏谷C	中通 北山	縄文	包蔵地	石鏃採集
022	小柏谷D	中通 北山	縄文	包蔵地	
023	小柏谷E	中通 北山	縄文	包蔵地	
024	小柏谷F	中通 北山	縄文	包蔵地	石鏃2個採集
025	小柏谷G	中通 北山	縄文～中世	包蔵地	土器片採集
阿蘇町					
154	山田東部牧場A	山田	縄文～弥生	包蔵地	土器、剥片
155	山田東部牧場E	山田	縄文	包蔵地	土器
156	山田東部牧場D	山田	縄文	包蔵地	
157	山田東部牧場A	山田	縄文	包蔵地	土器、剥片
158	湯浦B	湯浦	旧石器～縄文	包蔵地	剥片、石鏃
275	山田東部牧場B	山田	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
276	山田東部牧場C	山田	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
277	山田東部牧場F	山田	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
278	山田東部牧場G	山田	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
279	湯浦C	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
280	湯浦D	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
281	湯浦E	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
282	湯浦F	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
283	湯浦G	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
284	湯浦H	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
285	湯浦I	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
286	西湯浦D	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
287	西湯浦E	湯浦	縄文・弥生	包蔵地	土器(縄文・弥生)
293	山田東部牧場J	山田	旧石器・縄文	包蔵地	縄文前期土器・石器

第２表　地蔵原遺跡周辺主要遺跡地名表（2）

第Ⅲ章　調査の概要

第１節　調査の方法

調査は阿蘇地域振興局土木部工務課及び施行業者と協議を行い、調査箇所中央に貯水池及び排水路が存在したため、この施設を境に北側をⅠ区・南側をⅡ区と設定し調査区を大別した。調査は表土剥ぎから開始、清掃を経て基準作りとして１辺が5mのグリッド設定を行った。グリッドは国土座標で、東西軸をアラビア数字・南北軸をアルファベットで示した（第4図参照）。

遺構は平面プラン確認後、土層堆積状況確認のためセクションベルトを設定し検出作業を行う。平面図・断面図・土層図を作成した。写真撮影はモノクロ・カラースライドの２種を用い、遺物出土検出時・完掘時に行った。包含層調査では各グリッドを単位とし掘下げを行い、平板・光波を用い遺物取り上げを行った。

調査はⅡ層調査後、Ⅲ層の掘下げを行った。Ⅱ層からは主に弥生～近世の遺物が、Ⅲ層からは弥生期の遺構・遺物が出土した。第4図　遺構配置図・地形図（1）はⅡ層検出面、(2) はⅢ層検出面を提示した。Ⅱ層検出面に存在する円状プランは後世の撹乱である。

第２節　層位と包含層

本遺跡の基本的な土層は第3図のとおりである。

第Ⅰ層－Ａ　褐灰色砂質土

表土耕作土であり現耕作地である。かなりの撹乱を受けている。

第Ⅰ層－Ｂ　褐灰色砂質土

表土耕作土　黒色ブロックを含む　よくしまる

第Ⅱ層　黒褐色土　黒色ブロックを含む　よくしまる

弥生～中世以降の遺物の出土が認められるが、撹乱が激しい。

第Ⅲ層　黒色土　ややしまる

弥生期の包含層である。

第Ⅳ層　暗褐色粘質土　よくしまる

無遺物層

第Ⅴ層　オリーブ黒色粘質土

粘性を持つ無遺物層できめ細かい。

第Ⅵ層　オリーブ黒色粘質土　硬くしまる

無遺物層で粘性を持つが、砂利を多く含む。

第Ⅶ層　暗褐色粘質土

無遺物層で粘性を持つが、明黄褐色粒を含む。

第Ⅷ層　オリーブ灰色粘質土

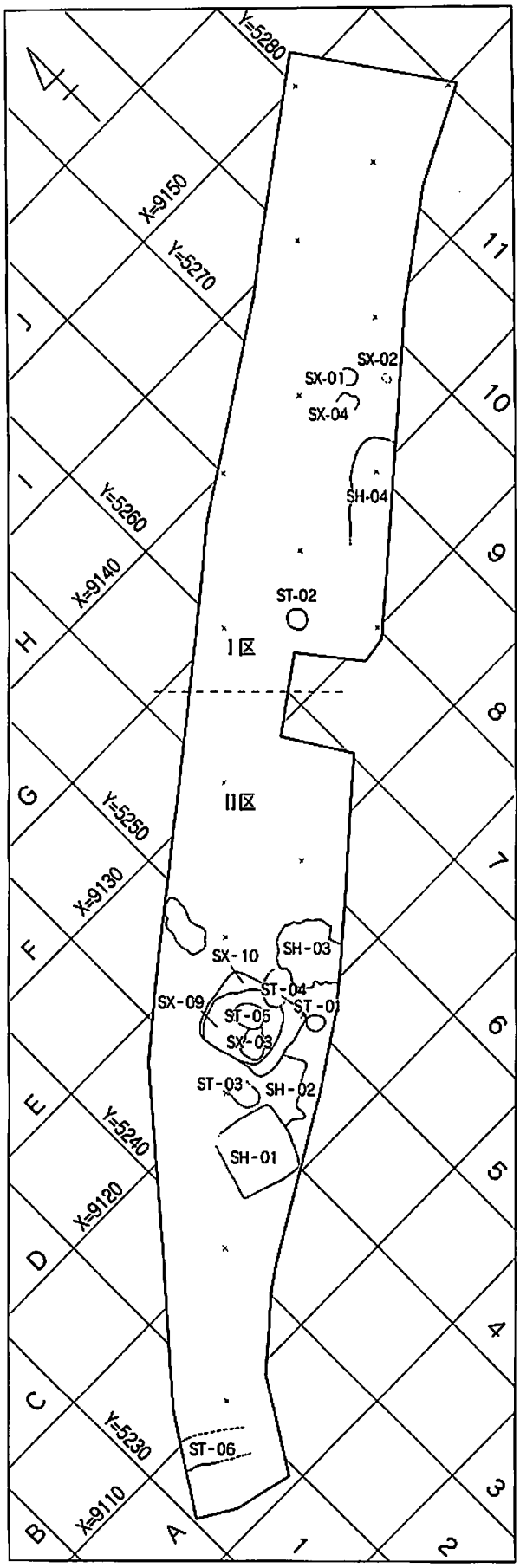
無遺物層で粘性を持つが、明黄褐色粒を多く含む。

第Ⅸ層　オリーブ黒色粘質土

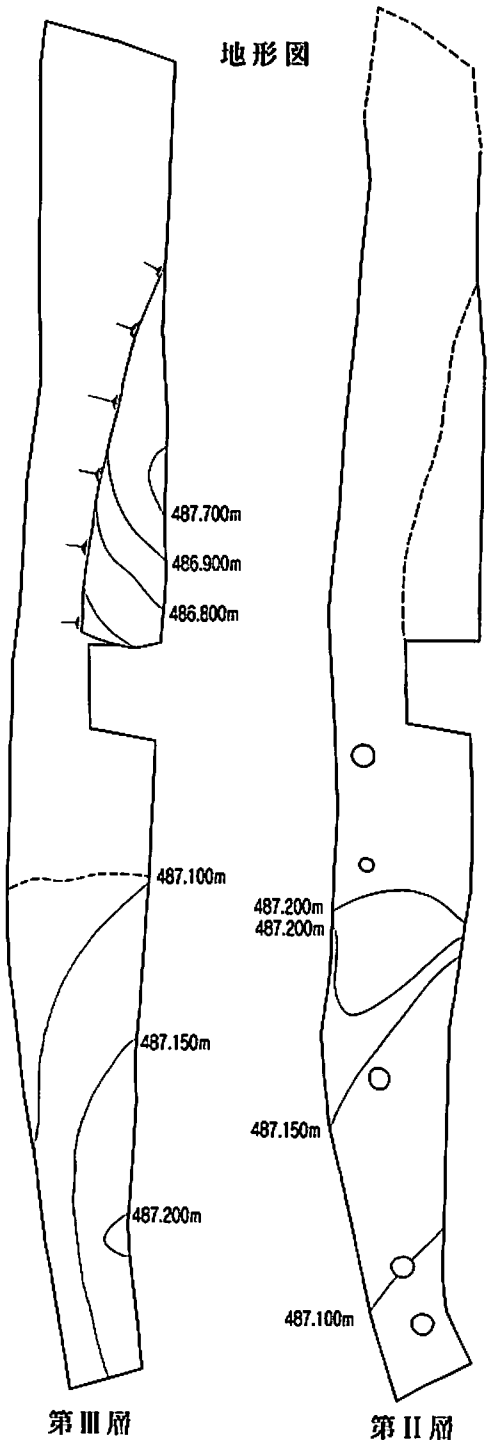
無遺物層で粘性を持つが、明黄褐色粒を含む。

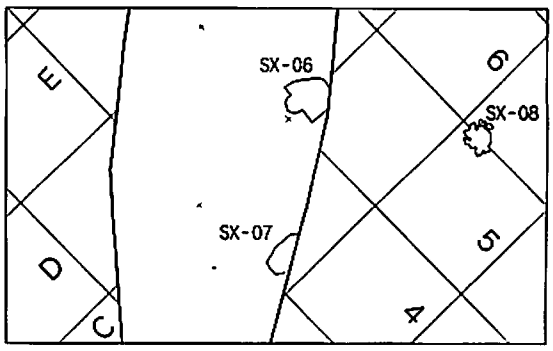
		土色帳
Ⅰ－A	表土耕作土	7.5YR 4/1
Ⅰ－B	表土耕作土　黒色ブロックを含む　よくしまる	7.5YR 4/1
Ⅱ	黒褐色土　黒色ブロックを含む　よくしまる	10YR 3/2
Ⅲ	黒色土　ややしまる	N　2/
Ⅳ	暗褐色粘質土　よくしまる	7.5YR 3/3
Ⅴ	オリーブ黒色粘質土	10Y　3/1
Ⅵ	オリーブ黒色粘質土　硬くしまる	10Y　3/2
Ⅶ	暗褐色粘質土　明黄褐色粒を含む	7.5YR 3/3
Ⅷ	オリーブ灰色粘質土　明黄褐色粒を多く含む	10Y　4/2
Ⅸ	オリーブ黒色粘質土　明黄褐色粒・粘性を含む	5Y　3/1

第３図　遺跡模式土層図



遺構配置図 (1)





遺構配置図 (2)

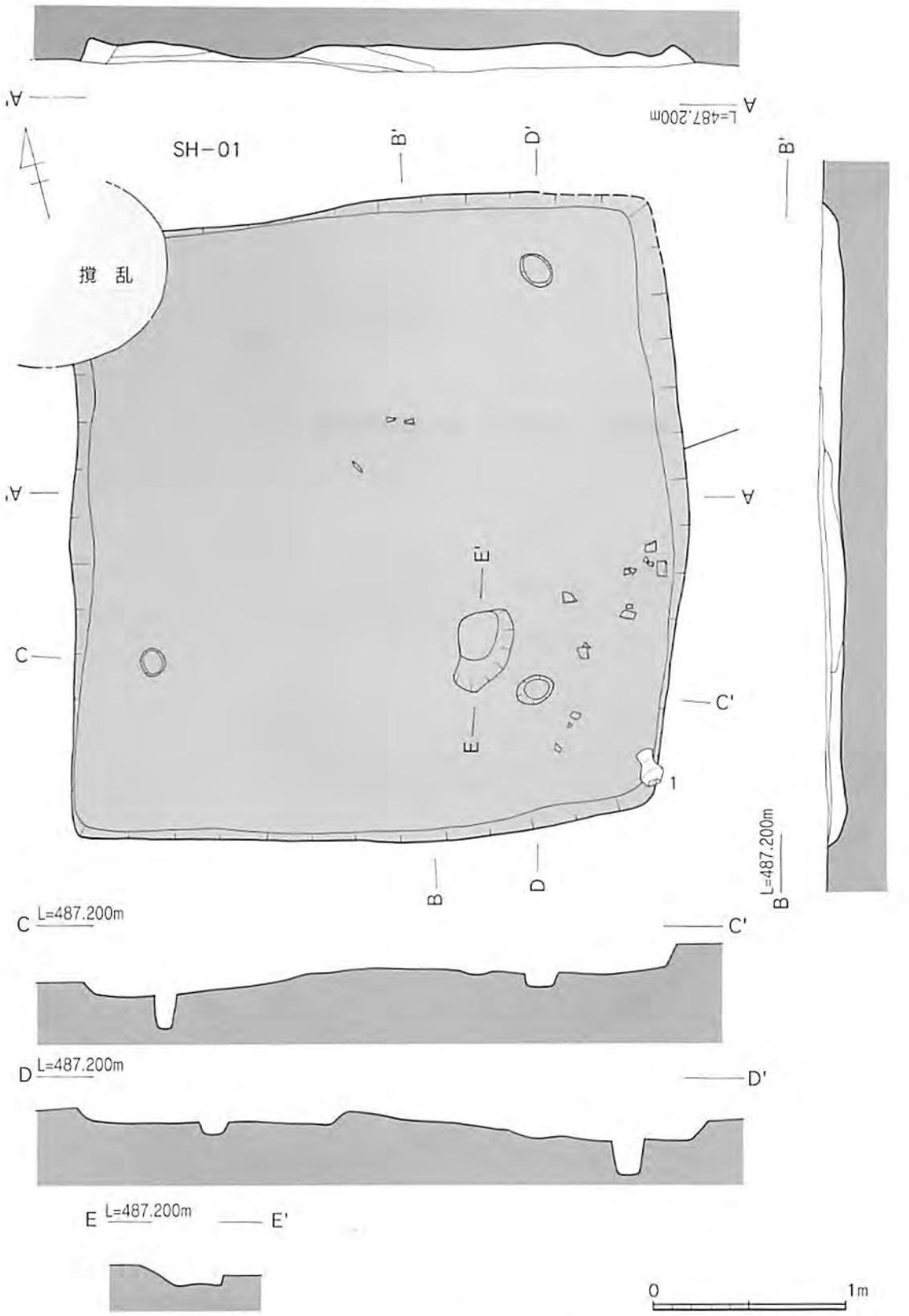
第４図　遺構配置図(1･2) グリッド図及び地形図

第Ⅳ章　遺構

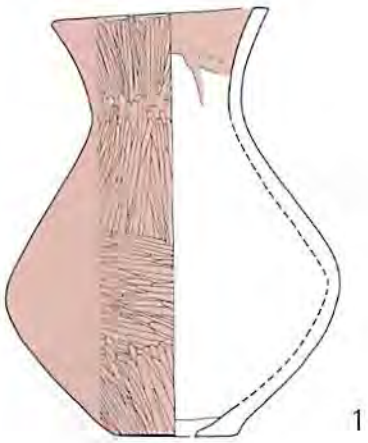
第1節　住居

住居（ＳＨ）　（第5～10図）

ここでは住居をＳＨで表記した。尚、後述するが住居状の遺構もここに配置した。



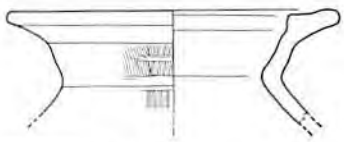
第５図　SH－01　実測図



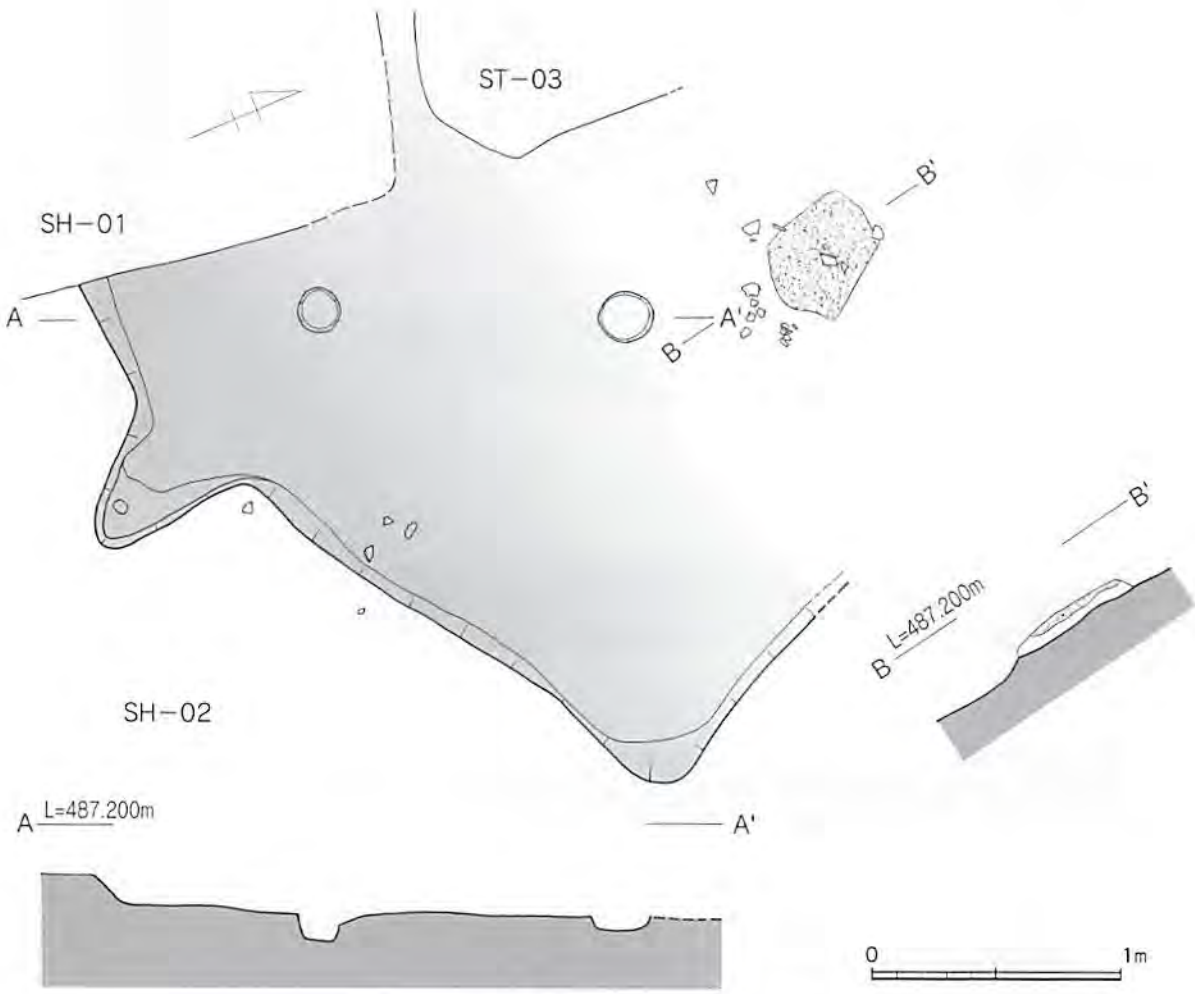
SH－01（第5・6図）

SH－01は3・4－Cグリッドに於いて検出された。南西隅は撹乱により破壊されているが、3.1m×3.2mの正方型を呈している。南側のコーナーの端部には僅かであったが、ほぼ全体に10cm程の厚みで黄色粘土質での貼床を施していた。柱穴は3本確認されたが貼床を剥がした後に検出され、柱痕跡は確認できなかった。

遺構中心より南側に浅い掘り込みが検出されたが、これも貼床下位のもので焼土・カーボンなど炉としての要素が検出されなかった。またこの貼床を剥がしたところ、南側隅から小型壺1が横転した状態で出土した。丹塗磨研が施された非常に精巧なもので



第６図　SH－01　出土遺物実測図（1/3）



第７図　SH－02　実測図

あり、外器面は磨きが施され口縁部から下位に縦→縦→横→縦の調整である。胴部下位から底部の調整は下から上の調整で、口縁はラッパ状に開き、口唇部は平坦である。頸部は短頸型であり、胴部は張り出す算盤状である。また底部には径2cm強程の穿孔があった。この穿孔はその状態から後半に述べる甕胴部下位に見られる敲打痕によるものではなく、錐状の工具により外部から回転により穿ったものであろう。底部の穿孔は容器として本来の目的を逸したものであるため儀礼の範疇として考えるべきである。2は壺である。口縁部から胴部上位資料で口縁部はやや鋤先状を呈し口唇部に向かいやや上向く。頸部から胴部へは強い屈曲になり、頸部の調整はハケ目が施される。

ＳＨ－０２（第７図）

SH－02は4－Cグリッドに於いて検出された。これもSH－01と同様に貼床が見られるが、西側をSH－01・ST－03に切られており、北側は削平を受けていたため全体の形態は不明である。また南側には張り出し部が見られるが、全体のプランは正方形を呈するものと想定される。また柱穴は南側に１本、中央部に１本確認された。柱痕跡は確認できなかったが、これもSH－01と同じく貼床排出後に検出されたものである。炉は検出されなかったが、僅かであるが東側に0.5m×0.3m不定形硬化面が見られた。

SH－03・04は住居としての柱穴や炉など検出されず、住居としての判定は困難であるが、住居状を呈しているためここに仮置きする。

ＳＨ－０３（第８・９図）

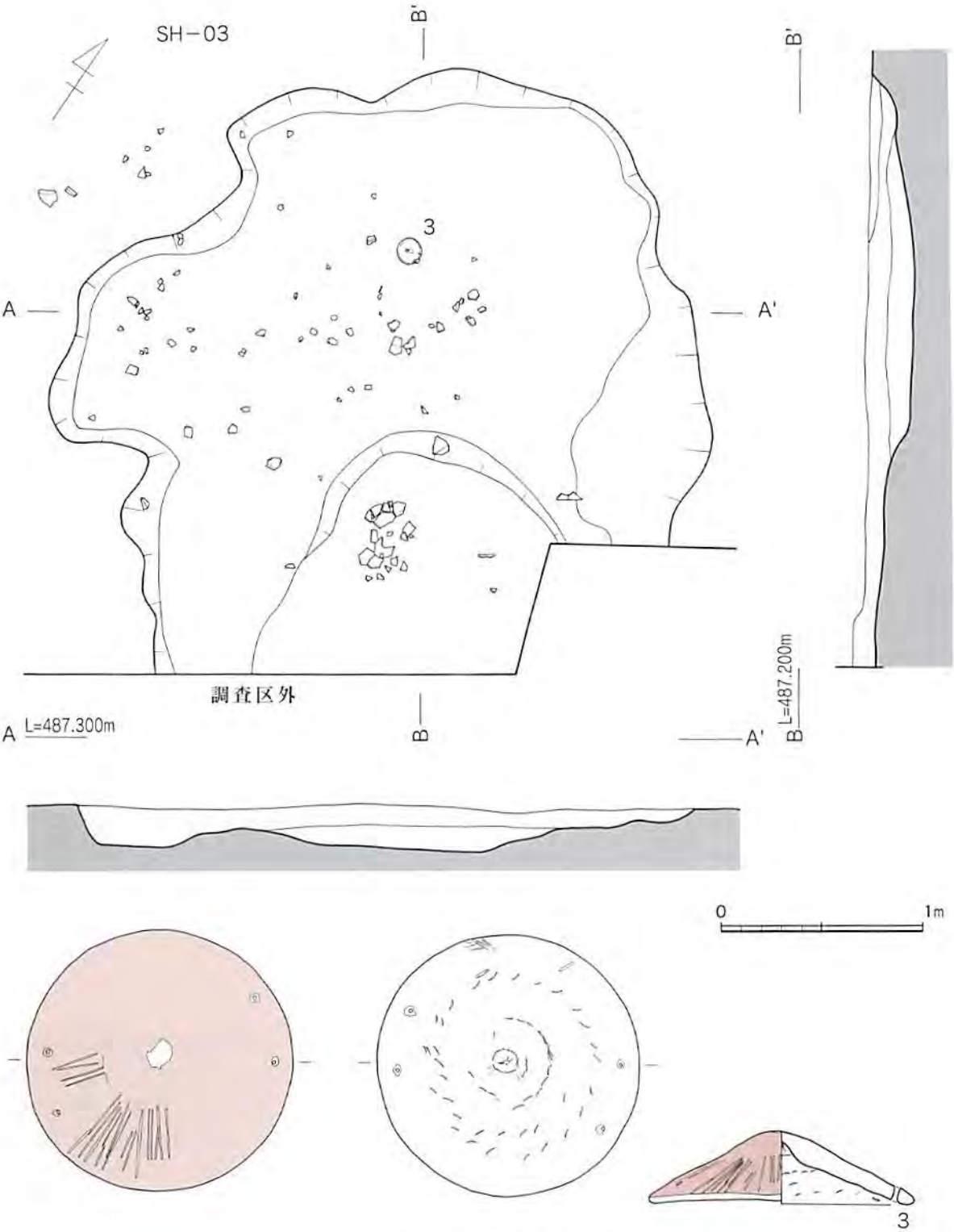
SH－03は５－Ｄグリッドに於いて検出された。円形を呈するが明確な円形ではなくプランは花弁状に近く西側は調査区外である。遺構中央部西から完形の土器の3が出土した。3は蓋で口径13.1cm・器高3.5cmを測る。丈は僅かで天井部は一部欠損している。厚みは均一ではなく口縁部から天井部に向かい緩やかに厚みを増すが、天井部で急激に薄くなる。外器には丹塗が施され1mm強の暗文が確認される。内器面は爪痕が渦巻き状に見られ、調整の一部か文様を意識したのか不明である。径3mmの穿孔が対角に計４孔あり、対になる壺を固定するものである。また石器では1・2が出土している。

石器1は石包丁の二次加工品である。裏面は基部に向けて薄くなるように研磨しているため紐擦れ痕の大半が失われている。穿孔を意識しての二次加工が施されており、磨製石鏃を意識したものか。

石器2は砥石で全長8.65cm・幅1.45cmの小型品で角柱状を呈する。砥面は６面とも擦痕および磨痕が見られるがそのうちｃ面は大きく内湾し、それに対向するａ面は擦痕が顕著で上部に磨痕と見られる光沢とわずかなくぼみが確認される。ｄ面は中央に光沢と明確な稜を形成しない緩やかなくぼみが確認される。ｂ面は下部に光沢が見られるもののくぼみが明確でない。ｅ・ｆ面はいずれも粗めの擦痕が見られ、接するｂ・ｄ面端部が細くなる。使用石材は粘板岩である。目が細かいので仕上げ用と考えられる。角柱形で両端部が細くなる形状、石材から扁平片刃石斧の転用品の可能性も考えられる。

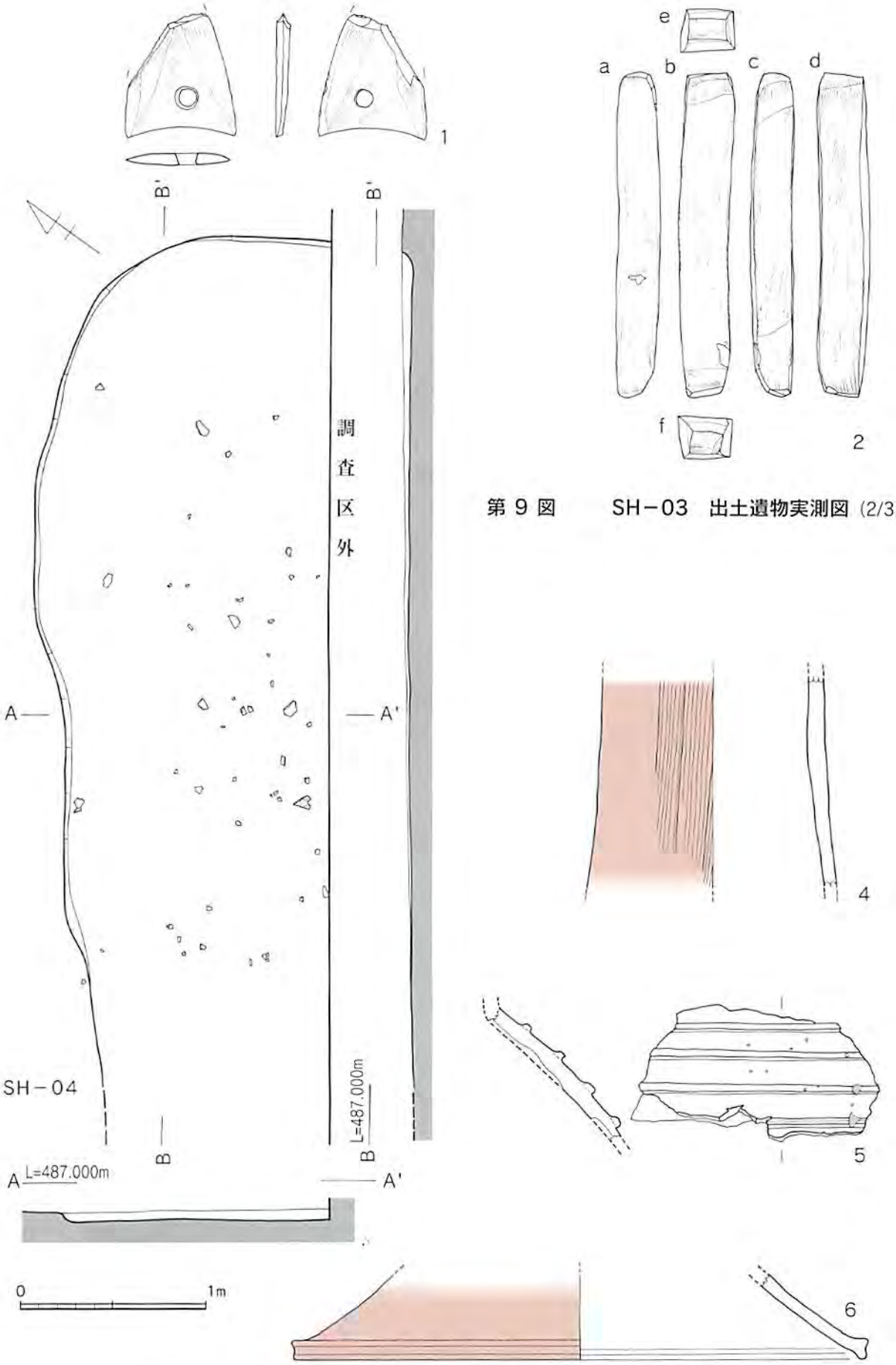
ＳＨ－０４（第10図）

SH－04は８－Ｆ・Ｇ、９－Ｆ・Ｇグリッドに於いて検出された。遺構の大半を調査区外と想定されるため、全体のプランは不明であるが、西側は削平されており楕円型を呈するか。埋土の残量も僅かで分層不可能であった。4は反転復元であるが、丹塗の筒形器台の脚部と思われ、縦方向のハケ目が確認される。6も反転復元で丹塗が施されている。裾部径は復元により20.3cmを測り、裾部端部は水平に伸び直角に落ち、沈線を施し裾先端部は丸みを帯びる。ローリングを受け風化が激しいが一部に暗文が確認される。4と同一個体か。5は壺の胴部上位資料で貼り付け突帯を施し、僅かであるが細沈線が確認される。胎土は精製されている。



第８図　SH－03　実測図・出土遺物実測図（1/3－3）

第 9 図　SH－03　出土遺物実測図 (2/3)



第 10 図　SH－04　実測図・出土遺物実測図 (1/3－4・5, 1/4－6)

第2節　土坑

土坑（ST）（第11～12図）

ここでは小規模な浅い掘り込み遺構を土坑としてＳＴと記号化した。

ＳＴ－01（第11図）

ST－01は５・６－Ｃグリッドに於いて検出された。0.9m×0.8m×0.3mの楕円状を呈した遺構である。埋土は分層ができたが、基本的には同一層で下層にはややしまりがみられる。土器細片が２点出土しているが、ローリングを受けていることから、何れも小破片で埋土内への流れ込みであろう。また破砕された砂岩と火受凝灰岩が出土している。

ＳＴ－02（第11図）

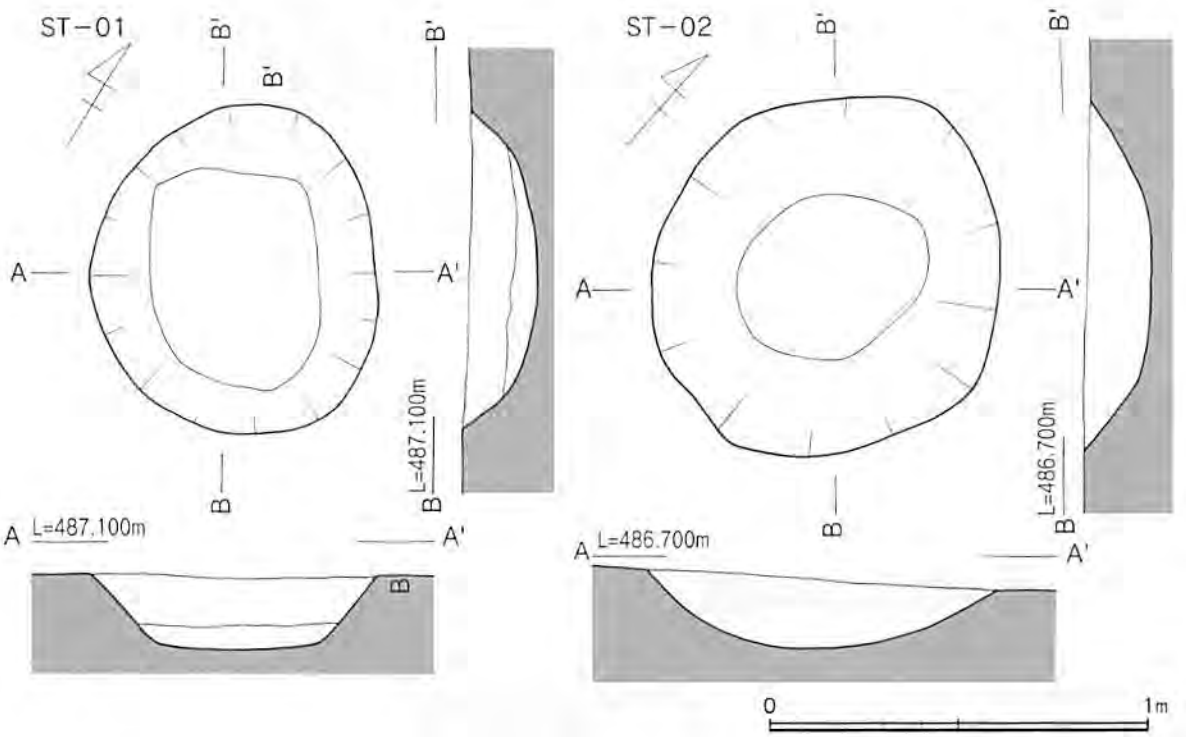
ST－02は７－Ｆグリッドに於いて検出された。0.9m×0.9m×0.2mのほぼ円形を呈している。 埋土は単一層である。遺物の出土も認められず、遺構の性格を把握するには条件が不足した。

ＳＴ－03（第12図）

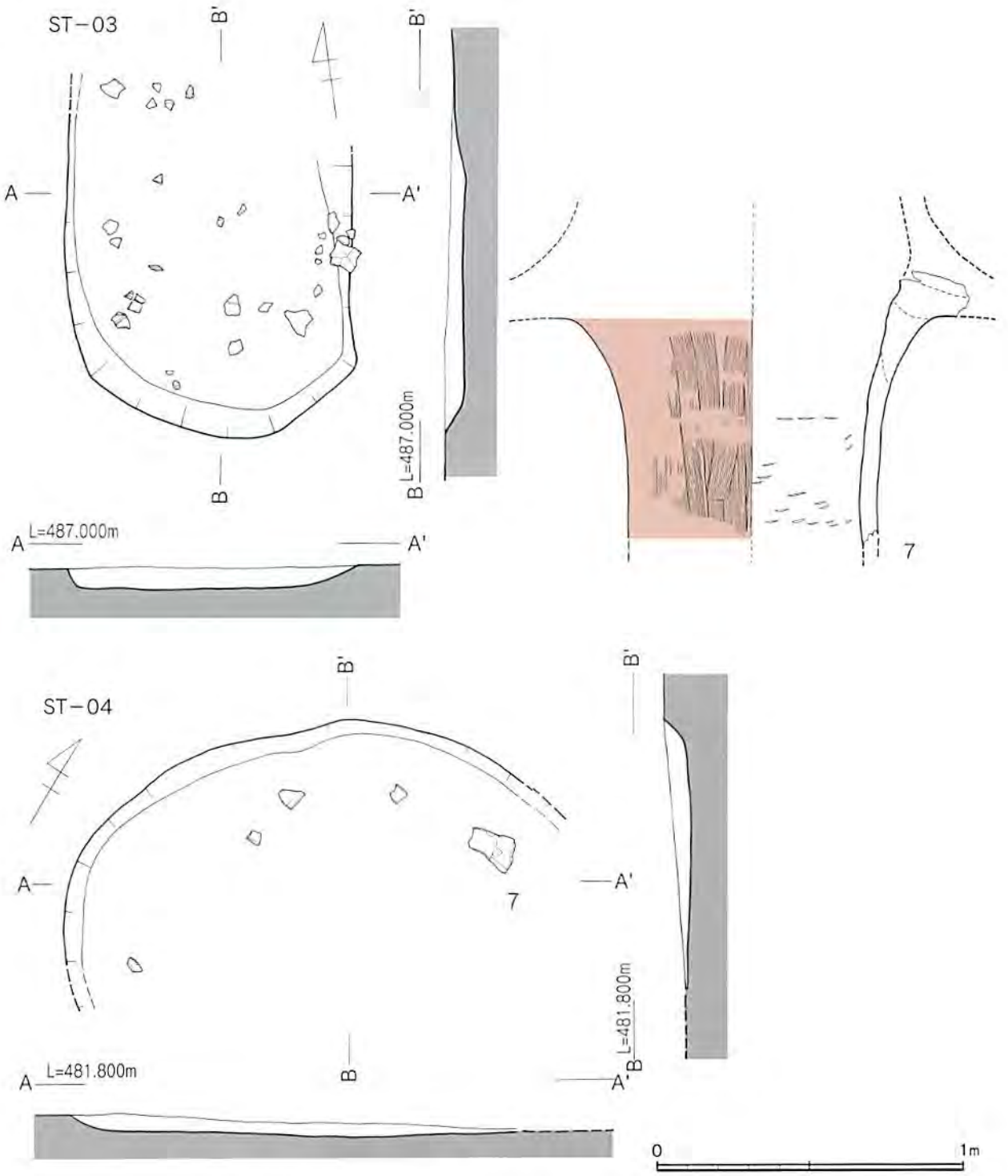
ST－03は４－Ｃ・Ｄグリッドに於いて検出された。遺構の大半に削平を受けているが楕円形を呈するか。埋土は単一層で分層はできず、土器細片が30点程と拳大の礫が埋土内から出土したが、土器は完形には恵まれず、一種の廃棄物を要した遺構であろうか。壺の破片77が埋土内から出土しているがSX－05を中心とするグリッドｅ・ｊと接合しているので、後述するエリア11（第43図）の項に掲載した。これも一種の廃棄場的な要素の遺構であろう。

ＳＴ－04（第12図）

ST－04は４・５－Ｄグリッドに於いて検出された。遺構東・北側に撹乱を受けているため、全体のプランは不明であるが楕円形を呈するものか。土器片が数点出土しているが、7は筒形器台の環部から脚部資料で外器はハケ目調整が見られる。内器はナデ調整に爪形が確認される。SX－05出土の19と比較して規模に差異がない。



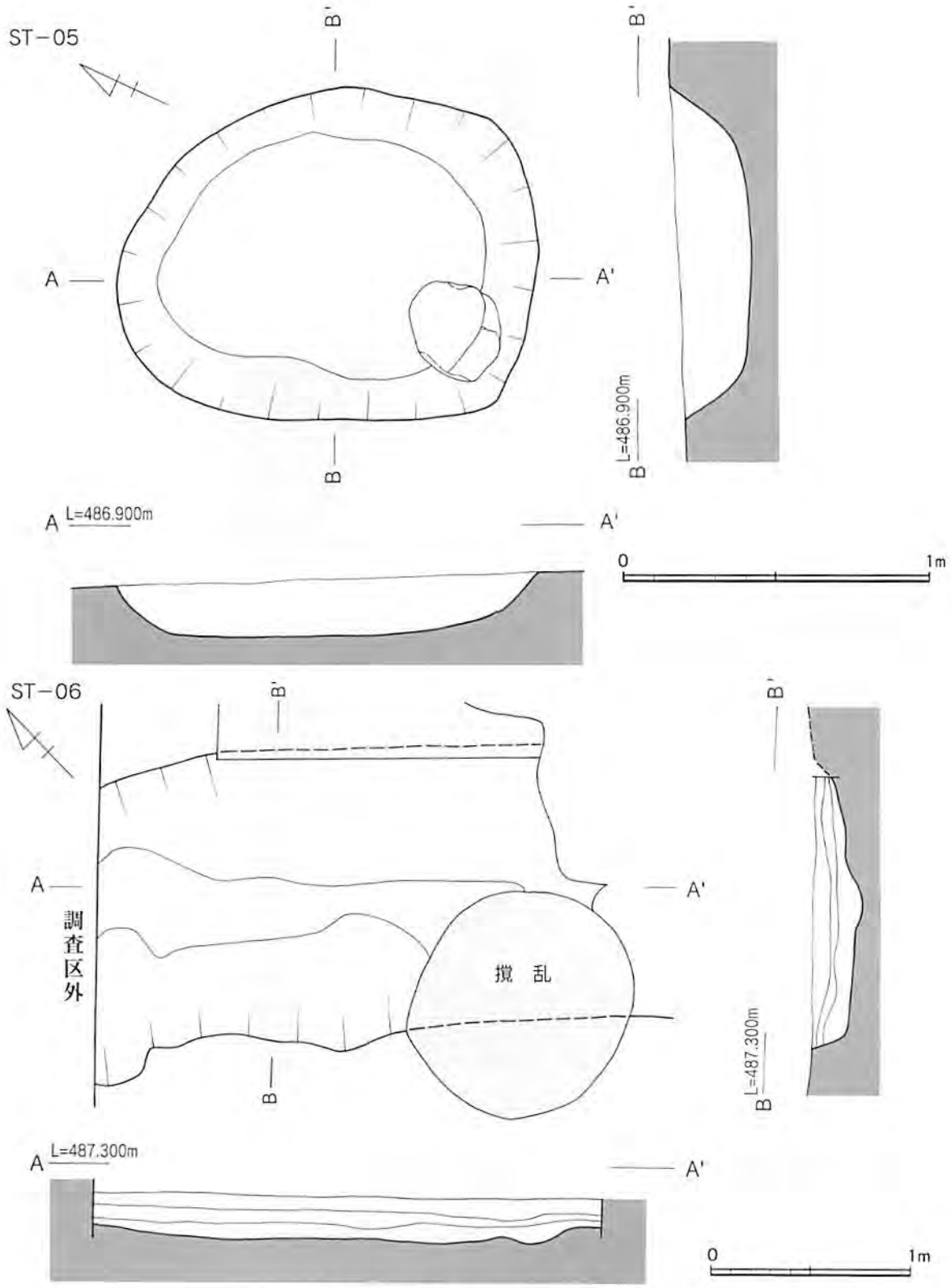
第 11 図　ST－01･02　実 測 図



第 12 図　ST−03・04　実測図・出土遺物実測図（1/3−7）

ＳＴ−05（第13図）

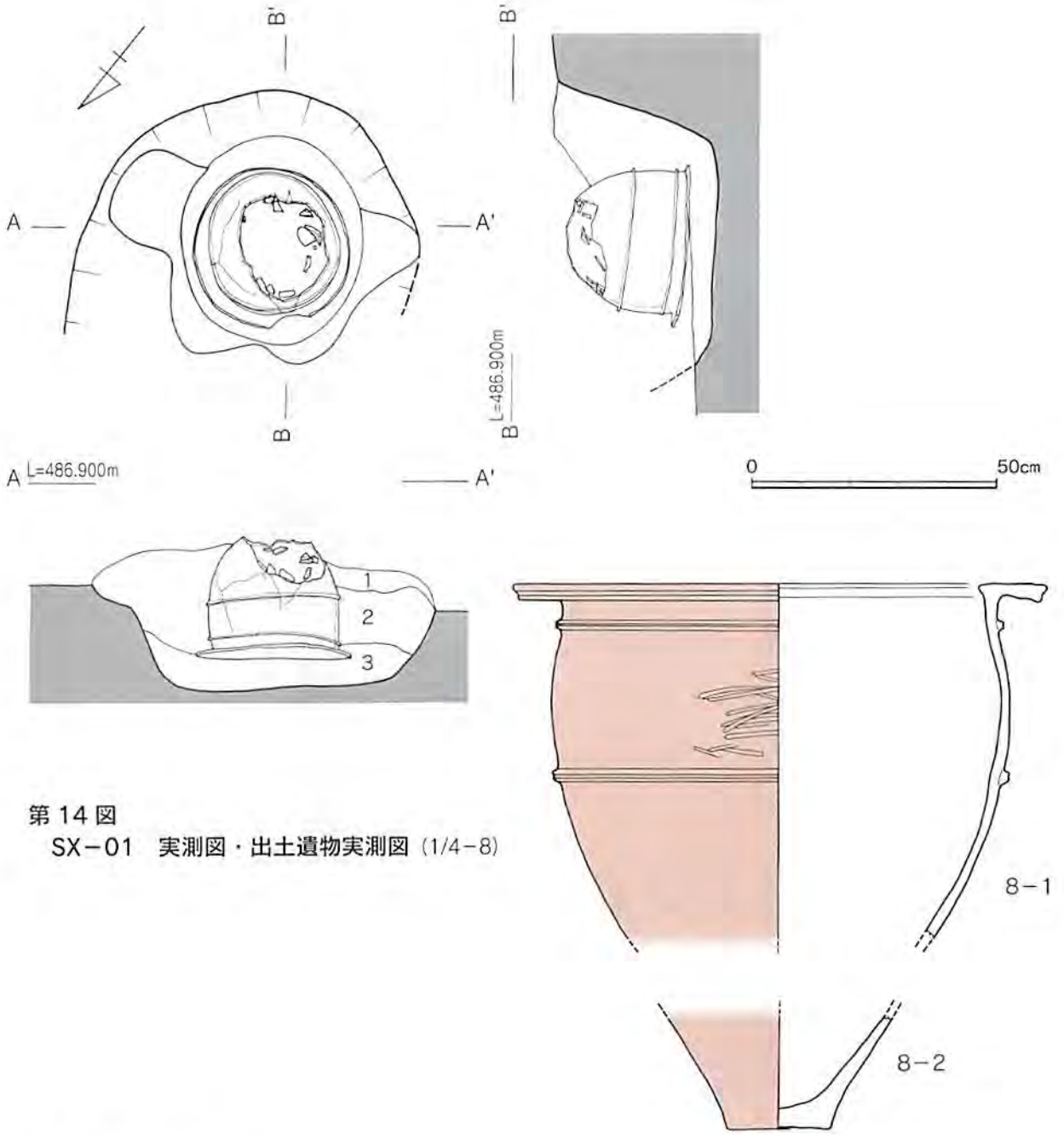
ST−05は４−Ｄグリッドに於いて検出された。1.1ｍ×0.8ｍ×0.2ｍの楕円形を呈する。遺構南側に0.3ｍ×0.2ｍの大型川原石があり壁に沿うように出土した。他に遺物は出土せず、遺構の性格を確認する情報に不足した。



第13図　ST−05・06　実測図

ＳＴ−06（第13図）

ST−06は１−Ａグリッドに於いて検出された。トレンチと撹乱により、遺構の大半は失われているが、床部はほぼ水平で南東から北西方向へやや落ち込む。埋土は水平堆積であるが、断面は中央に僅かな窪みを生じる。これまでの遺構と異なり溝状を呈することも想定される。



第 14 図
SX−01　実測図・出土遺物実測図（1/4−8）

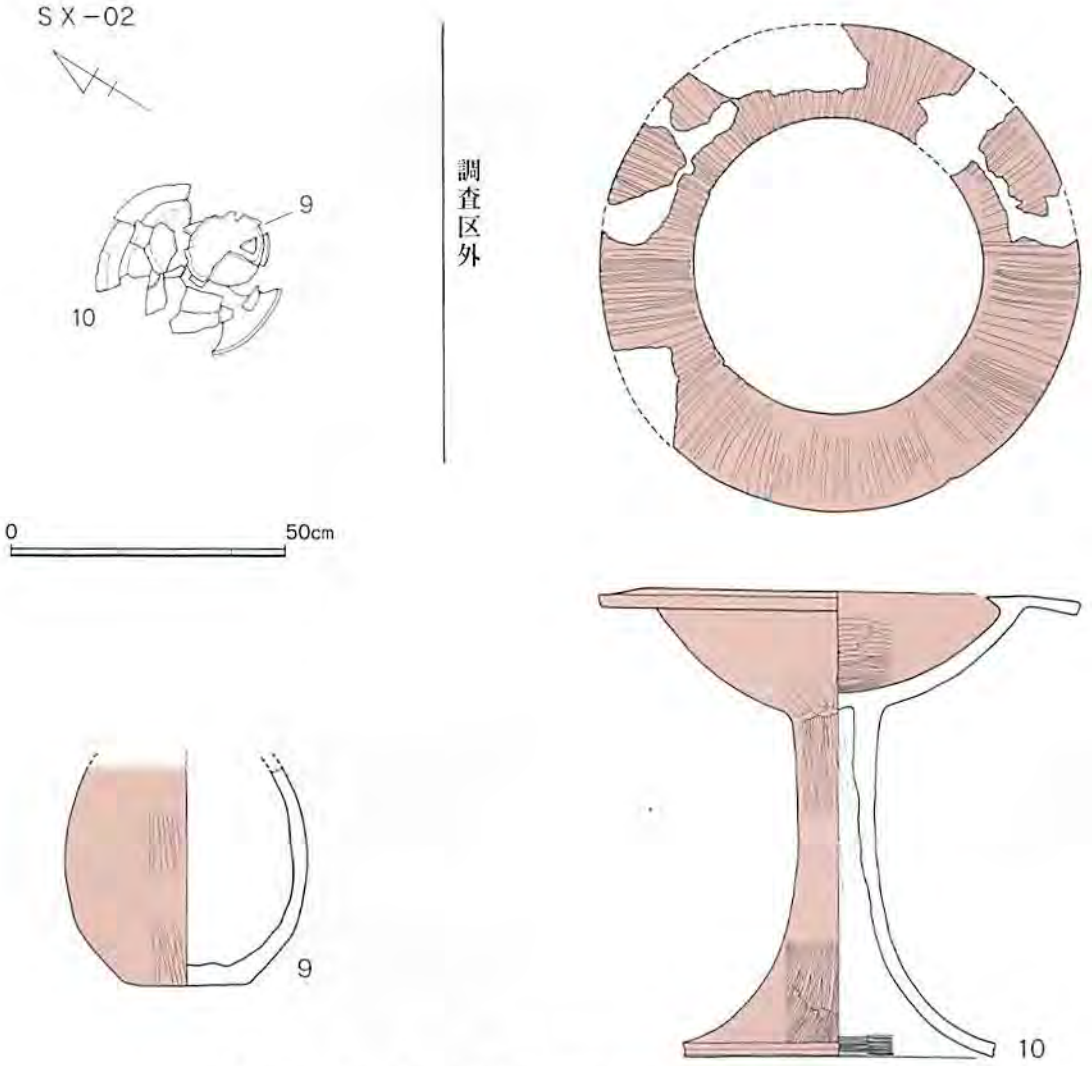
第3節　不明遺構

不明遺構（ＳＸ）　（第14～25図）

ここではその遺構性格が不明であるものを不明遺構とし、ＳＸで記号化した

ＳＸ−01（第14図）

SX−01は９−Ｇグリッドに於いて検出された。後世の耕作により斜面化した面での検出である、残存0.7ｍの掘り込みに甕8-1・2が倒立状態で検出された。甕は丹塗土器であり土器底部は後世の耕作により破壊されているが8-1・2が同一個体であるため本来は完形であったであろう。甕は断面M字突帯を胴部上位に１条・胴部中央に１条持つ。M字突帯の沈線は明瞭ではなく一見して断面△状突帯に見間違う。口縁部は逆Ｌ字状を呈し、内器にやや伸びるいわゆる鋤先口縁である。口縁先端は厚みを増し、口唇部に向かい厚みを持ちやや下がる。外器はナデ調整、一部磨きが確認されるが風化が激しく作製時は耽美であったろう。



第 15 図　SX－02　実測図・出土遺物実測図（1/3－9, 1/4－10）

倒立に配置したことは本来の用途と異なる行為で、甕棺墓的な用途も想定したが蓋に当たる遺物、また木蓋の使用を想定し土色での相違の確認に努めたが、それも確認できなかった。甕内部の土壌を分析の委託をしたが（第Ⅵ章　科学分析参照）地山との明確な相違は見られなかった。

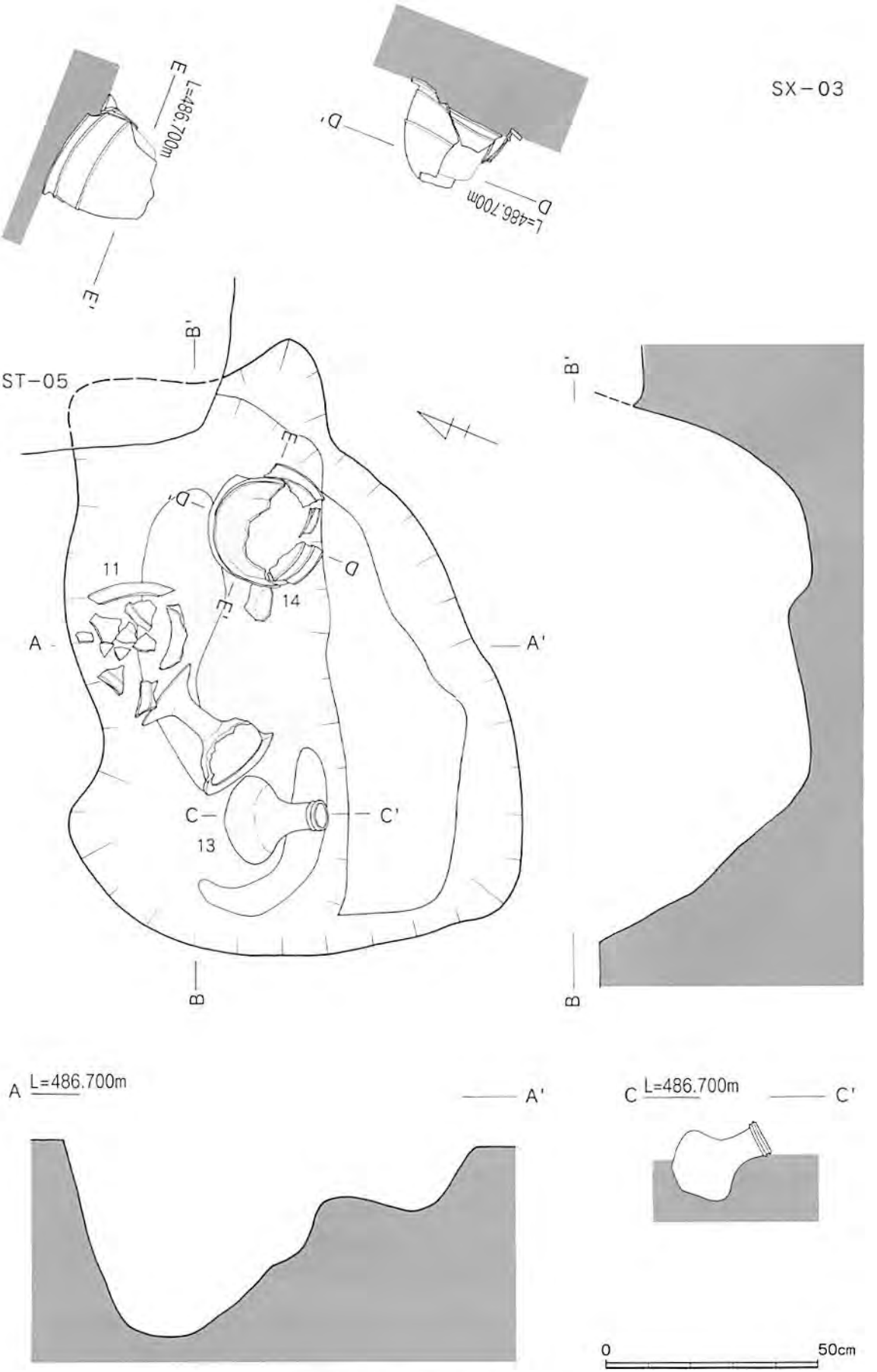
埋土は３層に分層でき、上位より、１（黒色土　ややしまりブロック状に入る）・２（暗褐色土　ややしまり2～3mmの黄粒を含む）・３（暗褐色土　ややしまる）である。

ＳＸ－02（第15図）

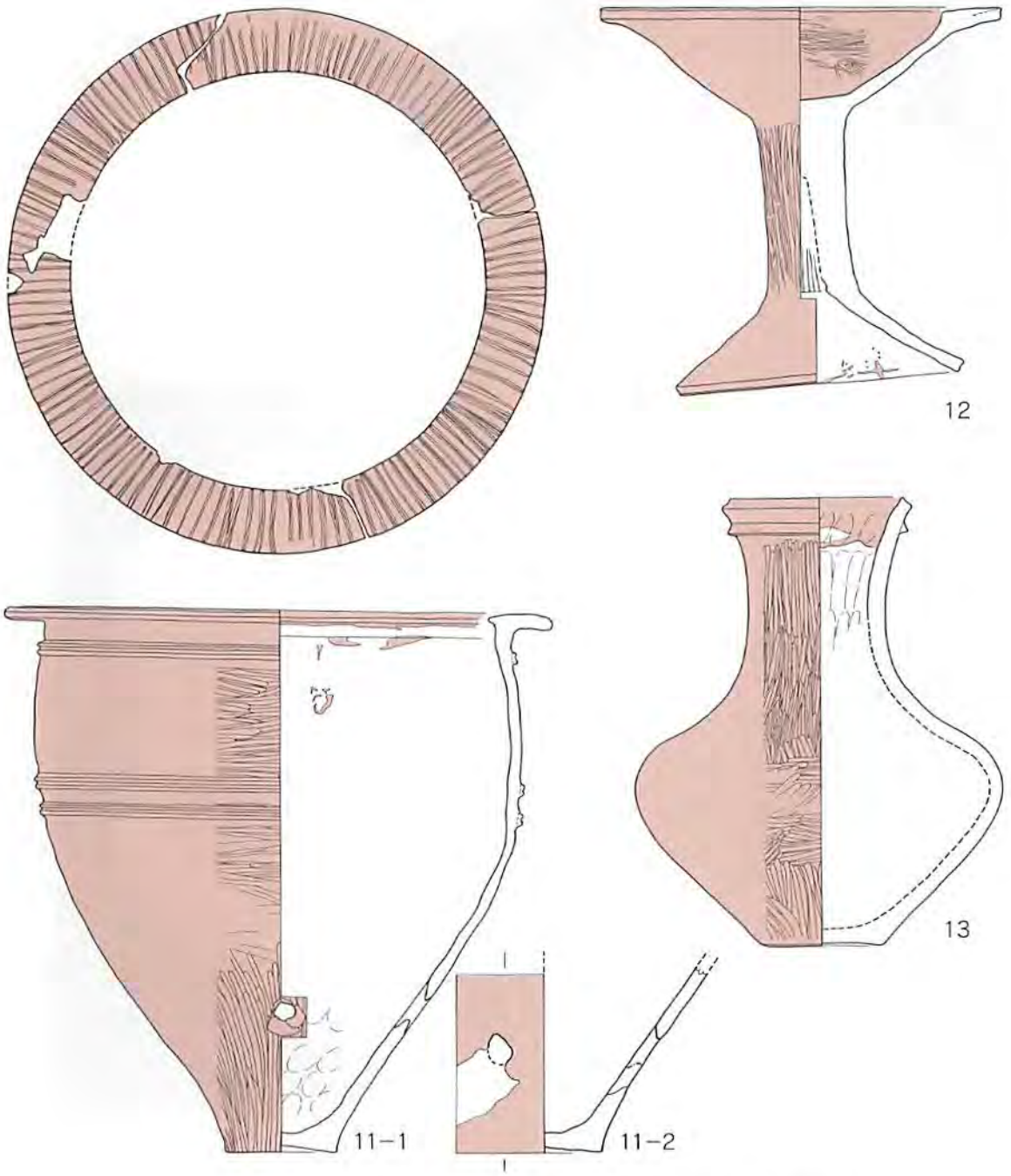
SX－02は９－Ｇグリッドに於いて検出された。高坏**10**・小型壺**9**が出土。**10**に**9**が被さり、周囲に掘り込みもなくまた調査区外に近接しているため、遺構の広がりは確認できなかったなど不明な点が多い。遺物は何れも丹塗土器で完形ではなく、廃棄の性格を持つのであろうか。**9**は丹塗の小型壺。胴部上位から底部資料で胴部最大径は中央部付近である。外器面は風化が激しいが磨き痕が一部、確認される。内器はナデ調整を施し底部は平底である。**10**は丹塗の高坏。坏部はやや浅く皿状で口縁部は内部に伸びる鋤先口縁である。口唇部に向かい垂れ下がる。また坏付け根で細く肉厚となり、口唇部はやや斜行。脚は長く端部は僅かであるが細沈線である。坏部の内部は横磨きで外器はヘラ削り。脚は縦の磨きが確認され、内部は絞り痕で端部はハケ目調整である。口縁部は幅1～4mmの放射状の暗文が施されている。

ＳＸ－03（第16～18図）

SX－03は４－Ｄグリッドに於いて検出された。1.5m×1.1m×0.5mの不定形の掘り込みに甕**14**、**11**・壺**13**・高坏**12**が出土した。甕**14**はＳＸ－01に見られた倒立状態の出土状況で、底部を欠損していたが接合により



第16図　SX−03　実測図

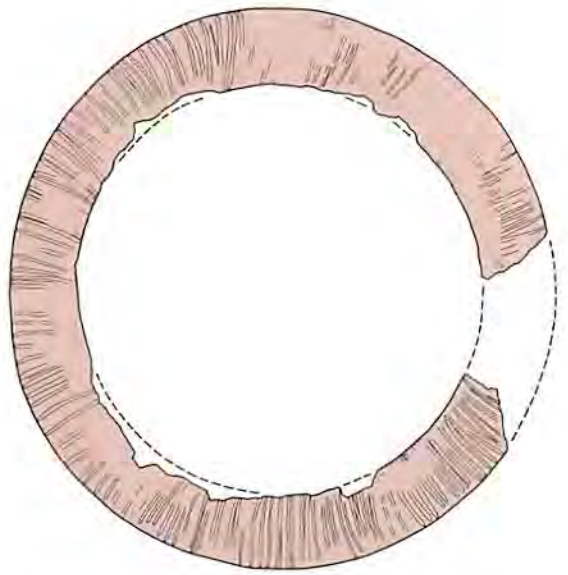


第 17 図　SX−03　出土遺物実測図（1）（1/3−12, 1/4−11・13）

完形になった。また壺13は横転していたが完形での出土である。また高坏12は坏部が一部欠損している。

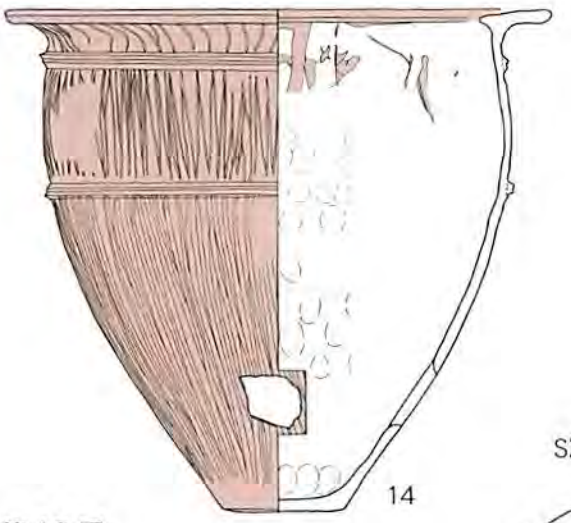
甕11は破片で出土したが接合によりほぼ完形になった。胴部上位に１条・胴部中央に１条のM字突帯が施されている。口縁部の断面は内器にやや尖る逆L字状の鋤先口縁で、厚みはほぼ均一でありやや垂れ下がる。外器は磨き調整で胴部上位から下位にかけて横調整であるが胴部下位から底部は縦調整で、底部は上底である。これも胴部下位、底部近くに２口の穿孔があり、一つは径1.4cm、もう一つは不確実であるが同様の径を呈し、その状態は外器から強い敲打が行われたことが想定される。口縁部は幅1mmの暗文が見られ、２条を１単位として放射状に施文されている。

高坏12は丹塗。坏部はやや浅く皿状で口縁部は水平である。坏付け根は肉厚で口唇部に向かいやや細り、口唇部は浅い沈線を施す。脚形成は裾部から斜行し直立する肉厚な脚を持ち、端部は斜行で浅い沈線を施す。坏部の内部は横磨き、外器はナデ調整で脚は縦の磨きが確認され、また内部は絞り痕が見られる。

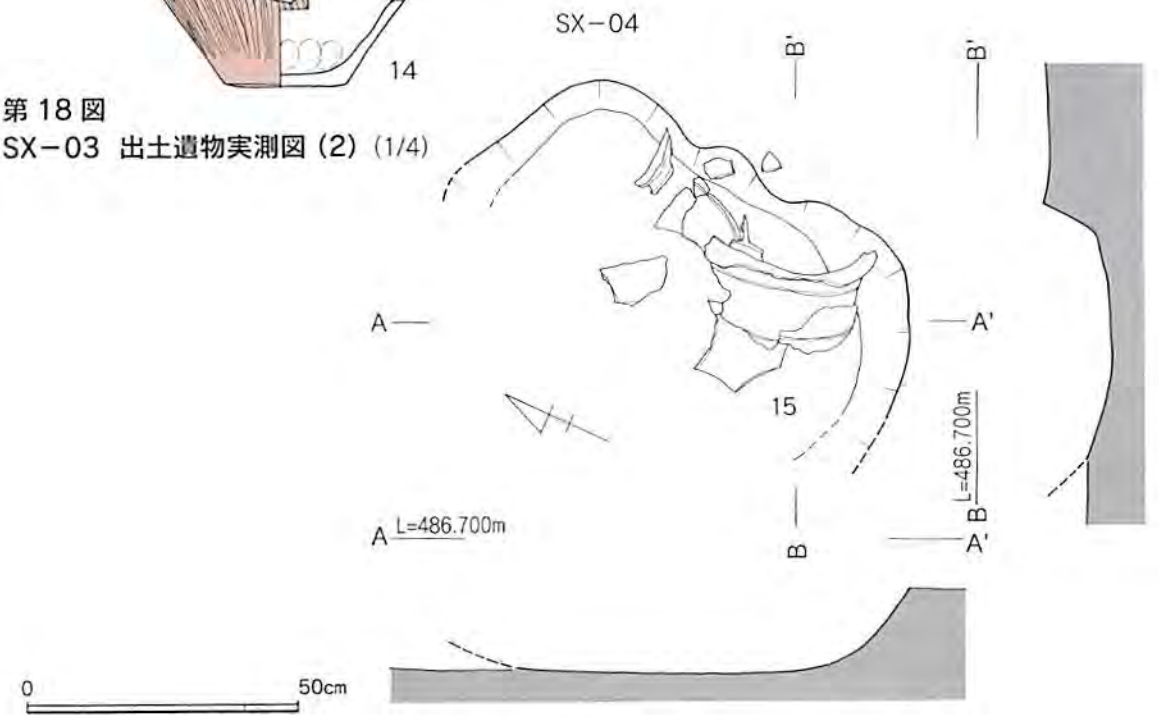


13は壺で丹塗磨研が施されて本遺跡では大型の壺である。外器面は磨きが施され口縁部から胴部上位までは縦、最大径では横、胴部下位から底部の調整は下から上への調整が施される。口縁はラッパ状に開き、２条の山形状の突帯を持つ。頸部はやや伸びるが胴部は張り出す算盤状で、底部はやや上底である。

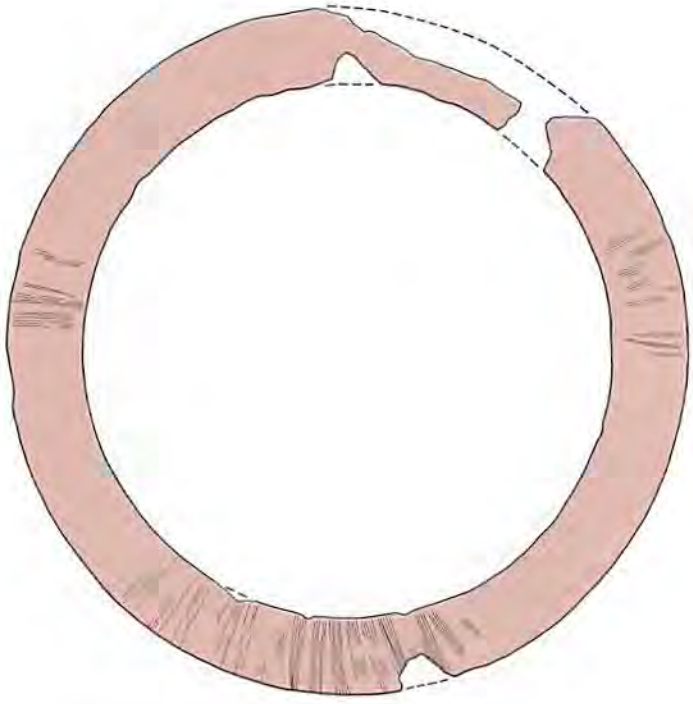
14は甕で、甕8－1・2同様に倒立状態で出土した。底部が破壊されての出土であったが、接合では一部欠損であるが、ほぼ完形になったことから、これも土圧で破損されたのであろう。これも胴部下位の底部近くに径７cm程の穿孔がある。口縁部の断面は逆Ｌ字状の鋤先口縁で内器に張り出し、厚みはほぼ均一でやや上向く。突帯は胴部上位に１条・胴部中央に１条のＭ字突帯が施されている。外器面は丹塗が施され、これに暗文が見られる。暗文は３形態の仕様で、口縁から胴部上位突帯間まではやや間隔をおき、またこの突帯から胴部中央突帯までは鋸歯状、胴部中央突帯から底部までは直線状である。口縁部は２mm幅で放射状に施文されている。暗文の幅は口縁から上位突帯と上位突帯から胴部突帯の鋸歯状は１mm、胴部中央突帯から底部までは３mmである。

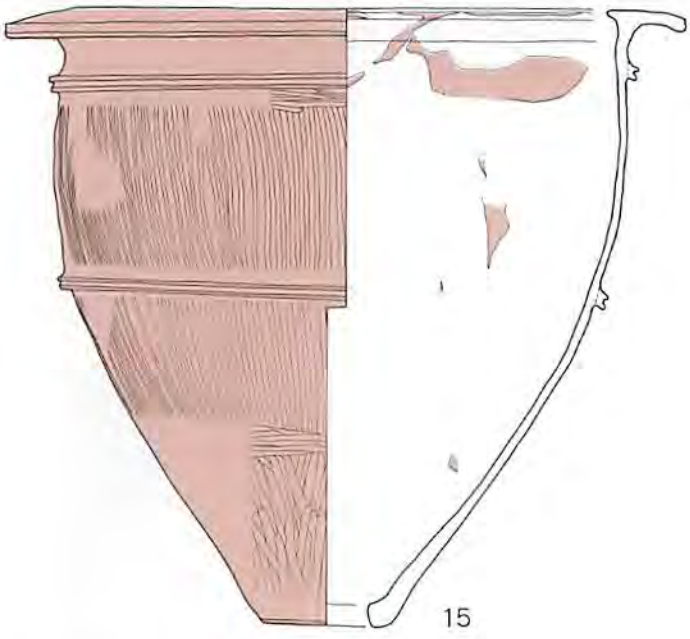


第18図
SX－03 出土遺物実測図（2）（1/4）



第19図　SX－04　実測図





第20図　SX－04　出土遺物実測図（1/4）

ＳＸ－04（第19・20図）

SX－04は９－Ｇグリッドに於いて検出された。SX－01に近接しており僅かであるが掘り込みが確認された。遺構プランは東側を削平されているが残存0.9m・深さ0.1mを測り、楕円形を呈するものと思われる。遺物は甕の口縁部～胴部にかけての資料で廃棄された感がある。

15は丹塗が施され、口縁は鋤先状でかなり垂れ下がる。M字突帯が胴部上位と胴部中央に存在し、口縁部に同調するように突帯も垂れ下がる。最大径は２条の突帯の中央よりやや上位に位置している。暗文は２条の突帯間と胴部突帯下位に施され直線状に施す。風化が激しいが口縁部にも直線状の暗文がみられ本来は全体に施されていたのだろう。胴部下位は横→縦の磨きが確認できる。底部資料を欠くが、甕の胴部下位に穿孔されたように意図的にここを破壊した可能性が想定できる。

ＳＸ－05（第21～23図）

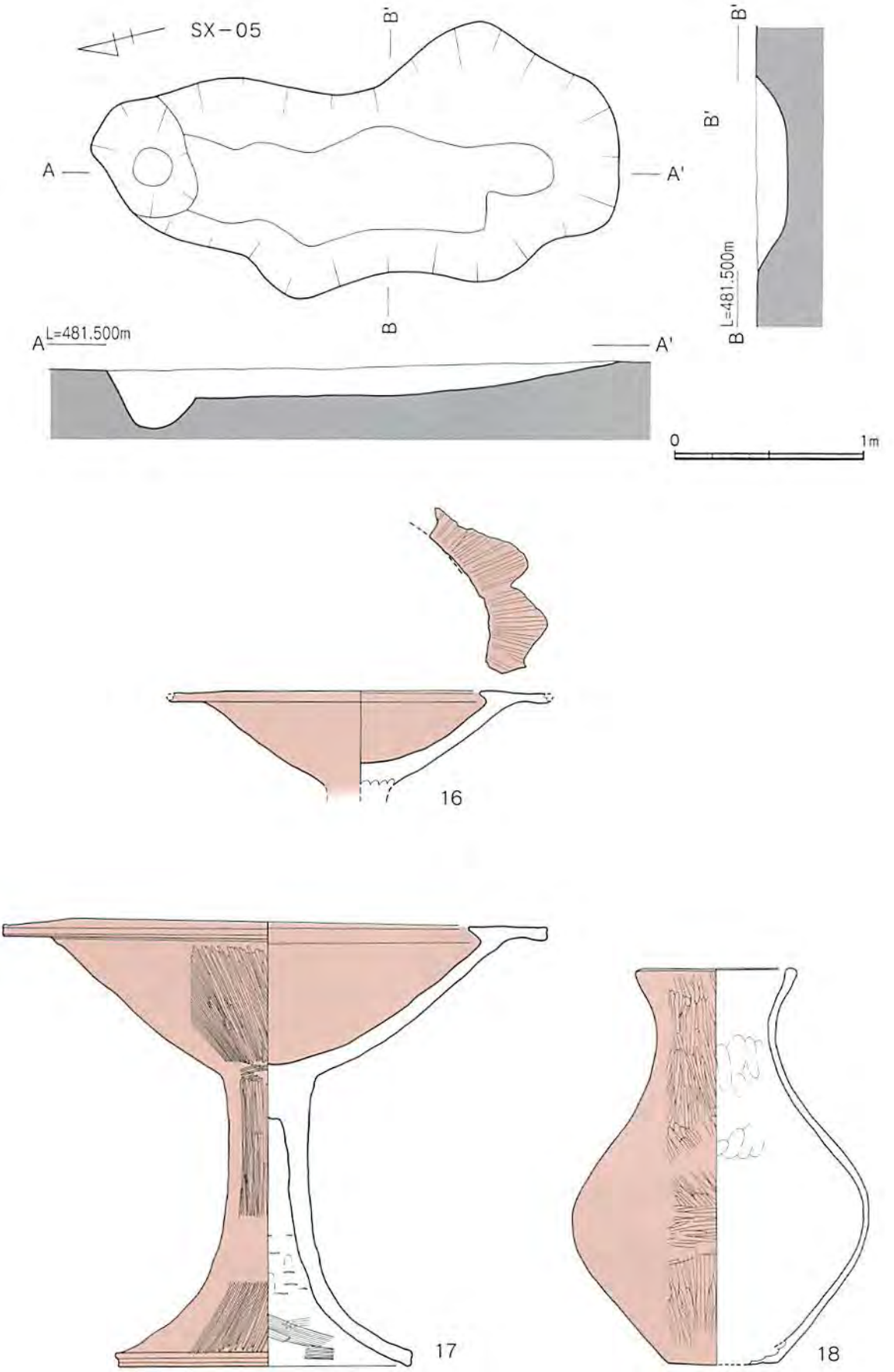
SX－05は４－Ｅグリッドに於いて検出された。遺物集中区（第52図）内で、包含層掘り下げの際、土器破片の多量出土が見られたため、精査の結果2.8m×1.3m×0.2mの不定形プランを確認した。遺構北側には0.7m×0.5m×0.3mのピット状の掘り込みが存在していた。出土遺物は**16・17・18・19・20・21・22**であり、何れも完形出土ではなく破片であるため廃棄された感がある。

16は高坏の坏部資料で丹塗である。坏部は浅く皿状を呈し、口縁部は内部に伸びる鋤先口縁である。口唇部位を欠くため不明であるが中央部で薄くなる。坏部の内外器はナデ調整である。口縁部は放射状の暗文であるが直線状ではなく乱れた感を受ける。

17は高坏で丹塗が施される。坏部は椀状で口縁部は内部に伸びる鋤先口縁。口唇部に向かい一旦薄くなるが肉厚となりやや垂れ下がる。口唇部は沈線を施し裾端部も沈線である。全体に磨きが施され、坏部の内器は横磨き、外器は縦磨き、脚上位坏との付け根は横磨き、脚は縦磨きであるが内部は爪跡痕で裾部はハケ目を施す。

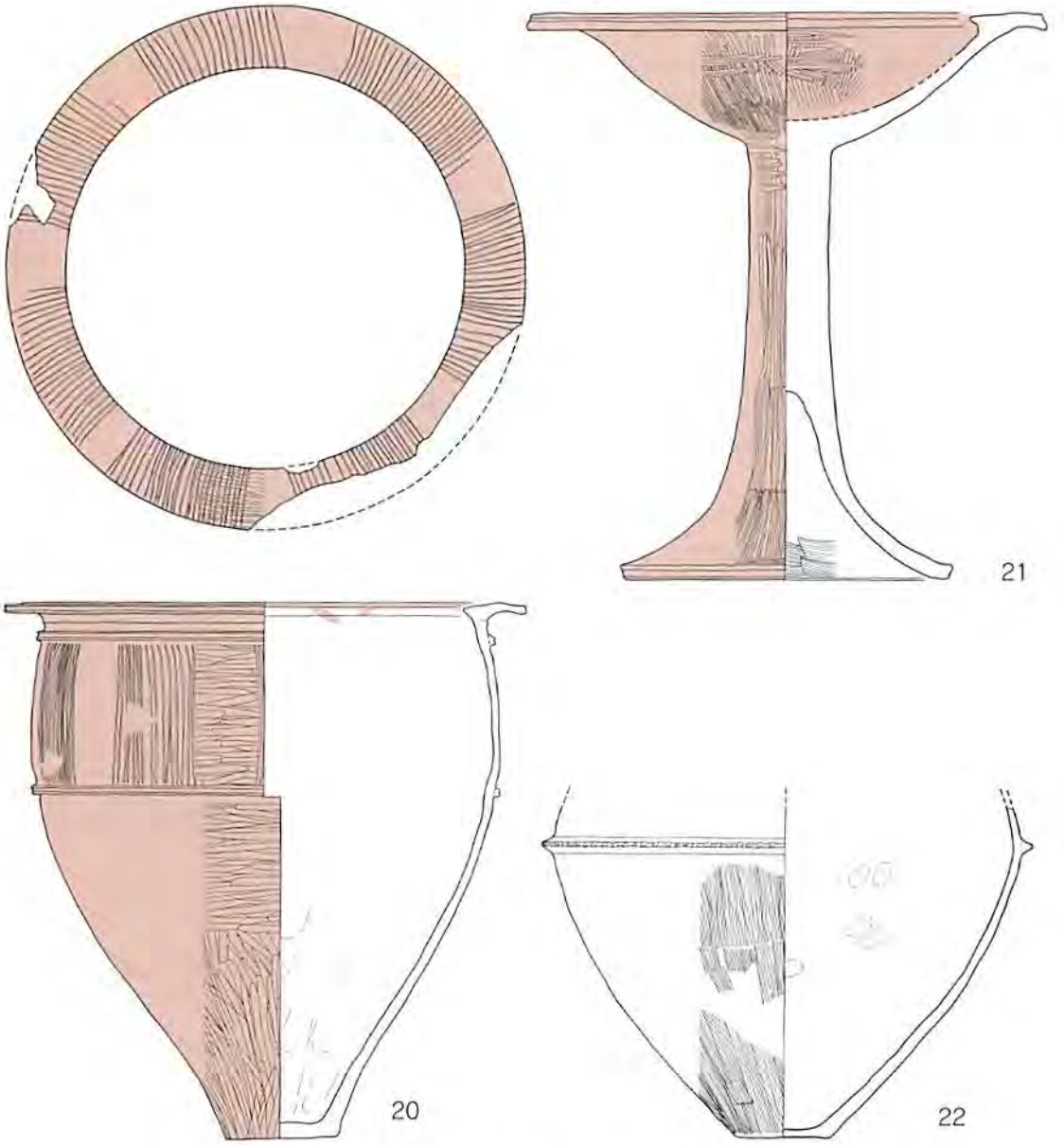
18は丹塗の壺で、底部の一部を欠損しているがほぼ完形資料である。口縁部はやや外反しやや肉厚となり口唇部は内傾する。頸部は外反し短頸で胴部最大径は胴部中央に位置する。外器は磨き調整で口縁部から縦方向、胴部上位は斜行、胴部下位は縦方向である。内器はナデ調整であるが頸部・胴部上位に指圧痕が見られる。

19は筒形器台で丹塗が施されている。本遺跡最大遺物で器高は86.2cmを測る。口縁部は直に立ち上がり、やや外反し口唇部は平坦である。また環部端部には沈線が施される。口縁部から環部、脚部、裾部の構造で、調整は口



第 21 図　SX−05　実測図・出土遺物実測図（1）(1/4−16〜18)

第 22 図　SX－05　出土遺物実測図（2）（1/4）



第 23 図　SX－05　出土遺物実測図（3）（1/4）

縁部から環部は縦の幅2mm程の暗文が施され、脚部から裾部には縦の磨きが見られる。内器調整は口唇部・脚部にハケ目が施されている。また脚部中央部には爪跡痕、下位にはヘラ調整、裾部は横のハケ調整である。指圧痕が確認されるが、この位置での粘土継ぎ目が顕著である。口唇部内器にも丹塗が一部幅1.5～2mmで見られ、この端部の丹が口縁部に沿い幅2～3mmで剥がれていることから、ここに他の器を搭載したことは確実であるが、本遺跡からそれに該当する遺物は確定できなかった。

20は丹塗の甕でM字突帯を胴部上位と胴部中央にそれぞれ１条。口縁はやや鋤先状で水平に延びやや垂れ下がる。全体に磨きを施すが、暗文はこの突帯間に幅１mm強で20条前後程を１単位として７ヶ所確認される。また胴部暗文に同調するように口縁部にも単位としての暗文が施され、口縁部暗文は施文幅から内→外への施文形態である。最大径は胴部上位の突帯と胴部中央の突帯間の中央下に位置し、緩やかに窄まりながら底部で急激に窄まり、また底部は平底を呈する。内器は丁寧なナデ調整である。

21は高坏で丹塗である。坏部は浅く皿状を呈し、脚は長く直線状である。口縁部は内部に伸びる鋤先口縁で、口唇部に向かい上向きになるが端部はやや下がり、口唇部と脚裾部には沈線が見られる。全体に縦方向の磨きが施されるが、一部横方向の磨きも確認される。脚の内器はナデ調整であるが裾部はハケ目調整である。

22は胴部上位から口縁部資料を欠くが、残存部の立ち上がりから壺であろう。胴部最大径は刻目突帯部である。調整は外器ハケ目、内器ナデで一部指圧痕が見られる。このSX－05出土土器はこの22以外は彩色土器で、この点からでは異質である。また逆にSX－05の性格を窺い知る遺物となるのか。

ＳＸ－06（第24図）

SX－06は５－Ｃ・Ｄグリッドに於いて検出された。基本土層第Ⅳ層内での検出で、埋土は多分層で乱れていた。遺構は調査区外に伸びており全体像は不明であるが、長靴状の掘り込みであり、調査区外から掘り込みが行われ本調査区に遺構が伸びてきたと思われる。時代を特定できる遺物は出土していないためその性格は不明である。

ＳＸ－07（第24図）

SX－06は４－Ｃグリッドに於いて検出された。これも基本土層第Ⅳ層内での検出で、SX－06に近接しており埋土・形態も類似する。これも遺構の性格は不明である。

ＳＸ－08（第25図）（参考）

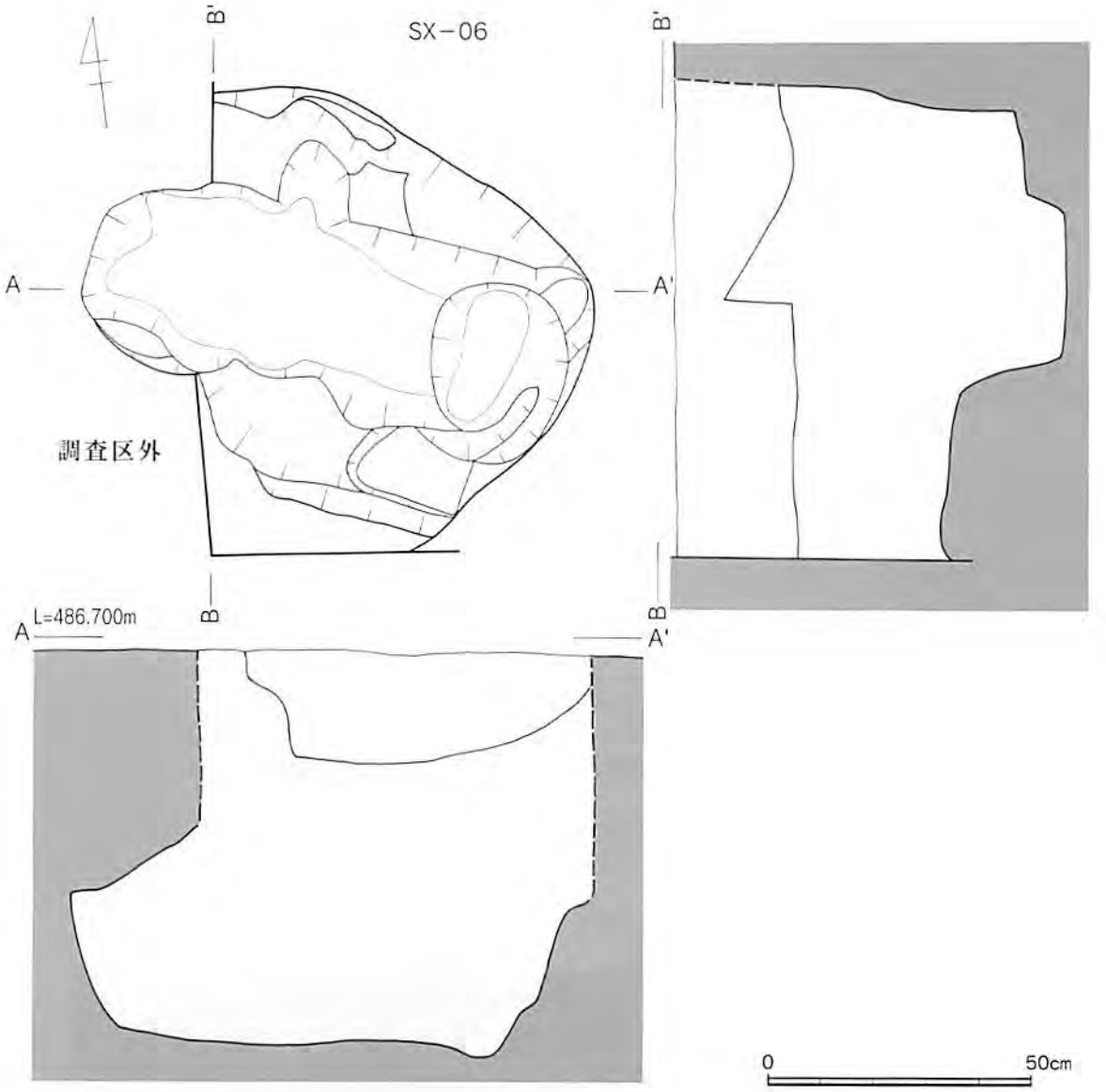
SX－08は調査区に近接している北側櫟林に存在するもので、グリッドでは５・６－Ｂである。中軸0.6m～拳大程の川原石を積み重ねた状態で存在している。遺構所在地は櫟林で地権者はこの遺構を「塚」と呼んでいた。この「塚」はこのSX－08を含めて２基存在していたが、今回はこのSX－08だけに留めた。石積み下位に掘り込みの可能性もある。しかし本来の調査区ではないが、地権者の了解を得てこの石積みを記録として行ったが、断面図は見通しではない。

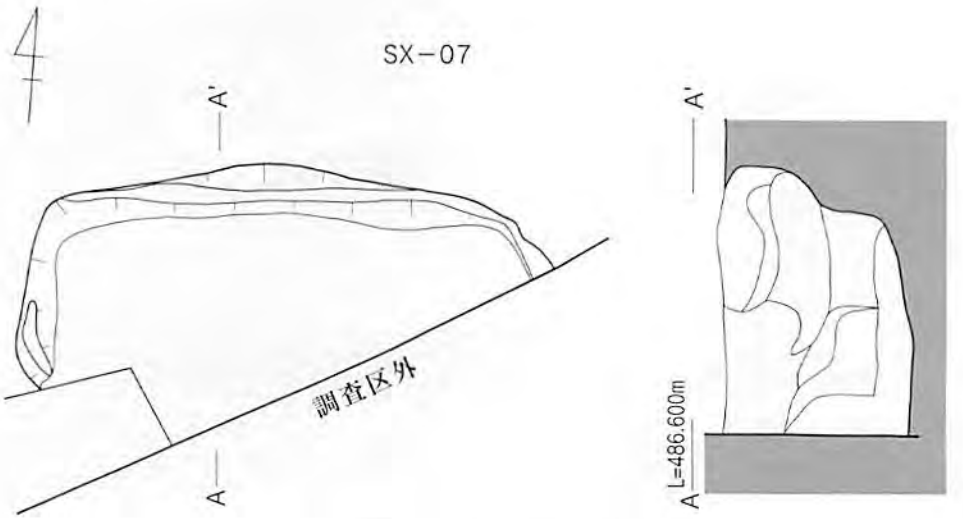
ＳＸ－09（第25図）

SX－09はＤ－４グリッドに於いて検出された。3.5m×3.2mの方形プランで住居の可能性を想定したが、柱穴・炉など生活空間を確証できる遺構がなくプランだけを確認した。

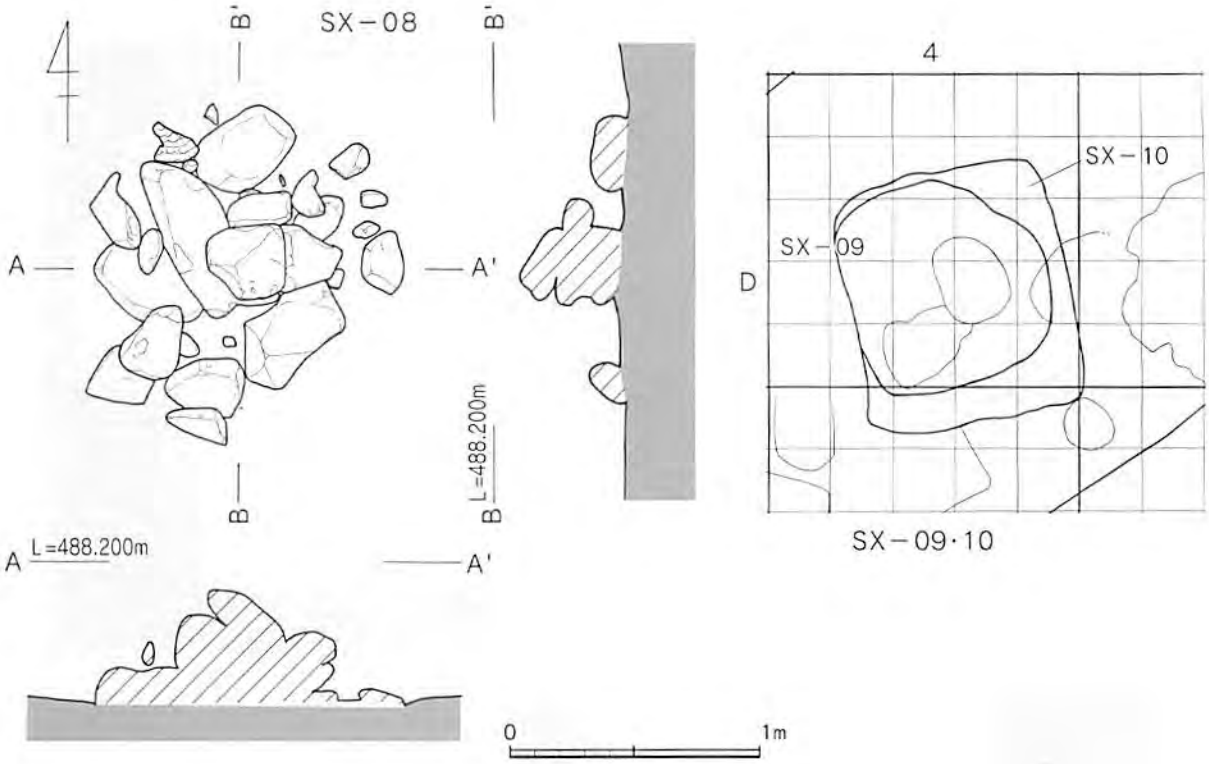
ＳＸ－10（第25図）

SX－10はＤ－４グリッドに於いて検出された。3.7m×3.2mの楕円形プランでこれも住居の可能性を想定したが、柱穴・炉など生活空間を確証できる遺構がなくプランだけを確認した。





第24図　SX−06・07実測図



第 25 図　SX－08実測図 及び SX－09・10位置図

南小国町立中原小学校児童による体験発掘

第Ⅴ章　出土状況及び遺物

第1節　土器

本遺跡の出土遺物はその接合にてエリアを設定しそれぞれを提示する。また各グリッドをさらに細分化した。(第26～47図)

第2トレンチ（第26・27図）

D－4グリッドに於いて本調査の確認のために行われたものである。7点の遺物が検出されている。また他の遺物と接合した場合は2Tで表記した。

23は「く」の字口縁の壺で、口唇部と胴部にヘラ状工具による刻目突帯が施される。最大径は胴部突帯下位に位置する。調整は縦方向のハケ目であるが、一部斜行が見られる。

25は高坏で丹塗が施され、口縁部から坏内部・脚は磨き調整が施されている。高坏外器はヘラ調整後磨き調整を施し、脚裾部は沈線状を施している。口縁は内側に張り出さず、また坏から口縁部へはなだらかに繋がる。

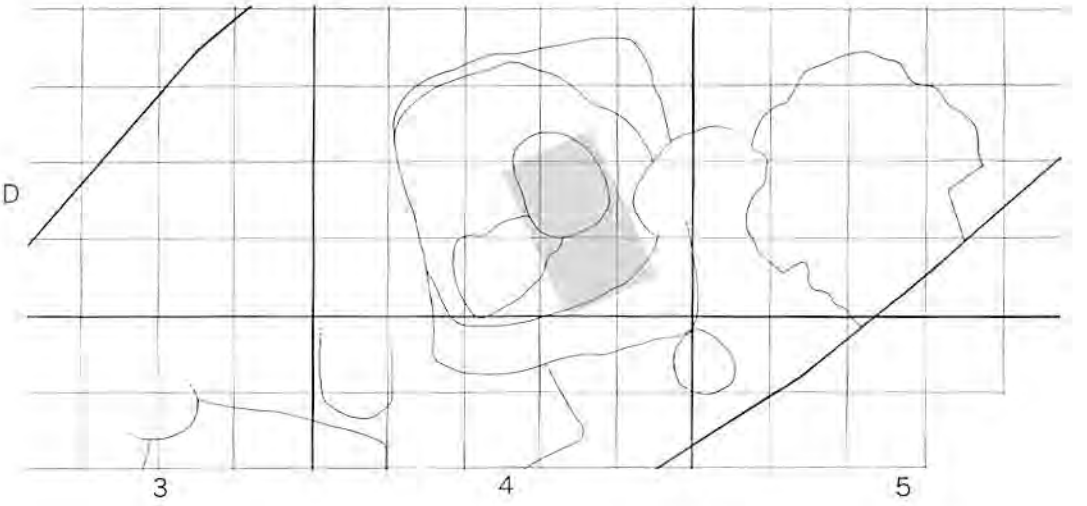
24・26は甕の口縁から胴部上位の資料であり、何れも丹塗土器である。

24は鋤先口縁を呈し口縁端部が欠損しているが端部はやや垂れ下がる傾向が窺える。胴部上位に1条の突帯を持つが全体にローリングを受けており僅かに沈線が見られることから、本来は明瞭な断面M字形であったろう。内器に丹垂れと筆痕が見られる。26も同位部資料で鋤先口縁を呈し、内側は24と比較し僅かに突出する。胴部上位に1条・胴部中央に2条の明瞭な断面M字が見られる。口縁部は僅少であるが幅1～2mmの暗文を施している。口縁部角度は僅少であるため不明であるが水平を呈するか。外器面は磨きが施されている。内器はナデ調整で口縁内部までの施工が見られ、胴部に薄く横施工の筆跡が見られるが、雑な感を受ける。

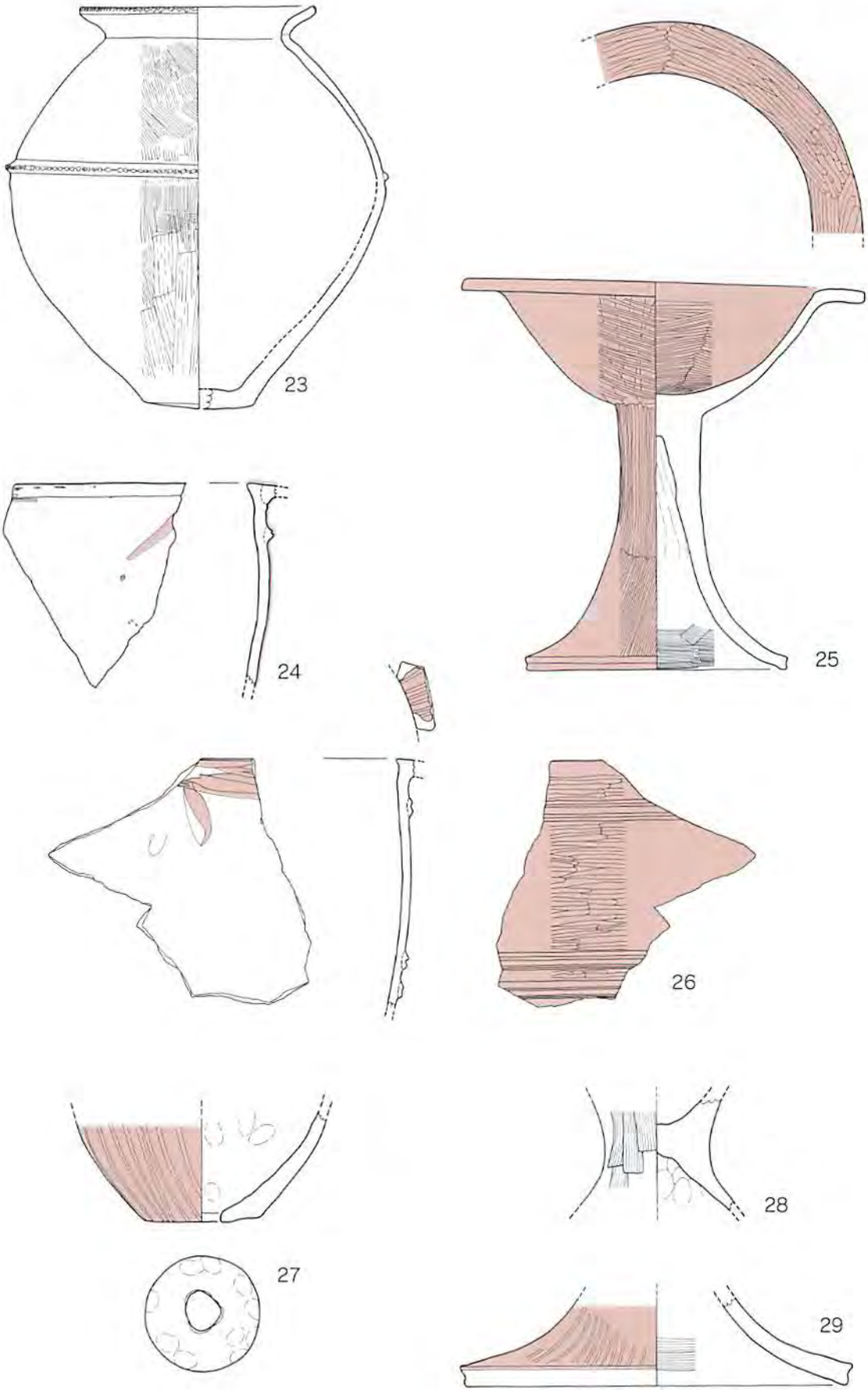
27は壺胴部下位から底部資料である。これもローリングを受けており、外器は摩耗が激しいが全体丹塗を施されていたのだろう。また2～3mmの暗文が確認される。底部の調整は指圧痕によるナデ調整であるが、中央に穿孔があり、その破壊状態から外器からの強い敲打によるものではく、錐状の工具を使用したものか。この形態はSH－01出土の小型壺1に見られた。

28は甕脚部資料で上下欠損しており、ローリングを受けている。外器はハケ目・内器には指圧痕が見られる。

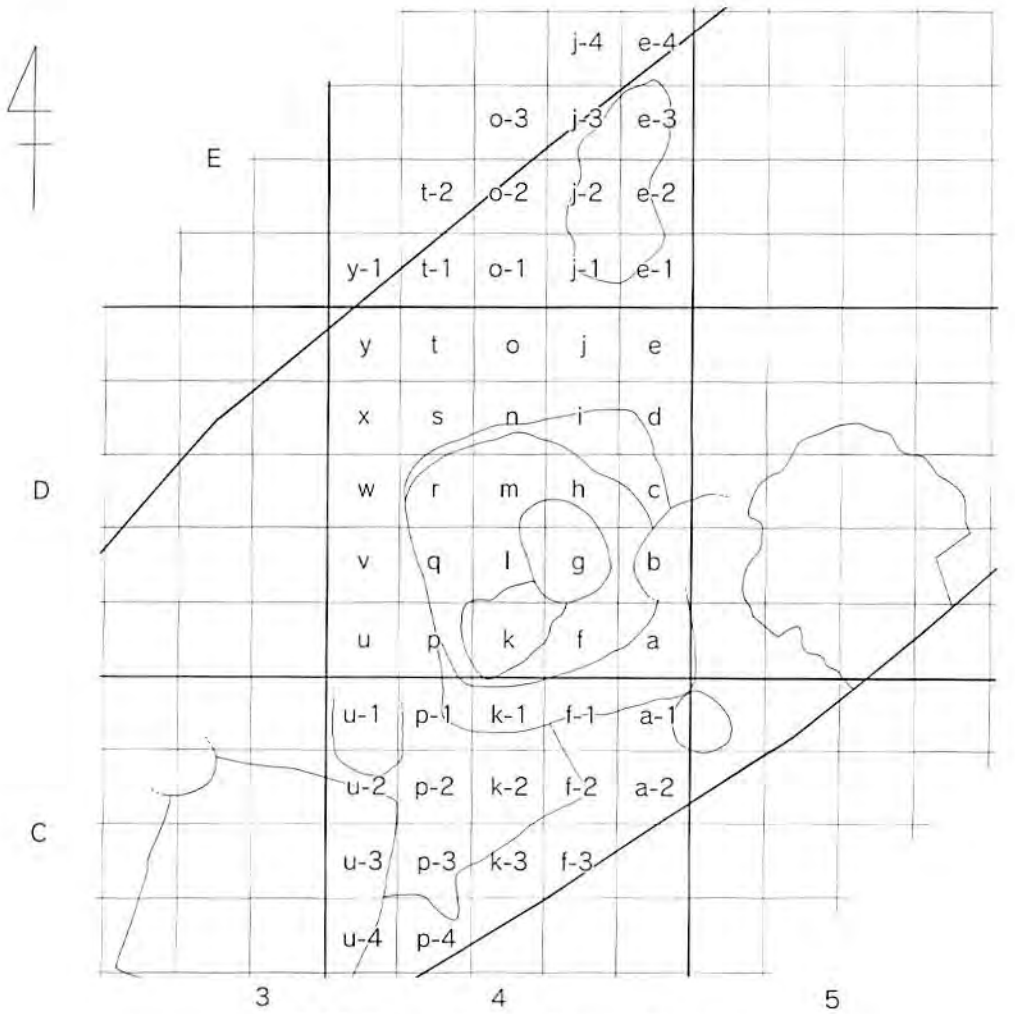
29は高坏脚から裾部の資料で反転復元である。これもローリングを受けている。裾端部の調整は沈線状に施されており突出している。外器は丹塗を施し幅1mm強の暗文が確認される。



第26図　第2トレンチ位置図

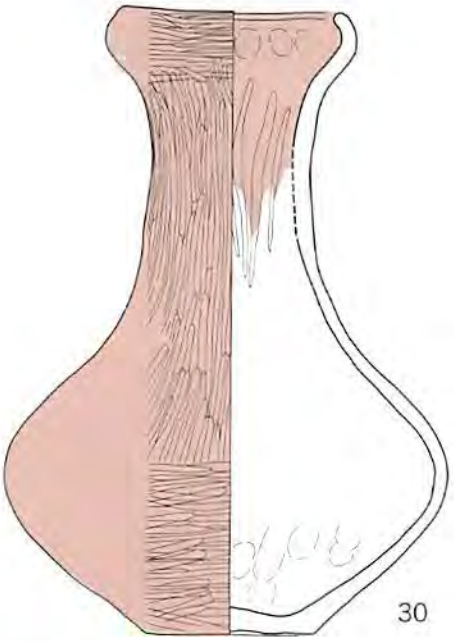


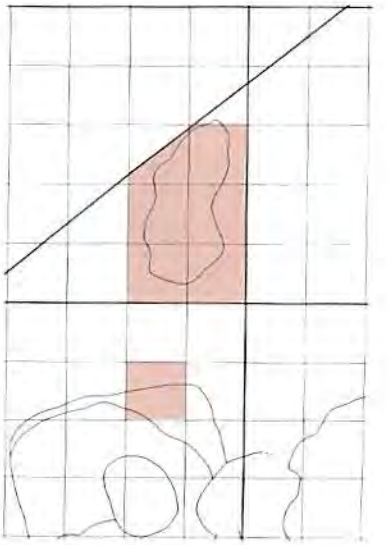
第 27 図　第2トレンチ　出土遺物実測図（1/3－24～28, 1/4－23・29）



第 28 図　エリア・グリッド全体図

エリア1 (e-1・2・3,i, j-1・2・3)





第 29 図　エリア1　出土遺物実測図 (1/3)

エリア1　(第29図)

(e−1・2・3、i、j−1・2・3) からの出土。

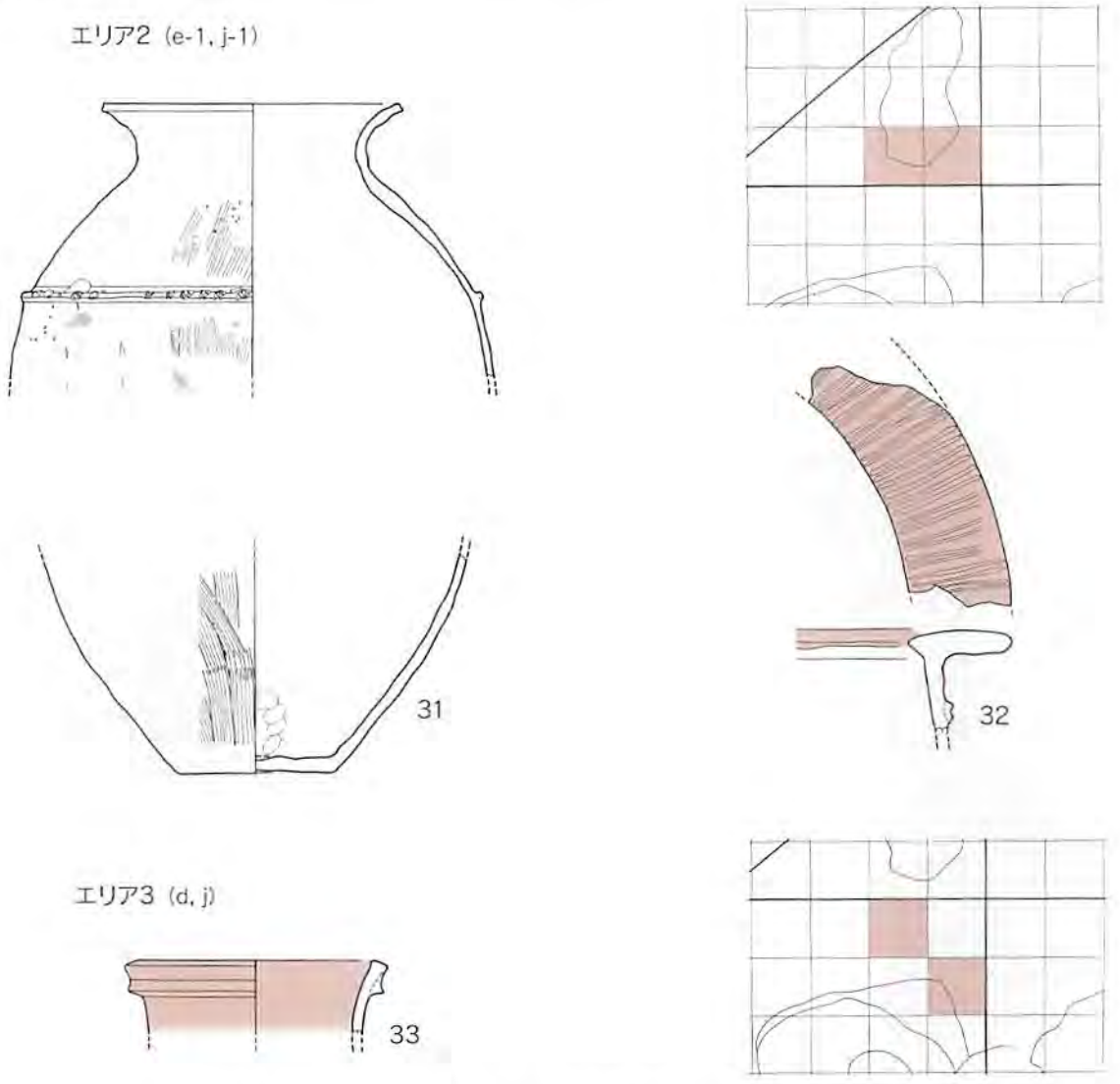
30の壺型土器は丹塗を施す長頸型で、口縁部は緩やかな袋状を呈す。胴部は算盤型を呈し、最大径は胴部中央やや下位に位置する。底部はやや上底気味である。外器は磨き調整であるが、口縁部は横、頸部〜胴部最大径までは縦、胴部最大径下位〜底部までは横磨きである。内器はナデ調整で口縁部と胴部下位には指圧痕が見られる。内器口縁部にも丹が施されているが雑な感を受ける。

エリア2　(第30図)

(e−1、j−1) からの出土。

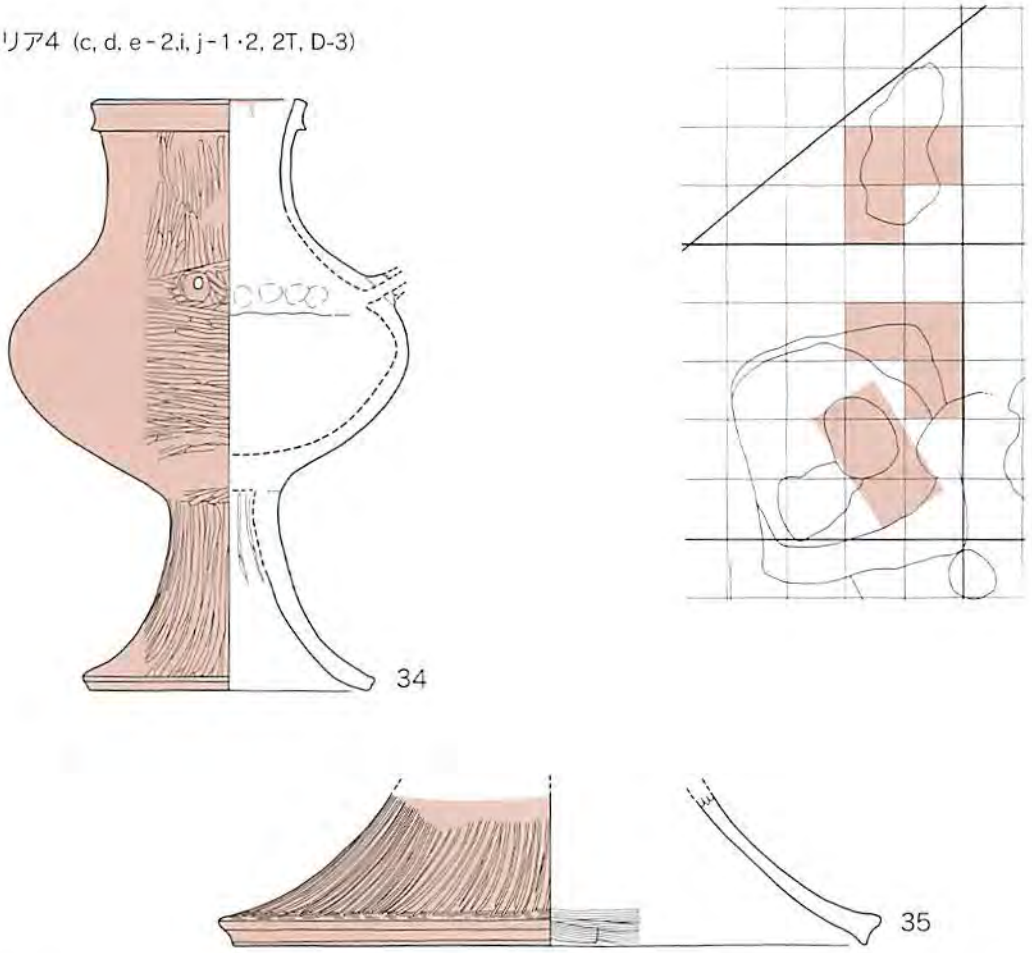
31は壺型土器の反転復元資料である。口縁部は「く」の字を呈し、胴部上位には撚糸状工具による刻目突帯を施す。調整は外器ハケ目、内器はナデ調整である。底部直上には指圧痕が見られる。丹垂れが数点確認できるが、丹塗土器としては認定できず、飽くまでも推定であるが、近在での丹塗作業中、丹がこの土器に付着したのであろうか。

32の甕型土器は (e−1) の出土であるがここに配置した。口縁部から胴部上位資料である。鋤先口縁を呈し、口唇部に向かいなだらかに上向くが水平を保つ。胴部上位に1条の突帯を持つが全体にローリングを受けており、沈線が見られることから本来は明瞭な断面M字形であったろう。口縁部には放射状の暗文2条を1単位として幅2mm強に施文される。

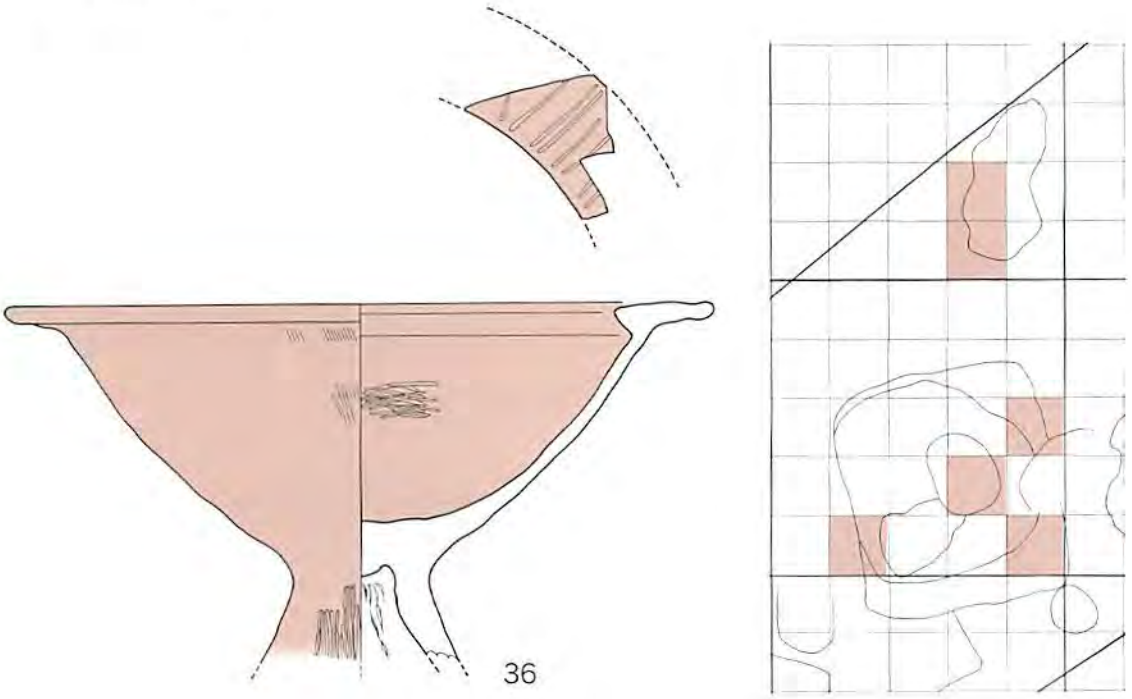


第30図　エリア2・3　出土遺物実測図 (1/3−32・33, 1/4−31)

エリア4 (c, d, e-2,i, j-1·2, 2T, D-3)



エリア5 (a, c, g, p, j-1·2)



第 31 図　エリア4・5　出土遺物実測図 (1/3)

エリア3　(第30図)

(d、j) からの出土。**33**は壺型土器で口縁部から頸部にかけての反転復元資料。内器面まで丹塗が施され、口縁部には沈線を持ち下位部は突出している。外器・内器ともナデ調整である。

エリア4　(第31図)

(c、d、e−2、i、j−1・2、2T、D−3) からの出土。

エリア4出土遺物は2点で、このエリア内の出土を提示した。

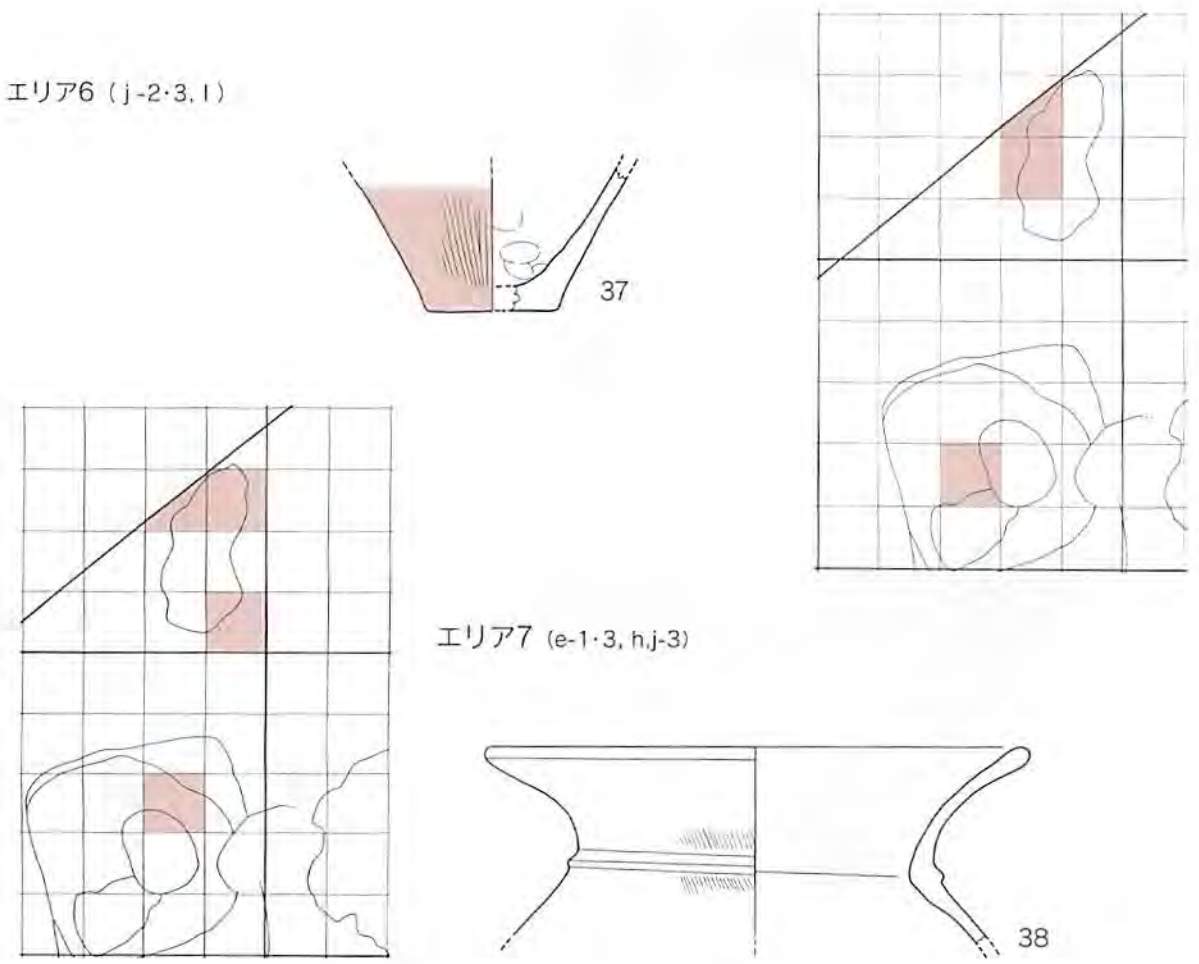
34は (c)・(d)・(e−2)・(i)・(j−1)・(j−2)・(2T) 出土の注口脚付小型壺である。丹塗が施され、口縁部はやや外反するが口唇部は内傾し口縁部には突帯を施す。裾部から脚部は強く立ち上がり、裾部端部は斜行になる。胴部は丸みを帯び、胴部最大径直上に鋭角に注口部が存在し先端が破損しているが、大きく突出はないようである。外器調整では口縁部は磨き調整、内器はナデ調整で穿孔上位に指圧痕、また脚部は絞り痕が見られる。

35は (e−2)・(j−1)・(j−2) 出土であるが、ここに仮置した。

反転復元資料。高坏脚から裾部であるが大型であるため筒形器台の可能性もある。全体に暗文が施されており裾部はナデ調整である。裾部の端部は摘み上げるようにやや突出する。内器の端部は横ハケ目調整である。一部D−3グリッドII層より出土しているが遺跡東側からの流れ込みであろう。

エリア5　(第31図)

(a、c、g、p、j−1・2) からの出土。



第32図　エリア6・7　出土遺物実測図 (1/3)

36は高坏。反転復元であるが坏から脚部上位資料で、全体に丹塗が施されている。坏部は深く椀状で口縁部は内部にやや伸びる鋤先口縁であるが断面はV字を呈している。口唇部に向かい細くなりやや上向く。脚は上位資料だけであるが裾部に向けて広がる傾向である。口縁部は放射状暗文が施されているがやや雑な感を受ける。坏部の内器は一部横磨きで外器はハケ目、脚は縦の磨き、脚内部はしぼり痕がみられる。

エリア6　(第32図)

(j－2・3、l) からの出土。

37は胴部下位から底部資料で反転復元である。底部は平底で外器面は磨き調整。内器面はナデ調整が施され指圧痕が見られる。急激に立ち上がることから甕型土器であろう。これも丹塗が施されている。

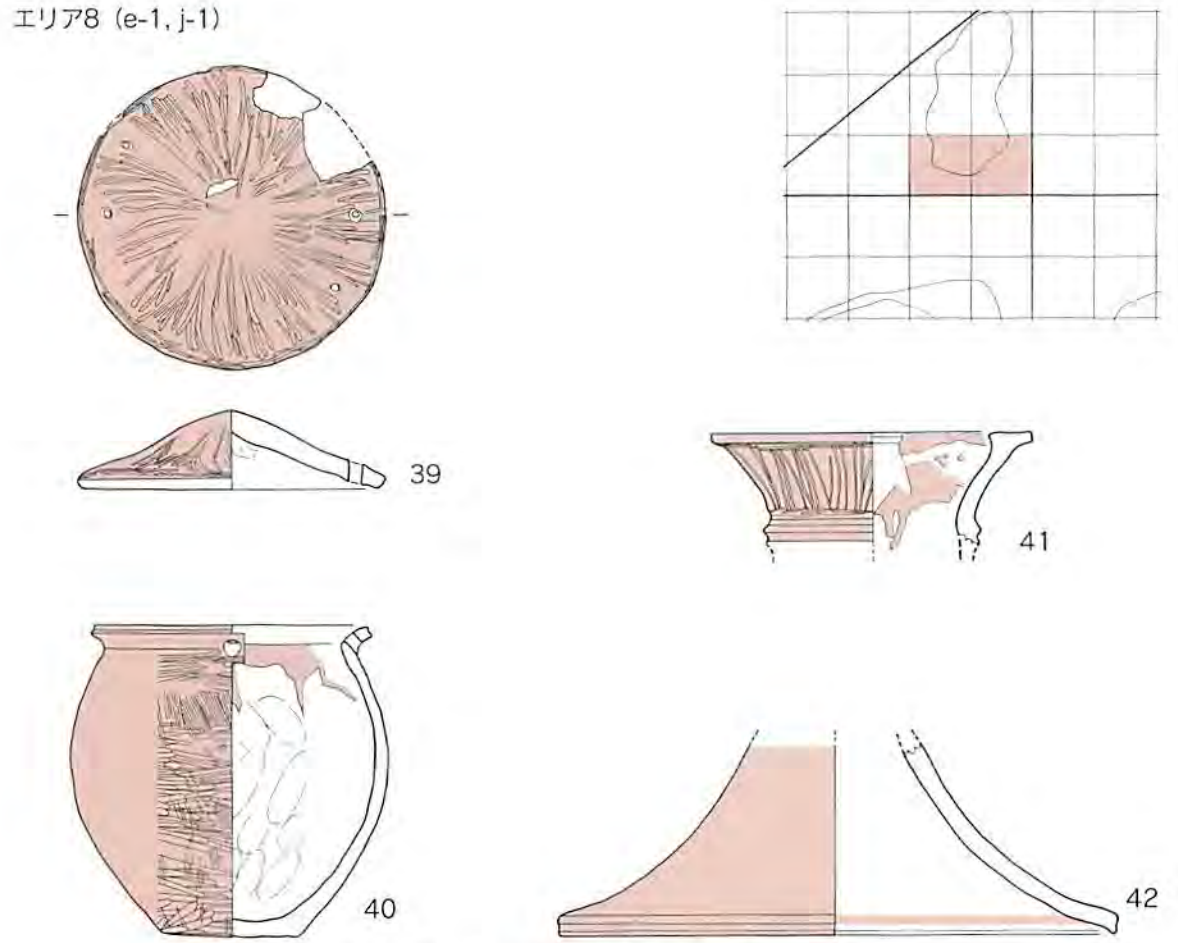
エリア7　(第32図)

(e－1・3、h、j－3) からの出土。

38は壺型土器の口縁部から胴部上位資料である。口縁部端部はやや肉厚で外反する。口縁部と胴部境に突帯1条施す。外器はナデ・ハケ、内器はナデ調整である。

エリア8　(第33図)

(e－1、j－1) 出土の遺物4点であるが、(e－1、j－1) グリッド各単独もここに包括した。

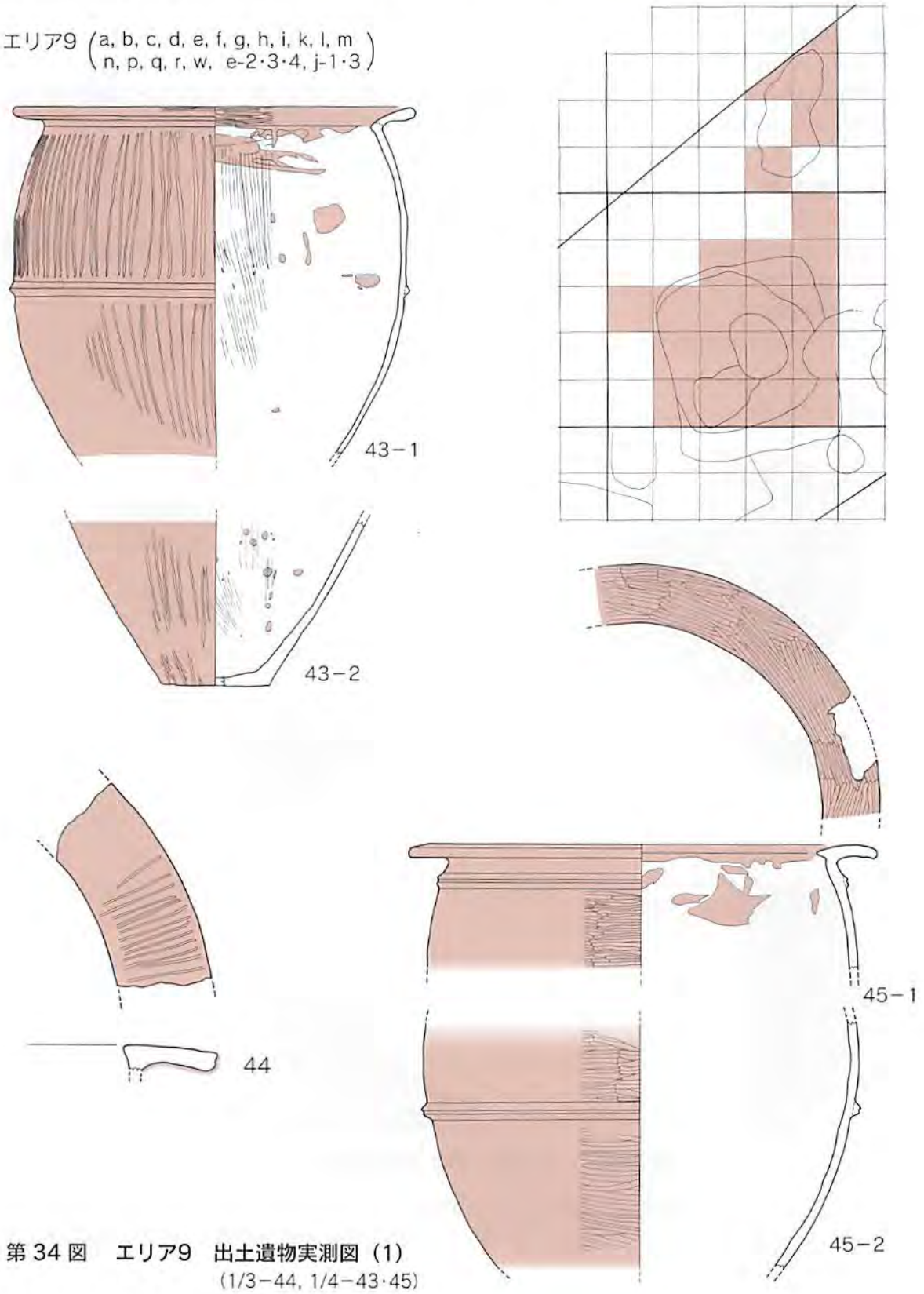


第33図　エリア8　出土遺物実測図 (1/3)

39は (e－1) 出土の丹塗の蓋である。口径12.2cm・器高3.2cmを測る。暗文を施し頂上部から放射状に施文する。均一された単位は見られず、やや蛇行する施文で、内器はナデ調整が施される。穿孔が4孔あり、2孔がそれぞれ対になっている。

40は（j－1）出土。丹塗の無頸小型壺で口縁部は「く」の字型に屈曲し１条の沈線を施す。最大径は胴部中心部で、外器はハケ目・横の磨き調整で、内器はナデ調整であるが指圧痕が顕著に見られる。内器には丹垂れの跡が見られる。口縁には穿孔があり２対が対角状になる。蓋39とセット関係であろう。

41は（e－1）・（j－1）出土。壺型土器の口縁部から頸部資料の反転復元である。口縁部は内側にやや突出



第34図　エリア9　出土遺物実測図（1）
（1/3－44, 1/4－43·45）

する鋤先口縁で口唇部に向けて水平である。口縁部は大きく外反し口縁部と頸部の境にはM字突帯が1条見られ、この間に鋸歯状の暗文が施されている。丹塗は内器面にも見られるが丹垂れであろう。

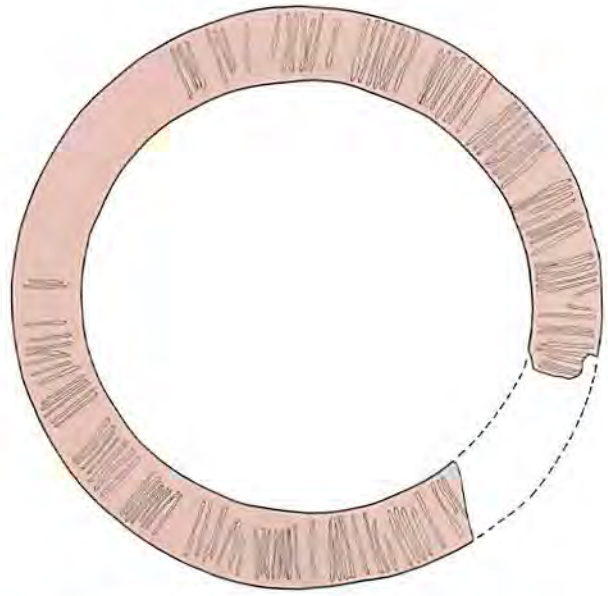
42は（j－1）出土の高坏脚部。反転復元であるが脚から裾部資料で裾部先端部は内湾気味に小さく尖出する。ローリングを受けているが、外器は丹塗が施されており、また内器は裾部にライン状の丹が施される。

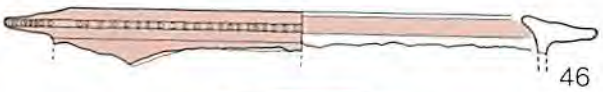
エリア9　（第34～40図）

ここではＳＸ－09・10の上層出土であるが、一部このブロック外からの出土も認められるが、ここに包括した。

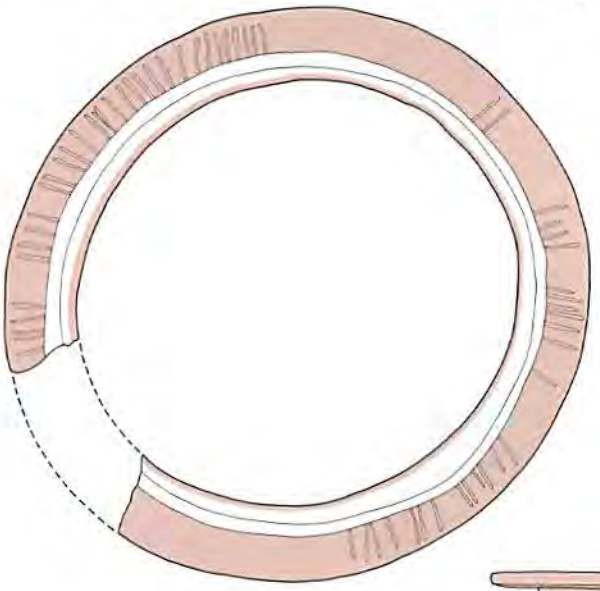
43－1は（e）・（h）・（i）・（l）・（p）・（q）・（w）出土の甕型土器。胴部に△状突帯を持つ。口縁はやや上がり先端は唇状に肉厚となる。最大径は突帯位置の胴部中心になる。暗文は全体に施され口縁部から突帯までと突帯から底部まであるが、何れも直線状に施されており、規格された間隔ではなく間延びした感を受ける。内器は口縁部に磨き、胴部はハケ目が見られる。外器は丹塗が施され、内器の口縁部までは意識しているのであろうが、胴部は筆跡と垂れ跡がみられる。

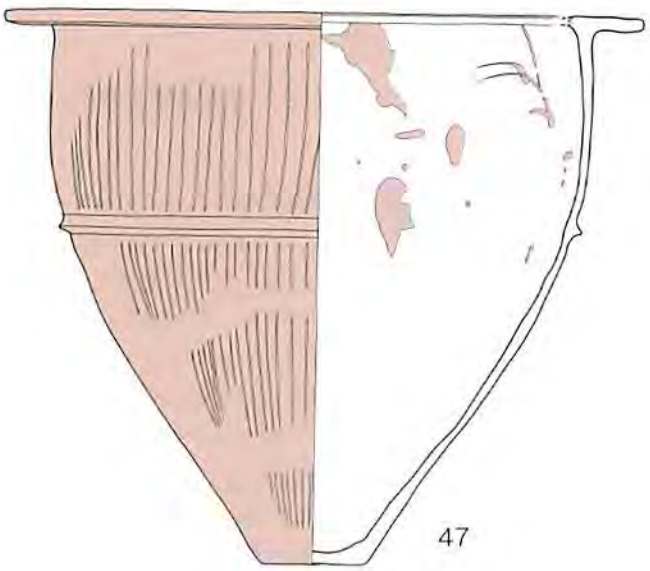
43－2は（e）出土。胴部下位から底部までの資料であるが、底部は平底を呈し、本来は**43－1**と同一個体であろう。これにも同規格の暗文がみられる。





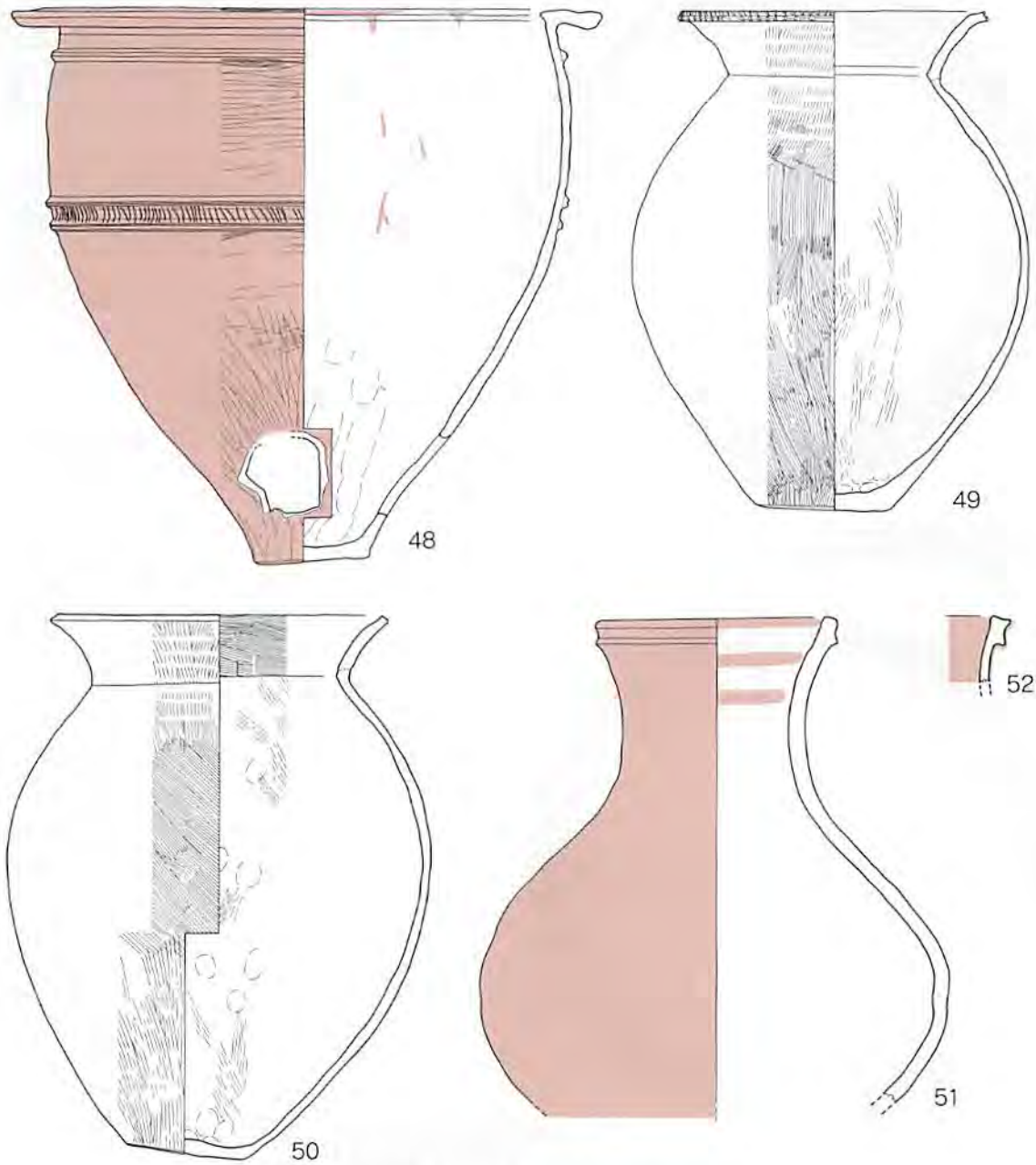
46





47

第35図　エリア9
出土遺物実測図（2）（1/4）



第36図　エリア9　出土遺物実測図（3）（1/3－51･52, 1/4－48～50）

44は（g）出土の甕型土器の口縁部資料である。大きく張り出さない鋤先口縁を呈し、口唇部に向かいやや垂れ下がり、口唇部には沈線を持つ。暗文が施され直線状ではあるが乱れた感を受ける。

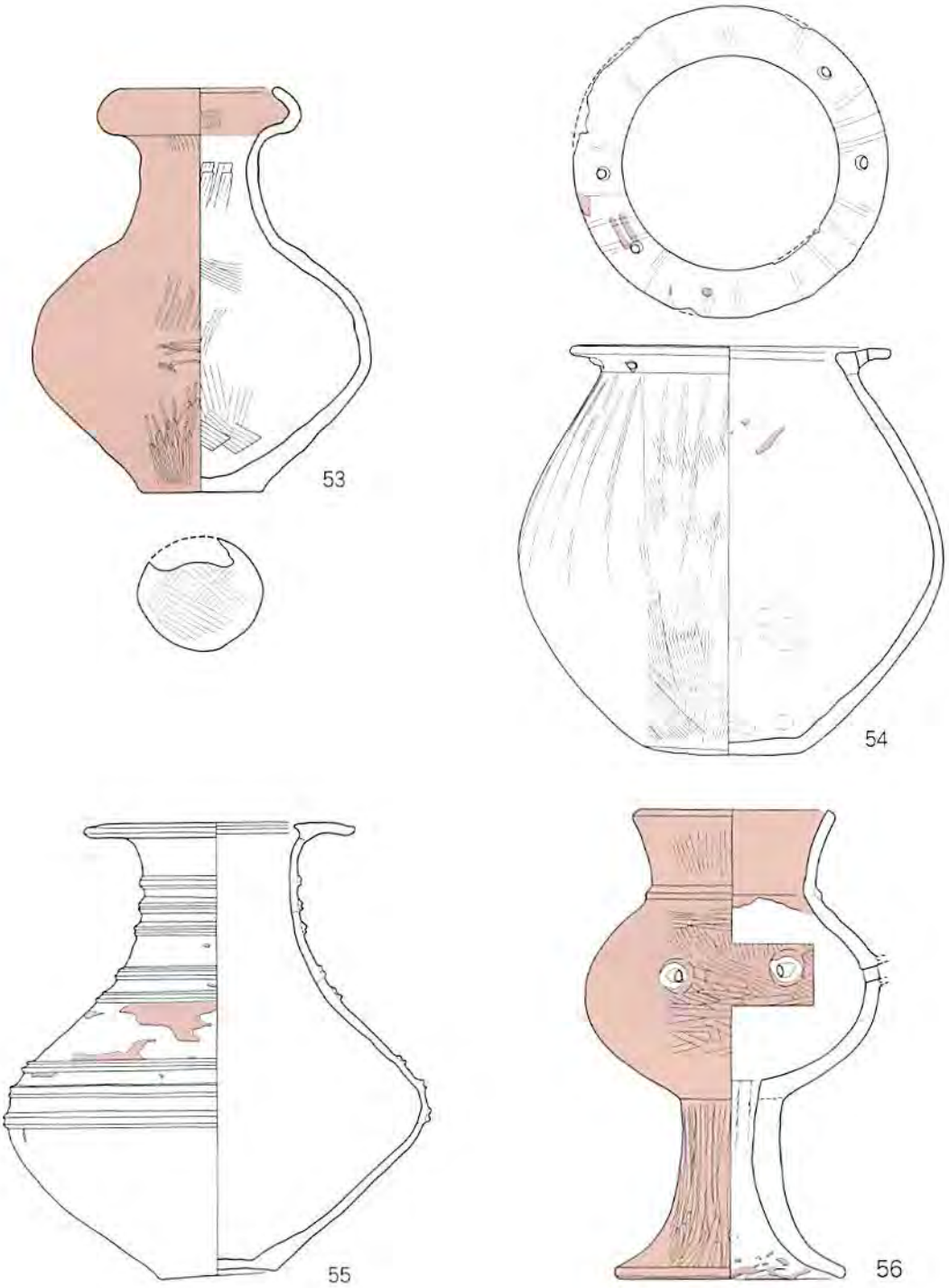
45－1は（e）・（f）・（h）・（m）・（r）出土の甕型土器の反転復元資料である。全体に丹塗を施し、内器面は口縁部近くに帯状の丹塗であるが丹垂れ・筆跡が見られる。口縁部は均一した厚みを持ち、突出した鋤先状で口唇部に向け口縁部中央で頂点後、口唇部に向かい緩やかに垂れ下がる。胴部上位に１条のM字突帯を持つ。外器面は横磨き、内器面はナデ調整で、口縁部は磨きを施す。

45－2は**45－1**と同一個体で胴部下位資料である。１条のM字突帯を持つが沈線がやや明確でない。最大径は**45－1**と合わせた２条のM字突帯間になると思われる。

46は（b）・（g）・（h）出土の甕型土器の口縁部資料としてはほぼ完形である。鋤先口縁を呈し内器先端は伸び上がるが、中央でやや窪み口唇部でやや上向く。暗文を施し８条前後を１単位として施文され、また内面

にも施文されているが、外面ほど繊細ではない。口縁部直下の胴部から意図的に破壊した感がある特異な資料である。

47は (b)・(d)・(e)・(e−2)・(g)・(h)・(p)・(q) より出土であるが、一部（ＳＨ−03）より出土している。丹塗の甕型土器で、口縁部は内部端部を欠くが、突出した鋤先状で、胴部付け根付近でやや細くなるが口唇部に向け水平に伸びる。胴部上位で最大径下位に１条の△状突帯。突帯から底部に向かい窄まり、底部は



第 37 図　エリア9　出土遺物実測図（4）（1/3−53·54·56, 1/4−55）

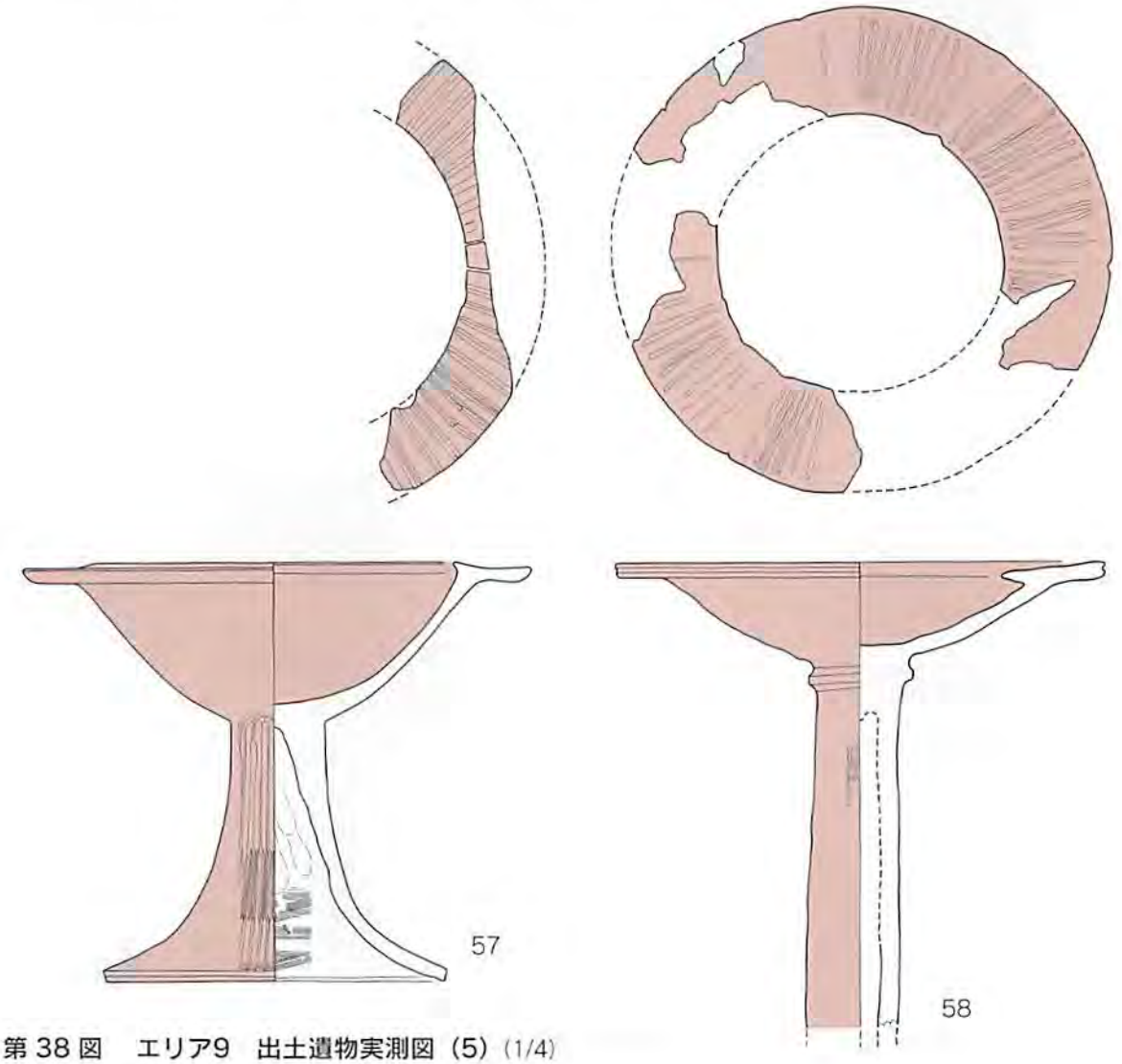
やや上げ底を呈する。胴部上位と突帯間に幅2～3mmの暗文が7～8mm間で施され、突帯から胴部下位までも施文が行われている。口縁部内面には丹垂れの点描が夥しい。

48は（b）・（d）・（e－2）・（e－3）・（j－1）・（n）より出土の甕型土器である。口縁は鋤先状でやや垂れ下がる。M字突帯を胴部上位と、胴部中央の２ヶ所に持つ。全体的な暗文は見られないが、胴部中央の突帯間の僅かな間隔に直線状の暗文が見られる。最大径は上位の突帯と胴部突帯間にあり、下位は緩やかに窄まり底部近くで急激に窄まる。外器は軽い磨き、内器はナデ調整である。指圧痕が内器の胴部下位に見られる。外器には丹塗が施されており、内器の口縁部直下にも丹塗が見られるが雑の感があり、内器には数点の垂れ跡が見られる。胴部下位に穿孔があり、外器からの強い敲打が行われていることを窺わせる。

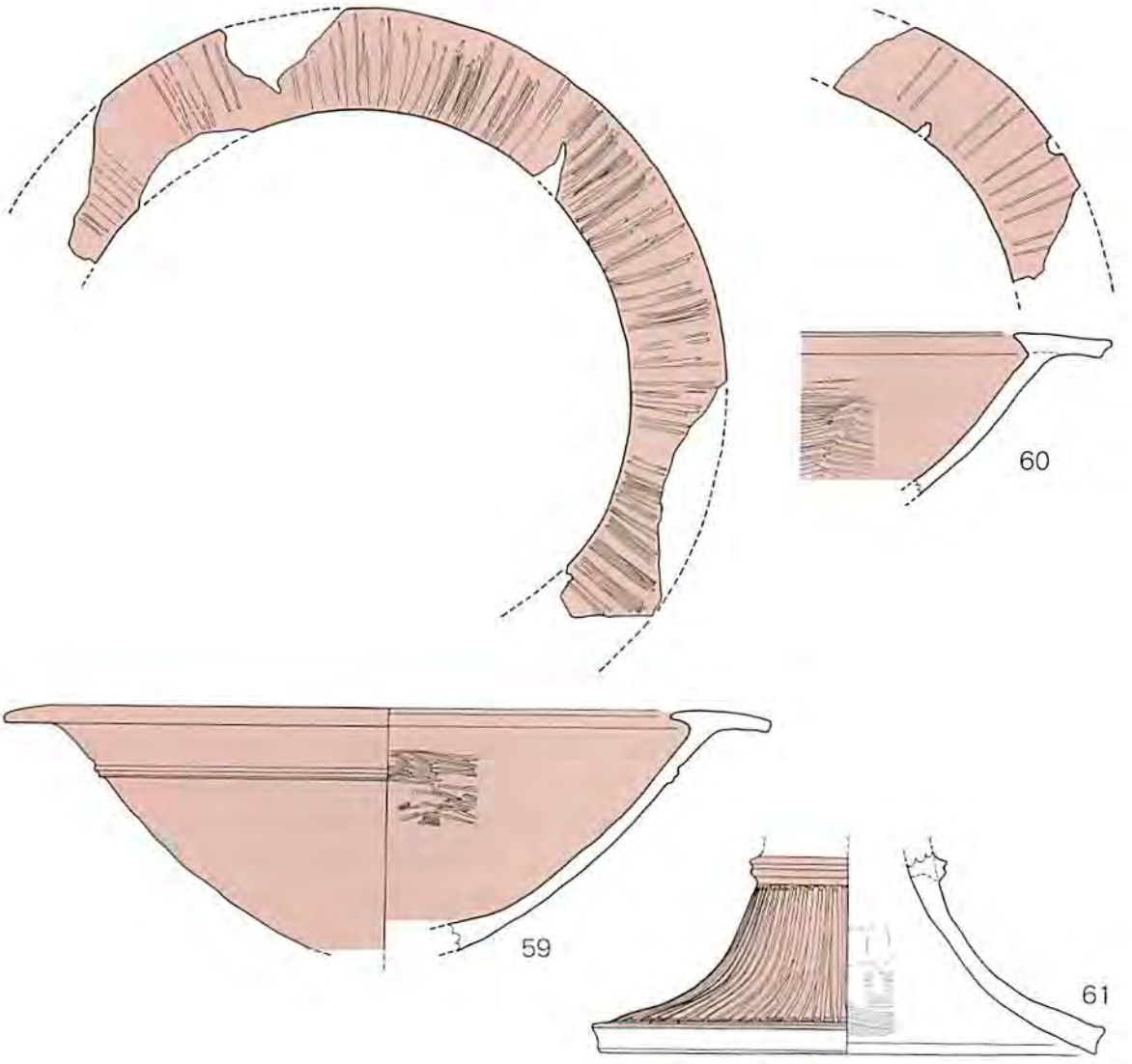
49は（c）・（e）・（g）・（h）より出土の壺型土器。口縁部は「く」の字型に屈曲をし、口唇部はやや外反し、口唇部には１条の沈線に刻みを上下２本施す。外器はハケ目・内器はハケ目調整後、ナデ調整を施す。最大径は胴部中心で底部は平底を呈する。

50は（c）・（d）・（f）・（g）・（h）・（i）より出土の壺型土器。口縁部は「く」の字型に屈曲し、やや外反するが口唇部は内傾する。外器・内器ともハケ目調整を施し、内器は指圧痕も認められる。最大径は胴部中心部より上位に位置する。底部は平底を呈する。

51は（e）・（g）・（h）より出土の壺型土器。反転復元で口縁部から胴部下位資料である。丹塗が施され口縁部内器面には３条の帯状横施文が認められる。口縁部はやや外反し、口唇部は沈線である。頸部は窄まり短頸で、胴部最大径は胴部中央に位置する。外器・内器ともナデ調整である。



第 38 図　エリア9　出土遺物実測図（5）（1/4）



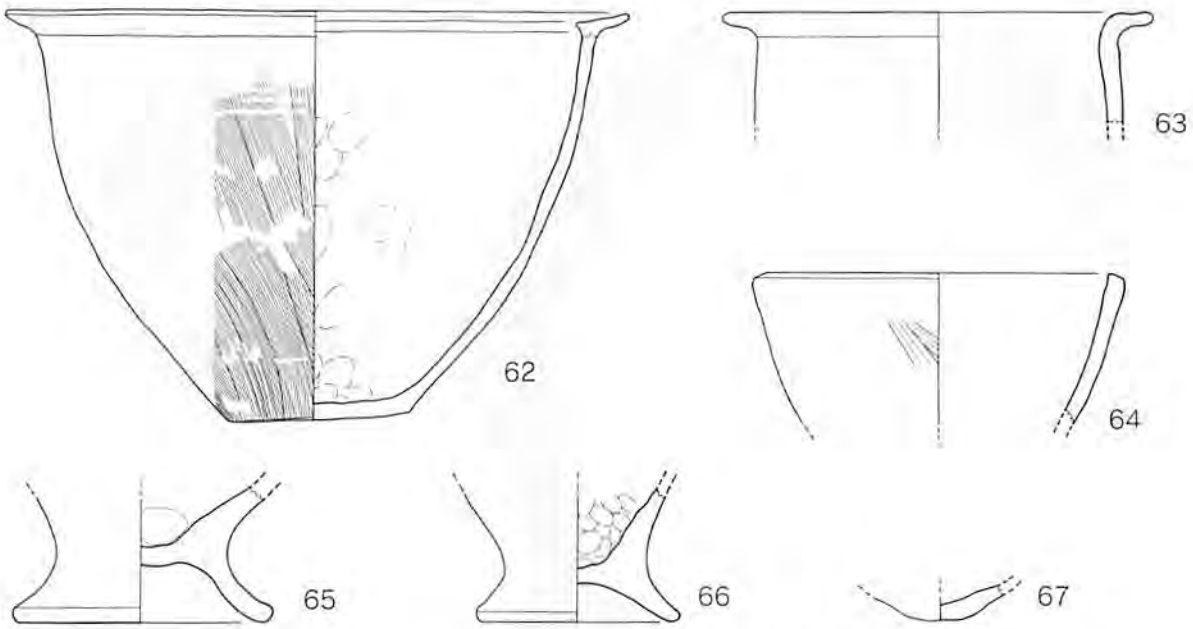
第39図　エリア9　出土遺物実測図（6）（1/3 60·61, 1/4−59）

52は（SX−09·10）より出土。壺型土器の口縁部資料である。やや外反し沈線を持つ。これも丹が施されている。

53は（e）·（g）·（h）より出土の壺型土器で、袋状口縁を有し口縁は半円状に窄まる。丹塗を施されているが剥落しており本来は耽美であったろう。頸部と胴部上位に一部暗文が確認される。調整は胴部張り出し最大径で横磨き、底部から胴部下位は磨きが施される。内器は頸部に篦状工具、胴部張り出しから下位底部にかけてはハケ目調整である。また底部にもハケ目を施す。

54は（e）·（g）·（h）より出土の無頸小型壺。口縁部はやや鋤先状で口唇部に向けて上向く。最大径は胴部中央よりやや下位に位置し、底部は平底を呈する。外器面は口縁直下から胴部最大径付近まで直線状に２〜３条のハケ目状調整が見られ、これも暗文である。内器はナデ調整を施す。口縁には穿孔があり２対が対角状になることから、蓋とセット関係であろう。丹が一部に見られるが**31**のように丹がこの土器に付着したのか、しかしこの土器の性格から本来は丹塗りの可能性が想定される。

55は（d−4）·（e−4）·（h）·（i）·（j−3）·（q）より出土の壺型土器。口縁部は鋤先状で先端は垂れ下がるが口唇部はやや摘むように上向く。短頸で胴部は算盤型、最大径は胴部中央に位置し、底部は上げ底である。M字突帯を頸部に３条と下位に２条、胴部上位に２条、最大径に１条有する。外器・内器ともナデ調整である。一部、丹が認められるが丹が剥がれたものでなく、意図的なものか偶発であるか不明である。



第40図　エリア9　出土遺物実測図（7）（1/3）

56は（d）・（g）・（h）・（k）・（q）より出土の注口脚付小型壺である。丹塗が口縁部内器まで意図的に施されている。口縁部は外反し口唇部は内傾を呈する。口縁部と胴部の境に１条の突帯を施し、胴部は丸みを帯び、脚部は緩やかであるが裾部は大きく広がり、裾部先端部は丸みを帯びる。胴部最大径直上に２口の穿孔があり鋭角である。先端が破損しているが、大きくは突出していないようである。胴部と脚には区切りがなく機能的な課題を生じる。外器調整は口縁部ハケ目調整、胴部はハケ目後磨き、脚部は磨きを施す。

57は（b）・（e－4）・（h）より出土の高坏で坏部は深く椀状である。口縁部は内部に伸びる鋤先口縁を呈し、口唇部に向かい垂れ下がりながらやや上を向き口唇部は斜行である。また坏付け根でやや細くなり口唇部でやや肉厚となる。脚は短く、裾端部は細沈線を施す。丹塗を施し、坏部の内器はナデ、外器は強いナデ調整である。脚は縦の磨きであるが施文に差異があり下位になるにつれ、大→小→中となる。特に脚中央部は暗文を意識しているようにも見える。脚内部は指圧痕・絞り痕で下位はハケ目調整である。口縁部は3mm前後を２～３単位で放射状の暗文を施す。

58は（a）・（b）・（e）・（g）より出土の高坏。坏から脚部資料で、丹塗を施し坏部はかなり浅く皿状を呈し、脚は直線状でその器形を変えず細長い。脚部上位に１条の突帯を有し、口縁部は内部に強く伸びる鋤先口縁で、口唇部に向かい緩やかに伸び上がり沈線を有する。坏部の内外器はナデ調整、脚は縦の磨きが一部確認される。口縁部は幅2mm強の縦方向の放射状の暗文が施されるが、単位を意識しているのか明確でない。

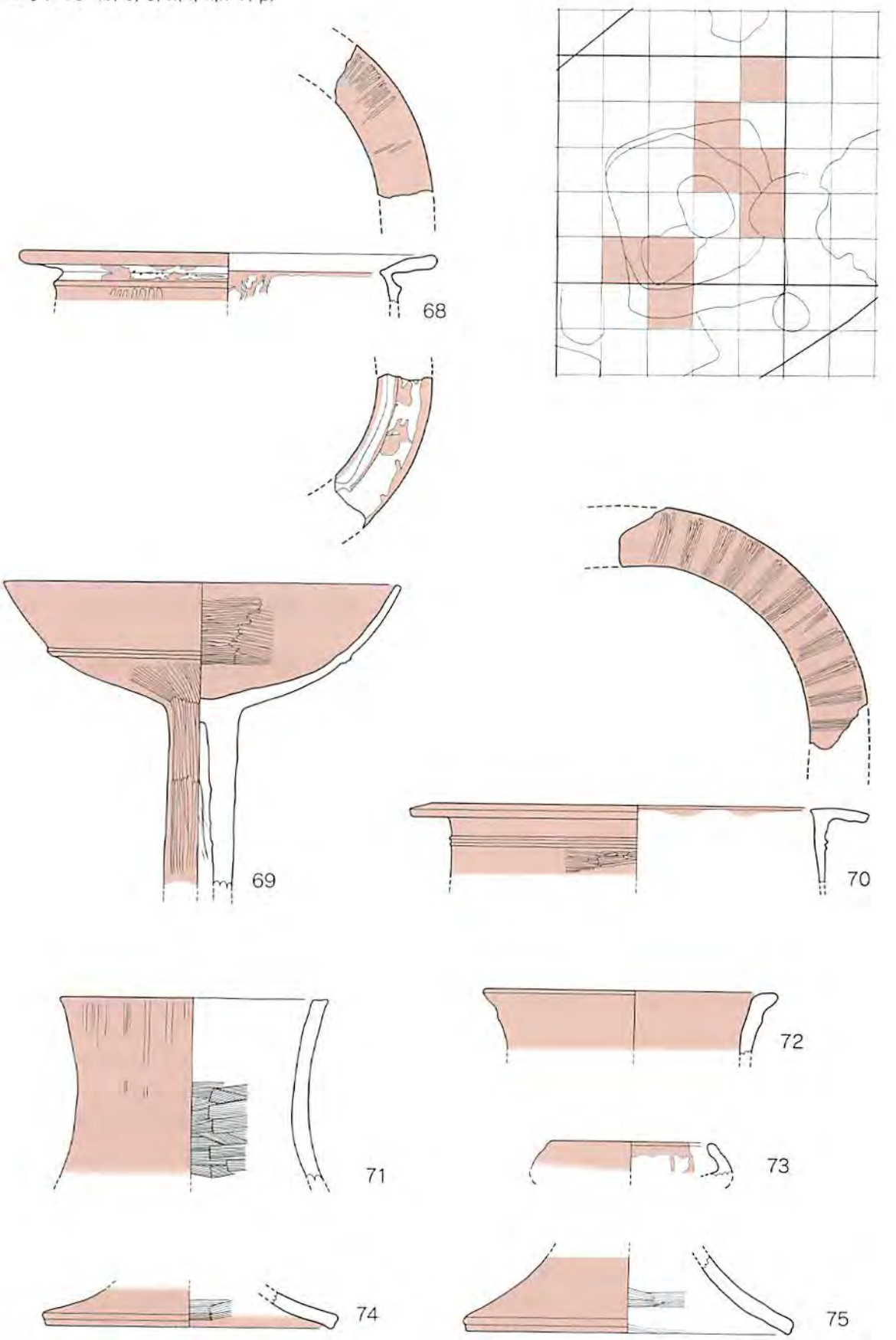
59は（b）・（e）・（k）・（p）より出土の高坏で口縁部から坏部の反転復元資料である。口縁部は鋤先口縁で平坦に伸びるが垂れ下がり、口唇部はやや斜行に切れる。丹塗を施し、坏部の内器は横磨き、外器はナデ調整を施す。坏部上位にM字突帯を1条有する。口縁部は1mm前後の暗文で２～６条を単位としてあるが全体に均一した感を受けない。

60は（h）より出土の高坏。口縁部から坏資料である。口縁部は内部に伸びる鋤先口縁で、平坦に伸び僅かに垂れ下がり、口唇部は斜行に切れ弱い沈線を有する。丹塗が施され、坏部の内器は横磨き、外器はナデ調整である。口縁部は1mm前後の暗文で２条を１単位として、やや間隔を保ちながら放射状に施文される。

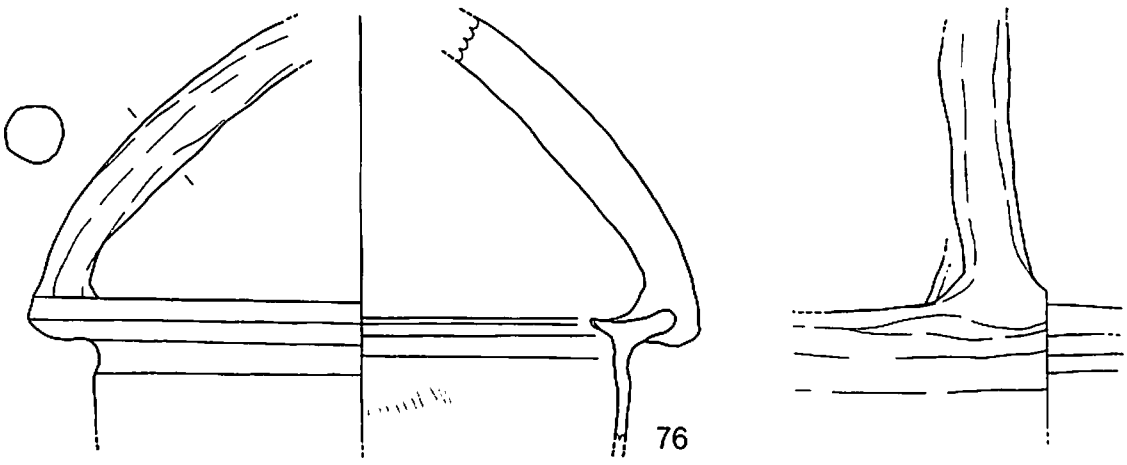
61は（e）・（g）より出土の高坏の脚から裾部資料である。脚下位にM字突帯を有し、この位置から縦方向に幅1～2mm前後の暗文が施される。裾部はナデ調整で、端部はやや斜行に落ち沈線を有する。内器は指頭圧痕とハケ目調整が認められる。外器は丹塗が施されているが、裾部端部にはそれが見られない。

62は（c）・（b）・（d）・（g）・（h）・（i）より出土の鉢型土器である。口縁部は鋤先状で口唇部に向け先細りながらやや上向く。胴部は緩やかに窄まりながら急激に底部にむかう。外器調整はハケ目調整、内器は指頭

エリア10 (b, c, e, h, i, k,k-1, p)



第41図　エリア10　出土遺物実測図（1）（1/4−68〜70，1/3−71〜75）



第42図　エリア10　出土遺物実測図（2）（1/3）

圧痕、底部はナデ調整が施される。

63は（g）・（h）より出土の鉢型土器で口縁部から胴部上位の反転復元資料である。逆L字口縁を有し、口唇部に向け先細る。外・内器ともナデ調整を施す。

64は（g）・（h）より出土の鉢型土器。反転復元であるが口縁部から胴部上位資料である。直上口縁を有し口唇部は斜行である。外器ハケ・内器ナデ調整である。

65は（g）・（h）より出土の甕脚部で先端部はやや外反する。外器・内器ともにナデ調整であるが、内器は指圧痕が認められる。

66は（b）・（g）より出土の甕脚部で先端部はやや摘むような形態である。これも外器・内器ともにナデ調整であるが、内器は指頭圧痕が認められる。

67は（g）より出土のミニチュア土器底部資料であろう。底部はやや丸底で緩やかに立ち上がる。風化が激しいが外・内器ともナデ調整である。

エリア10　（第41・42図）

ここではSX－09・10の下層出土であるが、ここも一部このブロック外からの出土も認められるため、エリア9と同様にここに包括した。

68は（b）より出土の甕型土器の口縁部から胴部上位の反転復元資料。口縁部はやや突出し僅かに鋤先状を呈する。口唇部に向かい上向き肉厚となる。胴部上位に1条の突帯を有し、丹は厚く施されているが口縁部と胴部の境は点描の丹である。内器面は胴部との境に帯状に施されているが、3～4mmの丹垂れである。胴部に暗文と思われる施文が見られるが、口縁部には暗文を施し単位として施文されているようである。また内面は丹垂れが認められる。

69は（k）・（k－l）（p）より出土の高坏で坏から脚部資料。全体は丹塗が施されており、坏部は浅く塊状を呈し、坏部中央部に垂れたM字突帯を1条有する。脚端部は**58**と同様にその器形を変えず細長い。坏部の内器は横磨きで外器は口縁部から突帯までナデ、突帯下位は縦の磨きである。この磨きが脚下位まで施される。脚内部は捻り痕が認められる。

70は（e）・（k）より出土の甕型土器。反転復元であるが口縁部から胴部上位にかけての資料である。口縁部は弱い鋤先状で口唇部に向かい緩やかに垂れ下がる。胴部上位にM字突帯があるがこの突帯も弱く垂れている。外器面はM字突帯下位に横磨き、内器面はナデ調整を施す。口縁部上位は幅2～3mmの暗文が施され4～7条を1単位として施文されている。丹塗が施されているが内器は口縁部の丹垂れであろう。

71は（h）より出土。反転復元資料。丹塗が僅かに認められ、口縁部はやや外反し口唇部は平坦である。外反状態から筒形器台の口縁部であろう。外器は幅2～3mmの直線状の暗文を施す。内器は横のハケ目調整。

72は（b）より出土の壺型土器の反転復元の口縁部資料。外反し口唇部は摘むように上向く。丹塗が内外器

に施されているが、ローリングを受けており風化が激しい。

73は（b）・（c）より出土の壺型土器の反転復元の口縁部資料。口縁部上位の資料であるため不明であるが袋状口縁であろう。丹は内器まで施されているが丹垂れがみられる。

74は（e）より出土の高坏。裾部の反転復元の資料。丹塗が施されているが、裾部内器にも認められる。端部はやや斜行に落ちる。外器はナデ調整であるが、内器はハケ目が認められる。

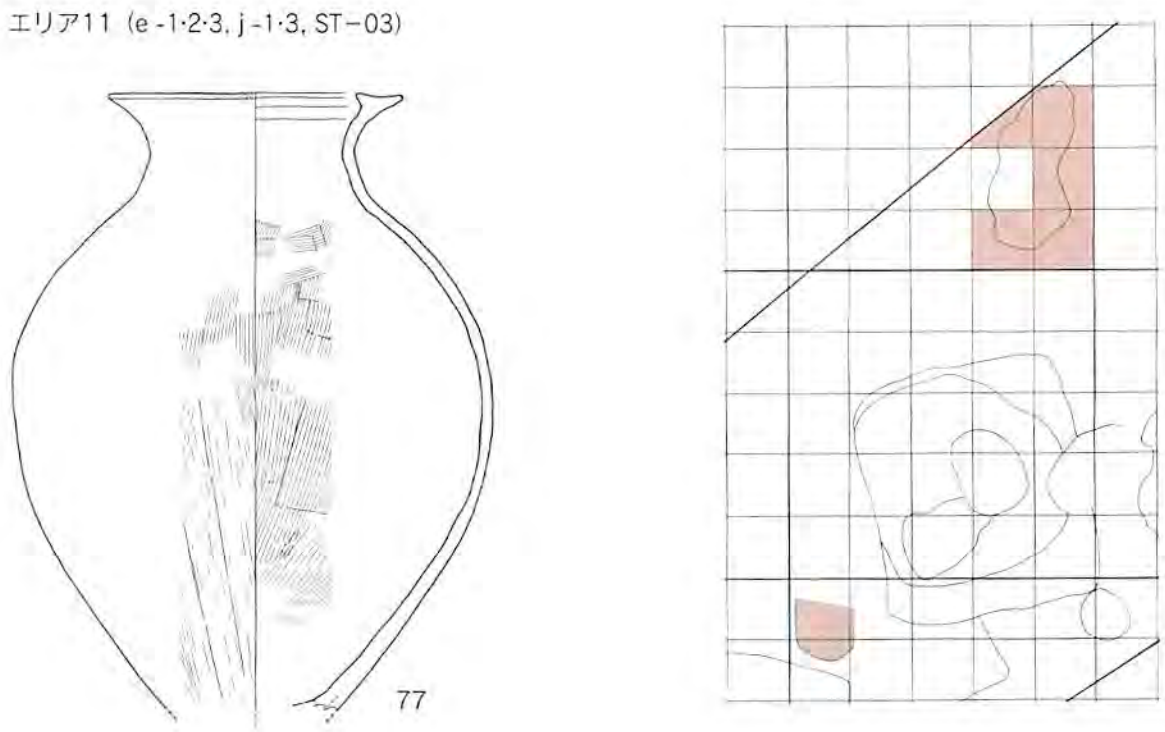
75は（i）より出土の高坏。反転復元の裾部資料で端部は内傾する。ローリングを受けているが、外器は丹塗が施されて、外器はナデ・内器はハケ目調整を施す。

76は（k）より出土。口縁部は鋤先状を呈し中央で窪み、口唇部はやや上がり肉厚となる。胴部は一部資料であるため、全体の器型は不明であるが甕型を呈するか。口縁部の円錐状突起物がU字型に延び両端に接合が想定される。これは把手の機能であろうか。甕型土器の範疇であるが不明土器である。また出土状況は把手部が垂直に突き刺さるようであった。このため調査時は粘土帯の一部という概念であったが、整理時に判明した。調整は外器ナデ・内器は一部、ハケ目調整を施す。

エリア11　（第43図）

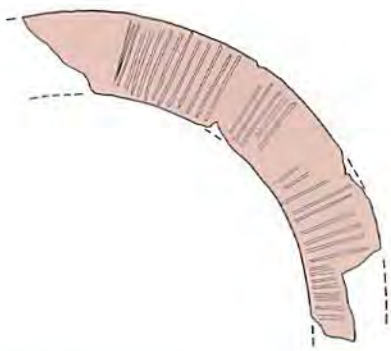
（e－1・2・3、j－1・3、ST－03）出土。

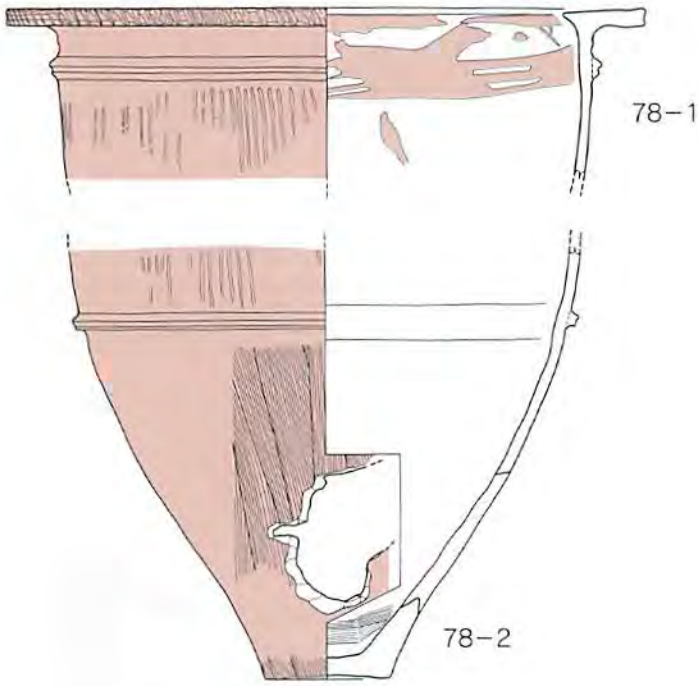
77は壺型土器で、口縁部は鋤先状で先端に向けてやや落ち込み口唇部で上向く。口唇部は僅かであるがヘラ状工具による刻目状が見られるが明確でない。最大径は胴部中央に位置する。外器面はハケ目・工具によるナデ調整・内器面も同様である。またこの資料はST－03の出土遺物と接合したが、主にST－03以外から出土したため、ここに配置した。

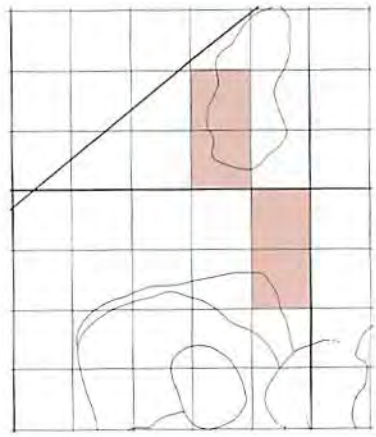


第43図　エリア11　出土遺物実測図（1/4）

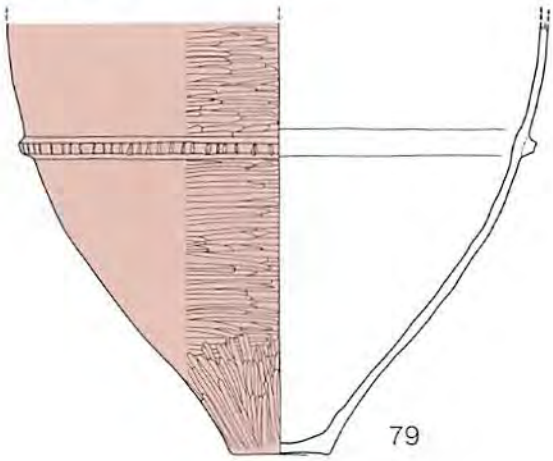
エリア12 (d, e, j -1·2)

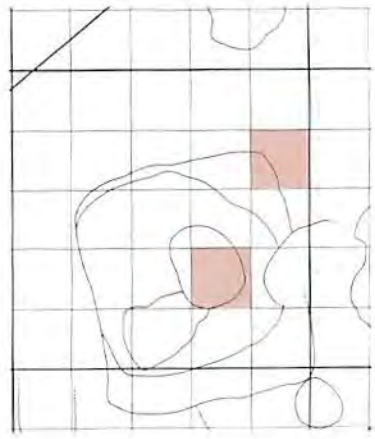






エリア13 (d, g)





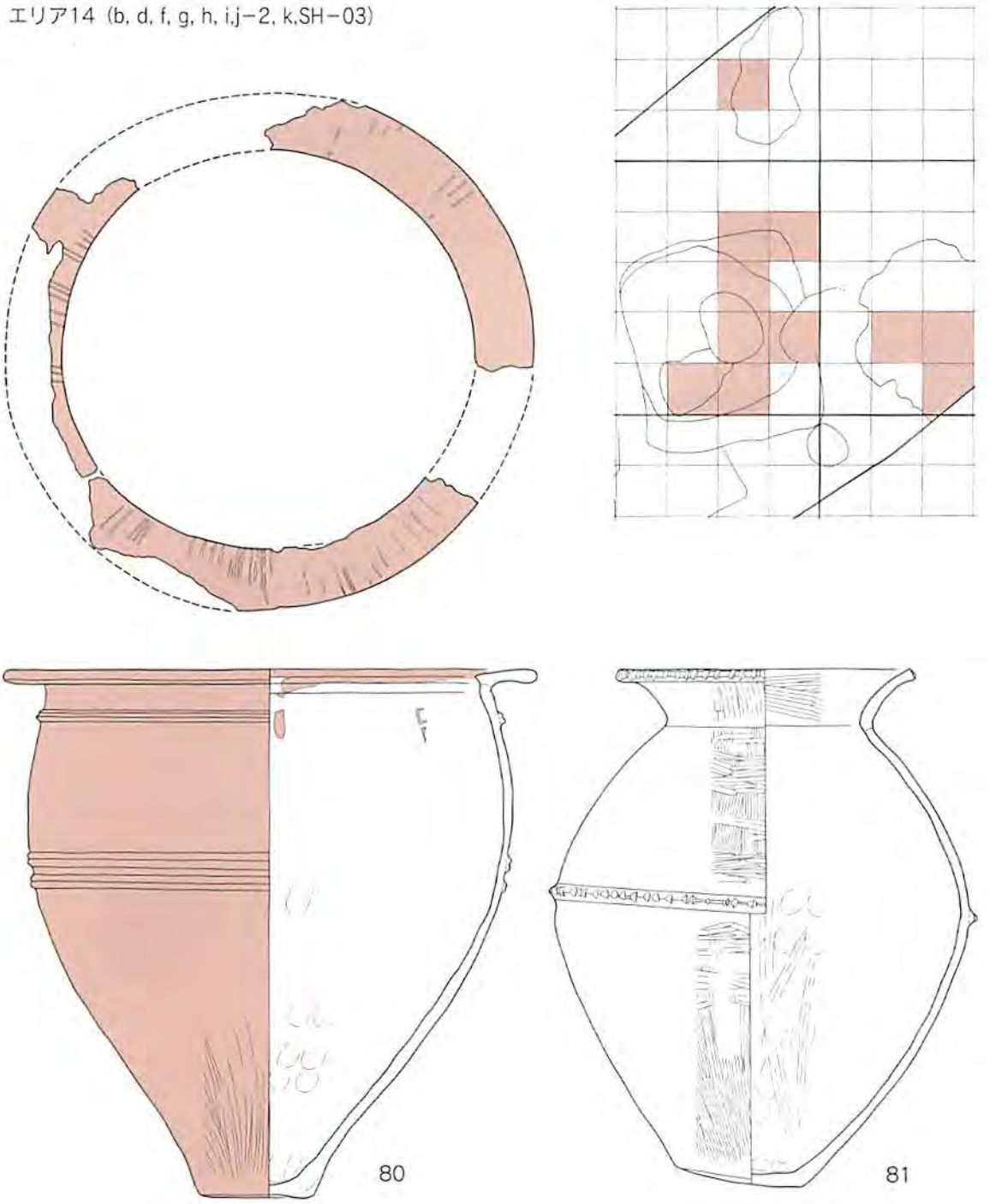
第 44 図　エリア12・13　出土遺物実測図 (1/4)

エリア12　(第44図)

(d、e、j－1・2) より出土。

78－1・2は甕型土器の反転復元資料で口唇部にはヘラ状工具での刻目を施す。丹塗が施されているが内器は筆痕・丹垂れであるが、内器彩色を意識はしているのであろうか。**78－1・2**は同一個体で、胴部上位と胴部中央に1条のM字突帯を有し、胴部上位と胴部中央の突帯が垂れていることから後述するが、この時期の後期であろう。外器面のM字突帯間は直線状の暗文、胴部中央突帯下位は縦方向のハケ目を施す。底部はやや上底を呈し、胴部下位底部近くに穿孔があり意図的に破壊されたものか。口縁部は(d)・(e)より、底部は(j－1)・(j－2)より出土している。

エリア14 (b, d, f, g, h, i,j−2, k,SH−03)



第45図　エリア14　出土遺物実測図 (1/4)

エリア13　（第44図）

（d、g）より出土。

79は甕型土器の胴部～底部の反転復元資料。丹塗が施され、最大径は上位にあると思われ、胴部下位に刻目突帯を有し、底部はやや上底を呈する。外器は磨き調整で胴部は横、底部から胴部下位に向けて縦の磨きになる。内器はナデ調整である。

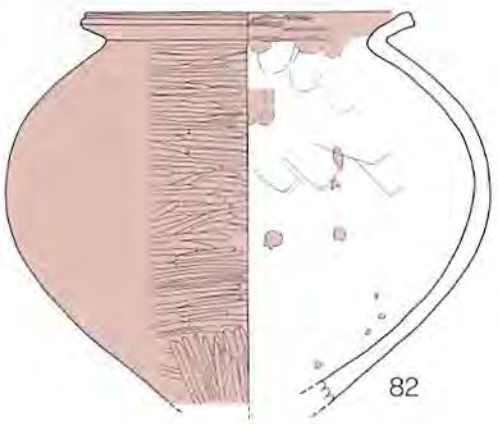
エリア14　（第45図）

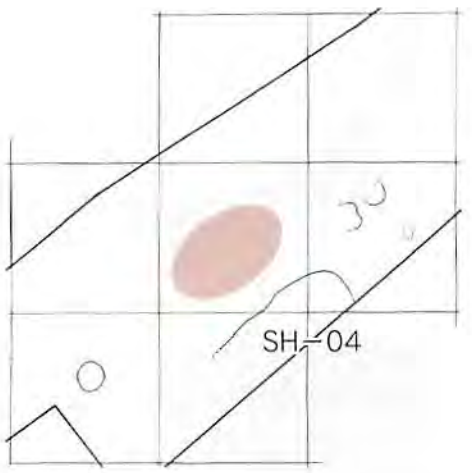
ここではＳＨ－03と接合した遺物を取り上げた

80は（d）・（g）・（h）・（i）・（k）・（j－2）・（SH－03）からの出土の甕型土器。M字突帯を胴部上位と胴部中央に２条有する。口縁は弱い鋤先状で、口唇部に向かい肉厚となりやや上向く。丹塗が施され内器口縁部にも僅かであるが認められる。最大径は胴部上位の突帯と胴部中央の突帯間に位置する。胴部の突帯より緩やかに向かい底部で窄まり、底部はやや上底を呈する。風化が激しいが胴部下位の底部付近で磨きが確認され、内器はナデ調整である。口縁部も風化が激しいが４条程を１単位としての暗文が想定される。

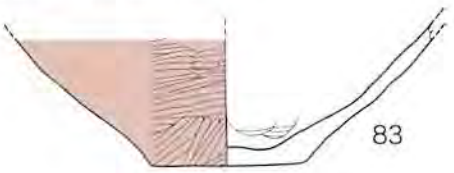
81は（b）・（k）・（f）・（SH－03）からの出土の壺型土器。口縁部は「く」の字型に屈曲しやや外反する。口唇部にヘラ状工具での刻目を１条、胴部最大径に刻み突帯１条施す。外器ハケ後、横磨きで内器はハケ目調整である。最大径は胴部中心部の突帯付近である。底部は平底を有する。

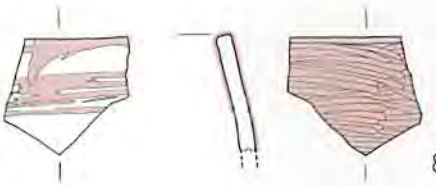
エリア15（SH－04 北側）

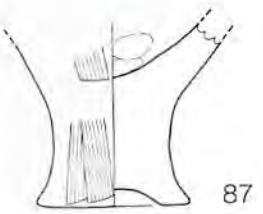




第Ⅲ層　他の出土遺物







第 46 図　エリア15 出土遺物実測図（1/3）　**第Ⅲ層　他の出土遺物実測図**（1/3）

エリア15　（第46図）

ＳＨ－04の北側の撹乱層から出土したもので、遺構・遺物集中区であるⅡ区とは位置的に距離がある。

82は無頸壺で胴部下位から底部資料を欠く反転復元である。口縁部は「く」の字型に屈曲しやや外反する。口唇部に沈線を施し、胴部最大径は中央部に位置する。調整は外器を横磨き、下位は縦の磨きである。内器の上位は指圧痕、最大径付近は下からのヘラ削り、その後ナデ調整が認められる。

第Ⅲ層　他の出土遺物　（第46図）

基本土層の第Ⅲ層より出土したものである

83　胴部下位から底部の反転復元資料。丹塗を施し、底部は平底を呈する。外器は磨き、内器はナデと底部付近に指頭圧痕が認められる。底部からの立ち上がりから壺型土器であろう。

84　口縁部資料　丹塗を施し、外器は磨き内器はナデ調整である。内器は4～5ｍｍ幅で丹塗が施されているが筆跡も見られる。無頸壺であろう。

85　丹塗であるが風化が激しく剥落している。調整は外器面・内器面ともナデ調整であるが、内器面には丹垂れが見られる。器台か高坏の裾部資料である。

86　口縁部資料でローリングを受けている。外・内器面ナデ調整　風化が激しいが一部丹塗が認められる。また暗文の痕跡も見られるが明確ではない。器台口縁部か。

87　脚部資料　底部はやや上底で外器はハケ目、内器は指圧痕が認められる。

他の出土遺物　（第47図）

これも基本土層の第Ⅱ層より出土したものであるが、大半は流れ込みである。

88は壺型土器の頸部から肩部の資料で直の頸部から緩やかに肩部に向かう。外・内器ともナデ調整である。

89　ローリングを受けているが、中世の火鉢の口縁部破片である。外器面には花弁状のスタンプが施される。口唇部は平坦でまた肉厚であるが下位につれ薄くなる。口縁部と花弁状スタンプ間に突帯が確認できる。奈良火鉢の類か。

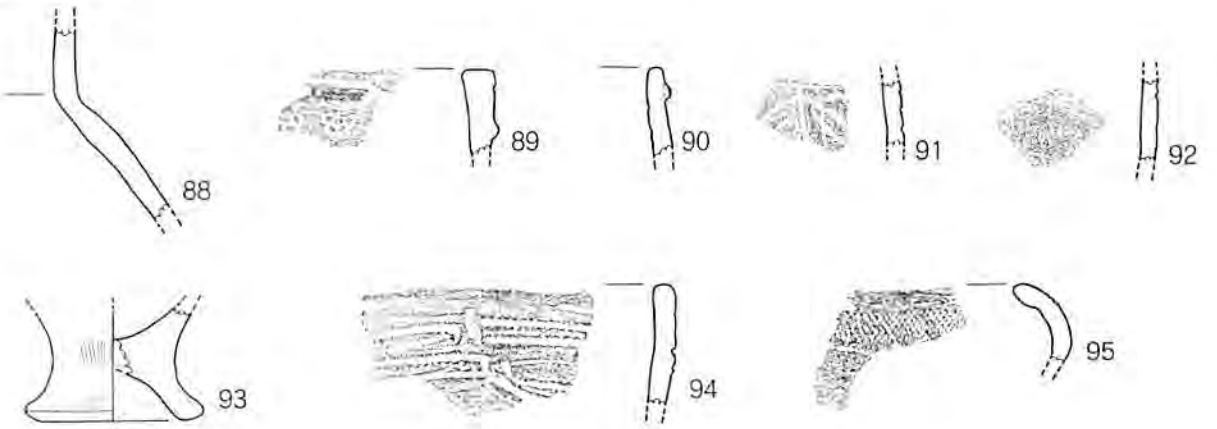
90　縄文晩期土器の深鉢であろうか。口縁部に刻目突帯を施す。外器調整はナデ調整後、ハケ目が沈線状に施される。

91　深鉢の胴部資料。外器に細沈線が綾杉状に施され、縦に２本の細沈線が見られる。小破片であるため形式等は不明である。ここでは資料紹介に留めたい。

92　これも小破片であるため詳細は不明であるが、外器に細沈線が施される。船元式の瀬戸内系か。

93　甕脚部、裾部はやや広がり裾部先端部はやや平坦である。これも外器ハケ目・内器ナデ調整である。

他の出土遺物



第 47 図　他の出土遺物実測図（1/3）

94　縄文後期土器で深鉢の口縁部である。外器調整は２条の沈線文を施し、その間に磨り消し縄文が確認される。

95　口縁部資料　口縁部は丸みを帯び内傾している。口縁部端部はやや肉厚である。磨り消し縄文を施した鉢であろう。

第２節　石器 他

1　旧石器時代の石器

（1）　三稜尖頭器　9

旧石器時代の遺物は包含層から１点のみの出土である。角礫の自然面を残す剥片を素材として、腹面の全体に平坦剥離が施され素材面は残らない。背面は素材の時点で得られた稜を生かして先端と基部に腹面及び稜上から平坦剥離が施される。使用石材は漆黒色で白い長石を多く含んでいることから小国産黒曜石と見られる。

時期的な位置づけについては、原位置を離れており、共伴する遺物が見られないため明確にすることはできない。ただし、三稜尖頭器の時期的な位置づけからＡＴ上位に属することは明らかである。小国盆地内の遺跡として小国町下城遺跡では三稜尖頭器66点が出土しており、小国産黒曜石が多く使用されている。

2　縄文時代の石器

（1）　石匙　14

縄文時代に属すると考えられる石器として石匙が１点出土している。弥生時代住居埋土中からの出土なので原位置ではない。横長剥片を素材として、左右両側からの加工によってつまみが作り出される。刃部に剥離面が観察されるが小型且つやや不規則であるために刃部調整によるものではなく使用によって生じた刃こぼれと考えられる。左側を欠損する。使用石材はサヌカイト質安山岩である。原位置を離れているため時期は不明である。

3　弥生時代の石器

（1）　磨製石鏃　3～8・13

弥生時代の石鏃が８点出土した。その出土状態は包含層もしくは住居址の貼床埋土からの出土で遺構に直接関係するものではない。

使用石材は粘板岩２点1（第９図）・4、蛇紋凝灰岩２点6・7、凝灰岩１点8、頁岩１点3、チャート１点13、結晶片岩１点 5である。

出土した石鏃は欠損により判断できないもの5・7を除いて何れも凹基無茎式で平面形状から正三角形を呈するもの8と、二等辺三角形を呈するもの1・3～6・13、柳葉形を呈するもの7に分けられる。1・13は比較的大型である。13は刃部のほぼ全周に刃毀れ状の微細剥離が観察される。何れの資料も程度の差はあれ欠損が観察される。

(2) 敲石　15・16

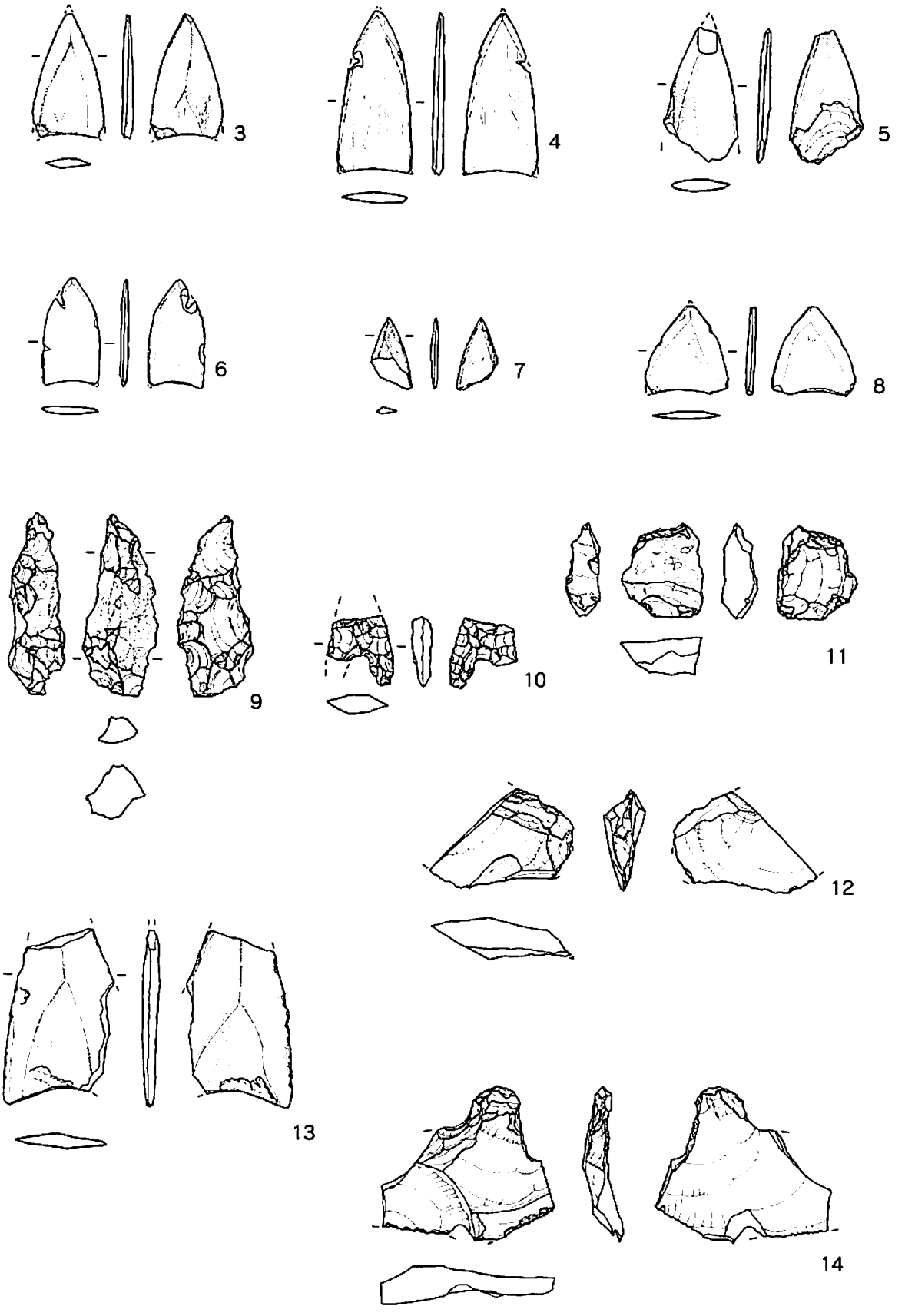
敲石、磨石と認められる資料は包含層から2点の出土である。15は安山岩の円礫を利用したもので敲打痕と見られるくぼみの集中とその裏面に研磨痕とおぼしき若干光沢を持った平坦面が観察される。16は同じく安山岩の円礫を利用したもので敲打痕と見られるくぼみは15ほどではないが一部に集中している。平坦面は２面である。これらに伴う台石、石皿は検出できなかった。

4　時期不明の石器

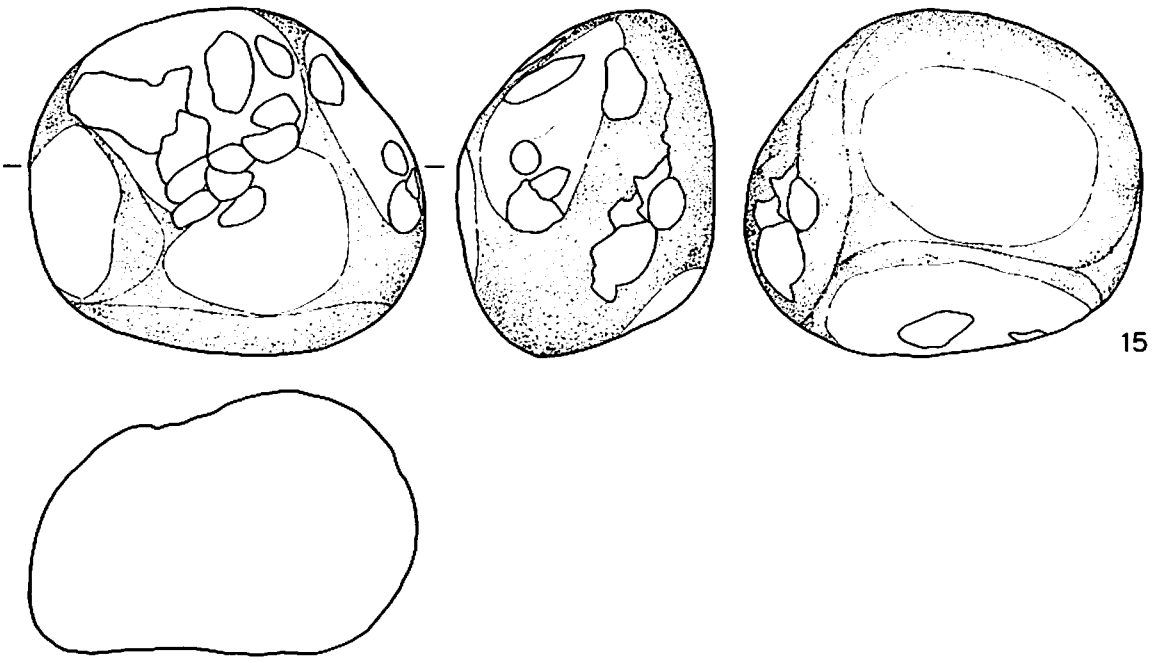
包含層から出土した石器の中で打製石鏃、スクレイパー、楔形石器、表採された磨製石斧の４点が資料個別の特徴から時期を特定することが困難であったため時期不明の石器として取り上げた。

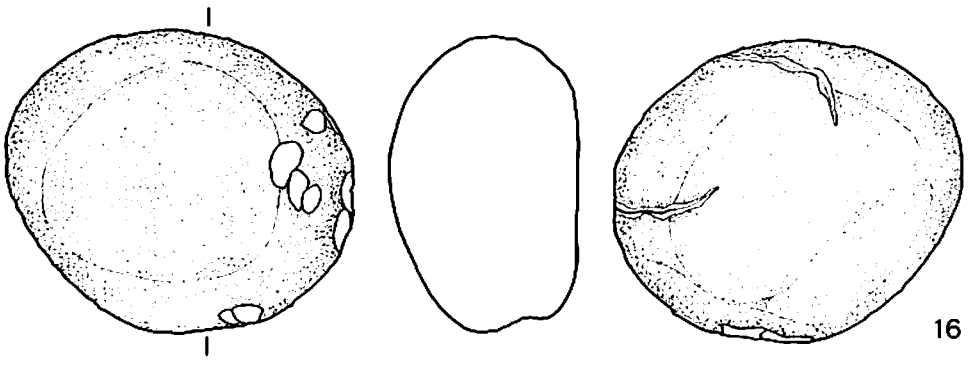
（1）　打製石鏃　10

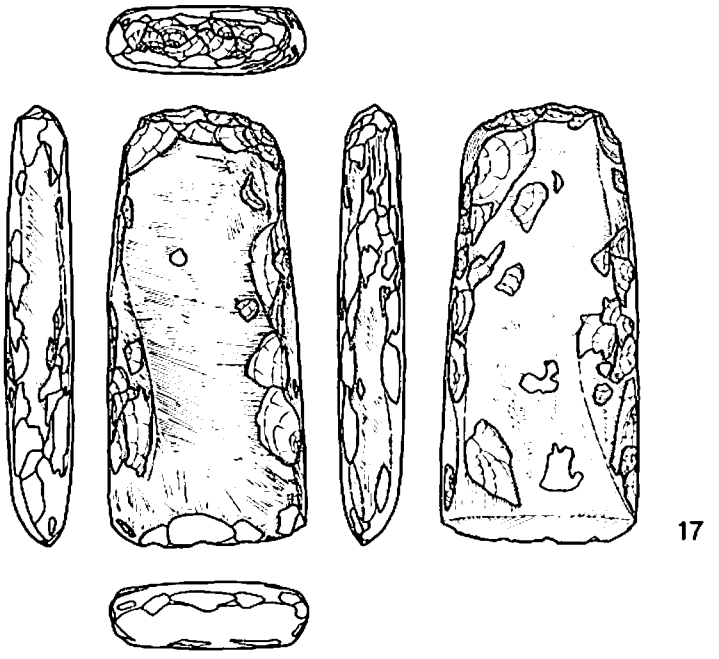
凹基無茎式で平面形は三角形を呈すると考えられる。先端と左側基部を欠損する。使用石材はサヌカイト質



第 48 図　石器実測図（1）(2/3)







第 49 図　石器実測図（2）(1/2)

安山岩である。

(2) スクレイパー 12

左半分を欠損するため全体的な形状は不明であるが横長剥片を素材とすることから楕円形に近いと考えられる。打面側に刃部調整が集中しており端部に明確な使用痕は確認されない。

(3) 楔形石器 11

幅広剥片を素材として上下両側に剥離があり、特に上部は階段状剥離が顕著である。側面に両極剥離が観察される。

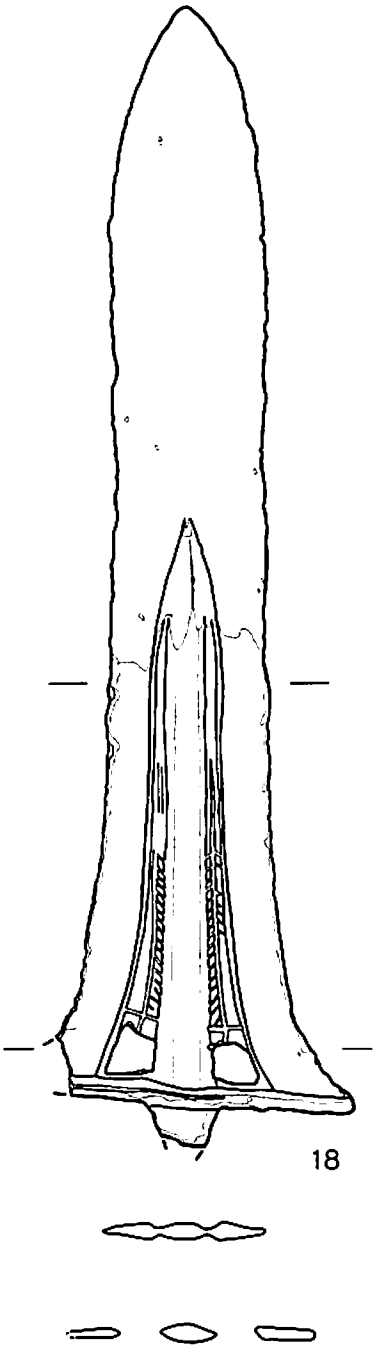
(4) 磨製石斧 17 (参考資料)

遺跡周辺から磨製石斧が表採された。平面形がバチ形を呈する片刃の石斧で側面、平面の一部に剥離面、敲打痕を残すものの全体的に丁寧な研磨が施される。基部の剥離面は研磨面を切っており柄への装着に関連した使用痕と考えられる。刃部は耕作によってか新しい剥離面が見られる。使用石材は蛇紋岩である。

(5) 銅戈 18 (参考資料)

市原天満宮所蔵 「大正1 (1912) 年頃、神殿修繕ための御遷宮の際、御神体とともに祭祀されていたものである。天保年間に火を受けている。」(たたかいと祈りと 八代市立博物館未来の森ミュージアム 1993)

中細形であるが援の上半は部分的に摩滅しており、これは後世に研磨された痕跡であろう。原型を留めていない。樋は綾杉文であり、穿は不定形で内の先端は欠損しているのであろう。



第50図 銅戈実測図 (1/2)

第3表　土器観察表（1）

※法量の()内の数値は復元値および残存高を示す
※色調の()内の数値は内壁面の色調を示す

挿図番号	遺物番号	遺構・エリア	器種	部位	法量（cm） 口径	最大径	底径	器高	脚部径	脚部高	調整・文様 外面	内面	脚文 口縁	胴部	脚部	外面	丹彩	色調 外面	内面	脚部内面	胎土	焼成	備考
第6図	1	SH01	小型壺	完形	8.7	13.4	5.0	17.1			ミガキ	ナデ?					○	にぶい黄橙 7/3 10YR (赤褐色4/6 2.5YR)	にぶい黄橙7/3 10YR (赤褐4/6 2.5YR)		0.2~0.5mmの砂粒を含む (角閃石、石英、赤褐色粒)	良	底部穿孔
第6図	2	SH01	壺	口縁部~胴部	(13.3)			(4.1)			ハケ、ヨコナデ	ヨコナデ						浅黄橙 8/3 10YR	浅黄橙8/3 10YR		2mm以下の砂粒を含む (角閃石、石英、長石)	良	
第8図	3	SH03	甕	完形	(13.1)			3.5			ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ、爪痕				○	○	にぶい黄橙 7/2 10YR (赤褐4/8 2.5R)	褐灰 5/1 10YR		1mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石)	良	2孔1対の穿孔 2対有り
第10図	4	SH04	筒形器台	脚部				(11.3)			ハケ	ナデ					○	にぶい橙 7/4 7.5YR (赤褐4/6 2.5YR)	にぶい橙7/4 7.5YR		2mm以下の砂粒を含む (長石、石英、角閃石、赤褐色粒)	良好	
第10図	5	SH04	壺	胴部				(7.0)			ヨコナデ、突帯	ナデ						にぶい黄橙7/4 10YR	にぶい橙7/4 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石、石英、赤褐色粒)	良好	外面に丹がはねたような点有り
第10図	6	SH04	器台	脚部~裾部				(6.1)	(41.0)		ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ		○		○	○	にぶい橙7/4 7.5YR (にぶい赤褐5/4 2.5YR)	にぶい橙7/4 7.5YR		2mm以下の砂粒を含む (角閃石、石英、長石)	良好	
第12図	7	ST05	筒形器台	胴部~脚部				(13.4)			ハケ、ヨコナデ	ナデ、爪痕					○	にぶい黄橙7/4 10YR (橙4/8 10R)	にぶい橙7/4 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石、赤褐色粒)	良好	
第14図	8-1	SX01	壺	口縁~胴部	31.8	27.4		(21.0)			ヨコナデ、ミガキ、M字突帯	ナデ					○	にぶい橙7/4 7.5YR (橙4/6 10R)	にぶい橙7/4 7.5YR		2mm以下の砂粒をやや多く含む (角閃石、石英、長石、赤褐色粒)	良好	
第14図	8-2	SX01	壺	底部			(6.0)	(6.7)				ナデ					○	にぶい橙7/4 7.5YR (赤褐4/6 2.5YR)	橙7/6 7.5YR		2mm以下の砂粒をやや多く含む (角閃石、石英、長石、赤褐色粒)	良好	
第15図	9	SX02	小型壺	胴部~底部		(10.0)	5.3	8.9			ミガキ	ナデ					○	にぶい黄橙7/3 10YR (橙4/6 10R)	にぶい黄橙7/3 10YR		2mm以下の砂粒を含む (石英、角閃石、長石)	良好	二次焼成の可能性有り
第15図	10	SX02	高坏	ほぼ完形	26.5			25.6	17.2	19.1	ナデ、ミガキ、ヘラケズリ	ナデ、ミガキ	○				○	にぶい橙6/4 7.5YR (明赤褐5/8 2.5YR)	橙6/6 7.5YR (明赤褐5/8 2.5YR)	橙7/6 7.5YR	1mm以下の砂粒をわずかに含む (角閃石、石英、長石)	良	脚部内面ハケ 焼成不足か?
第17図	11	SX03	壺	口縁部~底部	34.2	30.5	7.0	33.7			ヨコナデ、ミガキ、M字突帯	ヨコナデ、ナデ、指圧痕	○				○	浅黄橙8/3-8/4 10YR、にぶい黄橙7/2 10YR (5/6・4/8 10R)	浅黄橙8/3・8/4 10YR		0.2~0.8mmの砂粒を含む (角閃石)	良	胴部下位に穿孔有り (2孔)
第17図	12	SX03	高坏	ほぼ完形	24.9			23.9	18.0	17.1	ヨコナデ、ナデ、ミガキ	ナデ、ミガキ					○	浅黄橙8/4 7.5YR、8/4 10YR (5/8 10R、明赤褐5/8 2.5YR)	浅黄橙8/4 7.5YR・8/4 10YR (5/8 10R、明赤褐5/8 2.5YR)	浅黄橙8/4 10YR	0.2~1.5mmの砂粒を含む (角閃石)	不良	口縁・脚一部反転復元
第17図	13	SX03	壺	完形	(11.7)	22.7	7.6	27.6			ヨコナデ、ミガキ、突帯	ナデ					○	にぶい黄橙7/3 10YR (赤褐4/8 2.5YR)	にぶい黄橙7/3 10YR		0.2~1mmの砂粒を含む (角閃石、石英、長石、赤褐色粒)	良	口縁一部反転復元
第18図	14	SX03	壺	ほぼ完形	30.0	25.8	6.5	27.2			ヨコナデ、M字突帯	ヨコナデ、ナデ	○	○			○	浅黄橙8/3・8/4 10YR (5/4・4/6 10R)	浅黄橙8/3・8/4 10YR		0.2~2mmの砂粒、小石粒を含む (角閃石、石英)	良	胴部下位に穿孔有り 穿孔底一部反転復元
第20図	15	SX04	壺	ほぼ完形	(36.0)	31.1	(7.3)	32.2			ヨコナデ、ミガキ、M字突帯	ナデ、ヨコナデ	○	○			○	にぶい黄橙7/3・7/4 10YR (5/8・4/8 10R)	橙7/6 2.5YR・7/6 5YR		0.2~1mmの砂粒を含む (石英、角閃石)	良	底部穿孔か? 口縁・脚一部反転復元
第21図	16	SX05	高坏	坏部	(27.0)			(6.5)			強いヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ	○				○	にぶい黄橙7/3 10YR (赤褐4/6 2.5YR)	浅黄橙8/3 10YR (赤褐4/6 2.5YR)		2mm以下の砂粒を含む (石英、長石)	良好	
第21図	17	SX05	高坏	ほぼ完形	38.4			31.5	20.9	20.2	ミガキ、ヨコナデ	ヨコナデ、ミガキ					○	浅黄橙8/4 10YR (赤褐4/6 2.5YR)	浅黄橙8/4 10YR (8/4/6 10R)	橙7/6 7.5YR	1mm以下の砂粒を含む (角閃石、石英、赤褐色粒)	良好	脚部内面ナデ、ハケ、爪痕
第21図	18	SX05	壺	ほぼ完形	11.2	20.8	(7.7)	(28.0)			ミガキ	ナデ、指頭押圧					○	にぶい黄橙7/3 10YR (5/4/6 10R、にぶい赤褐4/3 2.5YR)	浅黄橙8/3 10YR 灰黄褐5/2 10YR		0.2~2mmの砂粒を含む (角閃石、石英)	良	胴・底一部反転復元
第22図	19	SX05	筒形器台		16.6			86.2	43.6	73.2	ミガキ、ヨコナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ、指圧痕	○				○	橙	にぶい橙		1mm以下の砂粒を含む ()	良	脚部内面ナデ、ハケ、爪痕
第23図	20	SX05	壺	ほぼ完形	30.9	27.65	6.5	31.6			ヨコナデ、ミガキ、M字突帯	ナデ、ヨコナデ、指圧痕	○	○			○	浅黄橙8/4 10YR (5/8・4/8 10R)	浅黄橙8/4 10YR 浅黄橙8/3 7.5YR		0.2~0.8mmの砂粒をわずかに含む (角閃石)	良	胴一部反転復元
第23図	21	SX05	高坏	ほぼ完形	(30.7)			(33.2)	(19.6)	25.1	ヨコナデ、ミガキ	ナデ、ハケ、ミガキ					○	浅黄橙8/4 10YR (5/4/6 10R)	浅黄橙8/3 10YR (5/4/6 10R)	にぶい黄橙7/4 10YR	1mm以下の砂粒を少量含む (角閃石、長石)	良好	脚一部反転復元
第23図	22	SX05	壺	胴部~底部		28.7	5.6	19.4			ヨコナデ、ハケ、刻目突帯	ナデ、指圧痕						にぶい黄橙7/3 10YR	にぶい黄橙7/4 10YR		2mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石、石英、赤褐色粒)	良好	
第27図	23	第2トレンチ	壺	口縁部~底部	(16.6)	27.0	(7.5)	28.2			ヨコナデ、ハケ、刻目突帯	ナデ						浅黄橙8/3・8/4 10YR	灰白7/1 10YR、黄灰4/1 2.5Y		0.2~2mmの砂粒、小石粒を含む (石英・角閃石)	良	底一部反転復元
第27図	24	第2トレンチ	壺	口縁部~胴部				(10.7)			ヨコナデ、M字突帯	ヨコナデ					○	にぶい黄橙7/4 10YR (にぶい赤褐4/4 2.5YR)	浅黄橙8/4 10YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石、赤褐色粒)	良好	
第27図	25	第2トレンチ	高坏	ほぼ完形	21.3			20.75	13.9	14.0	ハケ、ミガキ	ミガキ					○	にぶい橙7/4 7.5YR (赤褐4/8 2.5YR)	にぶい橙7/3・7/4 7.5YR (赤褐4/8 2.5YR)	にぶい橙6/4 7.5YR	2mm以下の砂粒を含む (角閃石、石英、長石)	良好	脚部内面ハケ目
第27図	26	第2トレンチ	壺	口縁部~胴部				(12.9)			ミガキ、M字突帯	ナデ	○				○	浅黄橙8/3 10YR (赤褐4/8 2.5YR)	浅黄橙8/3 10YR		0.5mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	
第27図	27	第2トレンチ	壺	胴部~底部			6.0	(5.8)				ナデ、指圧痕		○			○	にぶい黄橙7/3 10YR (赤褐4/8 2.5YR)	にぶい黄橙7/3 10YR		2mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石、石英)	良好	底部穿孔 胴一部反転復元
第27図	28	第2トレンチ	壺	脚部				(5.9)			ハケ	ナデ						にぶい黄橙7/3 10YR	黄灰6/1 2.5Y	浅黄橙8/4 10YR にぶい橙7/4 7.5YR	3mm以下の砂粒をやややく含む (長石、角閃石、赤褐色粒)	良好	脚部内面指頭押圧
第27図	29	第2トレンチ	高坏	脚部~裾部				(4.7)	(20.6)	(4.7)	ミガキ、ヨコナデ				○		○	にぶい黄橙7/3 10YR (赤褐4/8 5YR)		にぶい橙7/3 10YR	1mm以下の砂粒を含む (角閃石、長石、赤褐色粒)	良好	脚部内面ハケ、ナデ
第29図	30	エリア1	壺	ほぼ完形	8.9	18.4	7.0	25.9			ミガキ	ヨコナデ、ナデ、指圧痕					○	浅黄橙8/4 10YR (5/8 10R、明赤褐5/6 2.5YR・5/6 5YR)	鼠褐3/1 7.5YR (5/6 10R、橙6/8 2.5YR)		0.5~2mmの砂粒を含む (長石)	良好	胴一部反転復元
第30図	31	エリア2	壺	口縁部~底部	(16.4)		(8.4)	(27.0)			ヨコナデ、ナデ、ハケ、刻目突帯	ナデ、指圧痕						にぶい黄橙7/4 10YR	にぶい黄橙7/4 10YR		1mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石)	良	外面一部スス付着 一部炭化付着

第4表　土器観察表（2）

※法量の()内の数値は復元径および残存高を示す
※色調欄()内の色調は丹塗面の色調を示す

挿図番号	遺物番号	遺構・エリア	器種	部位	法量(cm) 口径	最大胴径	底径	器高	脚部径	脚部高	調整・文様 外面	内面	施文 口縁	胴部	脚部	外面	丹塗	色調 外面	内面	脚部内面	胎土	焼成	備考
第30図	32	エリア2	甕	口縁部~胴部				(4.3)			ナデ、M字突帯	ナデ	○				○	浅黄橙8/3・8/4 10YR (赤4/8 10R)	浅黄橙8/3・8/4 10YR		0.5mm以下の砂粒を少量含む	良好	
第30図	33	エリア3	壺	口縁部~頸部	(10.8)			(3.1)			ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、ナデ					○	浅黄橙8/4 10YR (明赤褐5/6 2.5YR)	浅黄橙8/4 10YR (明赤褐5/6 2.5YR)		0.5mm以下の砂粒をわずかに含む	良好	
第31図	34	エリア4	注口部付小型壺	ほぼ完形	9.0	16.7		24.6	12.2	8.1	ヨコナデ、ミガキ	ナデ、指圧痕					○	浅黄橙8/3・8/4 10YR (明赤褐5/8 2.5YR)	浅黄橙8/3 10YR、黒褐3/1 10YR	浅黄橙8/3・8/4 10YR	0.2~2mmの砂粒を含む (角閃石)	良	脚部内面ナデ 口縁・胴部の一部反転復元
第31図	35	エリア4	高坏？	脚部~裾部				(8.4)	(35.6)	(8.4)	ヨコナデ	ヨコハケ、ナデ			○		○	浅黄橙8/3 10YR (赤褐4/8 2.5YR)		浅黄橙8/3 10YR	1mm以下の砂粒を含む (角閃石、長石)	良好	脚部内面ナデ、ハケ
第31図	36	エリア5	高坏	口縁部~脚部	(29.6)			(14.9)			ヨコナデ、ハケ、ミガキ	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	○				○	橙6/6 5YR (明赤褐5/8 2.5YR)	橙6/6 5YR (赤褐4/8 2.5YR)	橙6/6 5YR	2 以下の砂粒を多く含む (長石、角閃石、石英)	良	
第32図	37	エリア6	甕	胴部~底部			(5.4)	(5.3)			ミガキ、ナデ	ナデ、指圧痕					○	にぶい黄橙7/4 10YR (赤褐4/8 2.5YR)	褐灰1/5 10YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石、長石)	良好	
第32図	38	エリア7	壺	口縁部~胴部	21.6			(6.7)			ナデ、ヨコナデ、ハケ、突帯	ヨコナデ、ナデ						にぶい黄橙7/3 10YR	にぶい黄橙7/3 10YR		1mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石)	良好	
第33図	39	エリア8	蓋	ほぼ完形	12.2			3.2			ミガキ、ヨコナデ	ナデ、指圧痕、ヨコナデ				○	○	浅黄橙8/4 10YR (赤褐色4/8 2.5YR)	橙7/6 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石、長石、赤褐色粒)	良好	2孔1対の穿孔2対有り
第33図	40	エリア8	小型壺	ほぼ完形	(11.3)	12.8	5.4	12.4			ヨコナデ、ハケ、ミガキ	ヨコナデ、ナデ、指圧痕					○	灰白8/1 10YR、浅黄橙8/3 10YR (明赤褐5/6 2.5YR)	灰白8/1 10YR、浅黄橙8/3 10YR (明赤褐5/6 2.5YR)		0.2~1mmの砂粒を含む (角閃石)	良	口縁部に穿孔有り 口縁部の一部反転復元
第33図	41	エリア8	壺	口縁部~頸部	(12.7)			(4.6)			ヨコナデ、ナデ、M字突帯	ナデ	○				○	にぶい黄橙7/4 10YR (赤褐4/8 2.5YR)	にぶい黄橙7/4 10YR (赤褐4/8 2.5YR)		1mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石)	良好	
第33図	42	エリア8	高坏	脚部~裾部				(7.6)	(22.2)	(7.6)	ナデ、ヨコナデ	ナデ、ヨコナデ					○	にぶい黄橙7/2 10YR (赤褐4/8 2.5YR)		にぶい黄橙7/3 10YR	1mm以下の砂粒を含む (角閃石、長石)	良	脚部内面ナデ、ヨコナデ
第34図	43-1	エリア9	甕	口縁部~胴部	28.2	27.9		(24.3)			ヨコナデ、突帯	ヨコナデ、ハケ、ミガキ、ナデ	○	○			○	浅黄橙8/3・8/4 10YR (赤4/6 10R、明赤褐5/8 2.5YR)	浅黄橙8/3・8/4 10YR (赤4/6 10R、赤褐4/8 2.5YR)		0.2~2 の砂粒、小石粒を含む (角閃石、石英、長石)	良	
第34図	43-2	エリア9	甕	胴部~底部			(7.6)	(11.5)			ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ、ナデ		○			○	浅黄橙8/3・8/4 10YR (赤4/6 10R、明赤褐5/8 2.5YR)	浅黄橙8/3・8/4 10YR (赤4/6 10R、明赤褐5/8 2.5YR)		0.2~2mmの砂粒、小石粒を含む (角閃石、石英、長石)	良	胴部反転復元
第34図	44	エリア9	甕	口縁部				(1.4)			ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ	○				○	浅黄橙8/4 10YR (明赤褐5/6 2.5YR)	浅黄橙8/4 10YR		1mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石)	良好	
第34図	45-1	エリア9	甕	口縁部~胴部	32.7			(8.6)			ヨコナデ、ミガキ、M字突帯	ナデ					○	にぶい橙7/4 7.5YR (赤4/6 10R)	にぶい橙7/4 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石)	良好	
第34図	45-2	エリア9	甕	胴部		(36.0)		(17.4)			ミガキ、M字突帯	ナデ					○	にぶい橙7/4 7.5YR (赤4/6 10R)	にぶい橙7/4 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石)	良好	
第35図	46	エリア9	甕	口縁部	32.3			(3.2)			ナデ	ナデ	○				○	浅黄橙8/4 10YR (赤褐4/6 2.5YR)	にぶい黄橙7/3 10YR		1mm以下の砂粒を含む (長石)	良好	口縁部に刻目 口縁部上面・端面に刻文有り
第35図	47	エリア9	甕	完形	35.0		5.5	29.95			ヨコナデ、突帯	ヨコナデ		○			○	にぶい橙7/4 7.5YR (赤褐4/4 10R)	にぶい褐6/3 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む (角閃石、長石)	良	
第36図	48	エリア9	甕	口縁部~底部	35.65	31.6	7.0	33.1			ヨコナデ、ミガキ、M字突帯	ヨコナデ、ナデ、指圧痕		○			○	浅黄橙8/4 7.5YR (赤4/6・4/8 10R)	浅黄橙8/3 7.5YR・8/4 10YR		0.2~0.8mmの砂粒を少量含む (角閃石)	良	胴部下部に穿孔 内面わずかに赤彩痕跡
第36図	49	エリア9	壺	口縁部~底部	18.8	23.8	8.2	29.9			ハケ、ナデ、ヨコナデ	ヨコナデ、ハケ、ナデ						浅黄橙8/3 10YR、灰白8/2 10YR	浅黄橙8/3 10YR にぶい黄橙7/3 10YR		0.2~2mmの砂粒、小石粒を含む (石英・角閃石)	良	口縁部に刻目（2列） 底部黒斑有り 胴部反転復元
第36図	50	エリア9	壺	口縁部~底部	20.2	25.4	7.0	32.5			ヨコナデ、ハケ	ハケ、ナデ、指圧痕						浅黄橙8/3 10YR	浅黄橙8/4 10YR にぶい黄橙7/4 10YR		0.2~2mmの砂粒を含む (石英・角閃石)	良	
第36図	51	エリア9	壺	口縁部~胴部	11.0	(21.3)		(21.8)			ナデ、ヨコナデ、突帯	ナデ					○	にぶい黄橙7/3 10YR (赤褐4/6 2.5YR)	黄灰5/1 2.5Y		1mm以下の砂粒を含む (角閃石)	良	胴部反転復元
第36図	52	エリア9	壺	口縁部				3.0			沈線、ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ					○	にぶい黄橙7/3 10YR (明赤褐5/6 5YR)	にぶい黄橙7/3 10YR (明赤褐5/6 5YR)		0.5mm以下の砂粒を含む (角閃石)	良好	
第37図	53	エリア9	壺	口縁部~底部	7.6	16.5	5.9	19.8			ミガキ、ナデ、ハケ	ヨコナデ、ナデ、ハケ		○			○	浅黄橙8/3 10YR (赤褐4/6 2.5YR)	にぶい黄橙6/3 10YR、浅黄7/4 2.5Y、灰黄6/2 2.5Y		1mm以下の砂粒を含む (角閃石、石英、長石)	良	
第37図	54	エリア9	小型壺	口縁部~底部	15.8	20.95	7.8	20.2			ヨコナデ、ハケ、ナデ	ヨコナデ、ハケ、ナデ、指圧痕	○	○				浅黄橙8/3 10YR (明赤褐5/6 2.5YR)	浅黄橙8/3 10YR (明赤褐5/6 2.5YR)		微細~2mmの砂粒を含む (角閃石、赤褐色粒、石英)	良	口縁部に2孔1対の穿孔2対
第37図	55	エリア9	壺	口縁部~底部	(17.6)	27.9	7.7	29.7			ヨコナデ、ナデ、M字突帯	ヨコナデ、ナデ						浅黄橙8/3 10YR (赤4/6 10YR)	浅黄橙8/3 10YR、褐灰4/1 10YR		0.2~1mmの砂粒を含む (角閃石、石英)	良	一部丹付着 口縁部反転復元
第37図	56	エリア9	注口部付小型壺	口縁部~脚部	(9.9)	14.4		23.1	11.4	8.9	ハケ、ヨコナデ、ミガキ、突帯	ヨコナデ、ナデ、工具ナデ					○	浅黄橙8/3 10YR (赤5/6・5/8 10R)	浅黄橙8/3 10YR	にぶい黄橙7/3・7/4 10YR	0.2~1mmの砂粒を含む (角閃石)	良	胴部穿孔（2孔） 口縁・胴部一部反転復元
第38図	57	エリア9	高坏	口縁部~脚部	28.2			23.0	19.0	14.3	ヨコナデ、ミガキ	ハケ、ナデ、指圧痕	○		○?		○	浅黄橙8/3 7.5YR (暗赤3/6 10R)	浅黄橙8/4 7.5YR (暗赤3/6 10R)	灰白8/2 10YR (暗赤褐3/6 10YR)	1mm以下の砂粒を含む (長石、角閃石)	良好	脚部内面指頭押圧、ハケ
第38図	58	エリア9	高坏	口縁部~脚部	27.0			(25.6)		(20.6)	ナデ、ミガキ、突帯、沈線	ナデ	○				○	橙7/6 7.5YR (明赤褐5/6 2.5YR)	にぶい橙7/4 7.5YR (明赤褐5/8 2.5YR)	灰黄6/2 2.5Y	1mm程度の砂粒を含む (長石、赤褐色粒)	良	
第39図	59	エリア9	高坏	口縁部~坏部	(43.0)			13.4			ナデ、ヨコナデ、M字突帯	ヨコナデ、ミガキ、ナデ	○				○	にぶい黄橙7/3・7/4 10YR (赤褐4/8 2.5YR)	にぶい黄橙7/3・7/4 10YR (赤褐4/6 2.5YR)		1mm程度の砂粒を含む (角閃石、石英)	良好	
第39図	60	エリア9	高坏	口縁部~坏部				(6.8)			ヨコナデ	ミガキ	○				○	橙6/6 5YR (赤4/8 10R)	橙7/6 7.5YR (赤褐4/4 10R)		1mm以下の砂粒を含む (長石、石英)	良	
第39図	61	エリア9	高坏	脚部~裾部				(8.6)	21.6		ヨコナデ、M字突帯、沈線	ハケ、ヨコナデ、指圧痕			○		○	にぶい黄橙7/4 10YR (赤4/8 10R)		にぶい黄橙7/4 10YR	1mm以下の砂粒を含む (角閃石、石英)	良	脚部内面指頭押圧、ハケ、ヨコナデ
第40図	62	エリア9	鉢	完形	25.3		7.4	16.3			ヨコナデ、ハケ、ナデ	ナデ、指圧痕						にぶい黄橙7/2 10YR、浅黄橙8/3 10YR	浅黄橙8/3・8/4 10YR		0.2~2mmの砂粒、小石粒を含む (角閃石、石英)	良	外面黒斑 胴部一部反転復元

第5表　土器観察表（3）

※法量の()内の数値は復元値および残存高を示す
※色調の()内の色調は丹塗面の色調を示す

挿図番号	遺物番号	遺構・エリア	器種	部位	法量（cm）						調整・文様		暗文				丹塗	色調			胎土	焼成	備考
					口径	最大胴径	底径	器高	脚部径	脚部高	外面	内面	口縁	胴部	脚部	外面		外面	内面	脚部内面			
第40図	63	エリア9	鉢	口縁部～胴部	(17.2)			(4.5)			ナデ	ヨコナデ						浅黄橙8/3 10YR	浅黄8/3 2.5Y		2mm以下の砂粒を含む（長石、石英、角閃石）	良	
第40図	64	エリア9	鉢	口縁部～胴部	(14.8)			(6.0)			ナデ、ハケ	ナデ						にぶい黄橙7/4 10YR	にぶい黄橙7/4 10YR		1mm以下の砂粒を含む（角閃石、長石、石英）	良	
第40図	65	エリア9	甕	脚部				(5.4)	10.4	2.9	ヨコナデ、ナデ	ナデ、指圧痕						浅黄橙8/3 10YR	にぶい黄橙7/3 10YR	浅黄橙8/4 10YR	2mm程度の砂粒を多く含む（長石、角閃石）	良好	脚部内面ヨコナデ 砂付着 一部反転復元
第40図	66	エリア9	甕	脚部				(5.3)	8.2	2.1	ナデ、ヨコナデ	指圧痕						橙6/6 5YR	にぶい黄橙7/3 10YR	にぶい黄橙7/4 10YR	2mm程度の砂粒をやや多く含む（長石、石英、角閃石）	良好	脚部内面ヨコナデ 一部反転復元
第40図	67	エリア9	ミニチュア	底部			(2.2)	(1.3)			ナデ	ナデ						にぶい黄6/3 2.5Y	にぶい黄橙7/4 10YR		1mm程度の砂粒をやや多く含む（長石）	普	ミニチュア土器
第41図	68	エリア10	甕	口縁部～胴部	(29.6)			(3.5)			ヨコナデ、ハケ、突帯	ナデ、ハケ	○	○?			○	橙7/6 7.5YR（赤褐4/6 2.5YR）	橙7/6 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む（角閃石、長石、石英）	良好	
第41図	69	エリア10	高坏	口縁部～脚部	28.4			(21.8)		(12.8)	ナデ、ミガキ、M字突帯	ミガキ、ナデ					○	にぶい黄橙7/3・7/4 10YR（赤5/6 10R）	にぶい黄橙7/3・7/4 10YR（赤5/6 10R）	明褐灰7/2 7.5YR	1mm以下の砂粒を含む（角閃石、石英）	良好	脚部外面赤(赤4/6 10R) 口～脚の一部反転復元
第41図	70	エリア10	甕	口縁部～胴部	(32.5)			(5.4)			ヨコナデ、ミガキ、M字突帯	ヨコナデ	○				○	にぶい黄橙7/3 10YR（明赤褐5/8 2.5YR）	にぶい黄橙7/3 10YR		1mm以下の砂粒を含む（角閃石、石英）	良好	
第41図	71	エリア10	筒型器台	口縁部	(14.4)			(9.7)			ヨコナデ、ナデ	ナデ、ハケ	○				○	にぶい黄橙7/3・7/4 10YR（赤褐4/8 2.5YR）	にぶい黄橙7/2 10YR		1mm以下の砂粒を含む（角閃石、長石）	良好	外面丹塗ほとんど剥げる
第41図	72	エリア10	壺	口縁部	(15.7)			(3.3)			ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ					○	橙7/6 7.5YR（赤褐4/8 2.5YR）	橙6/6 5YR（赤褐4/8 2.5YR）		0.5mm以下の砂粒を含む（石英）	良好	
第41図	73	エリア10	壺	口縁部	(8.5)			(1.6)			ヨコナデ、ミガキ	ヨコナデ					○	にぶい黄橙7/4 10YR（赤褐4/6 2.5YR）	にぶい黄橙7/4 10YR				
第41図	74	エリア10	高坏	脚部～裾部				(2.0)	(15.8)	(2.0)	ナデ						○	橙7/6 7.5YR（明赤褐5/6 2.5YR）		橙7/6 7.5YR（明赤褐5/6 2.5YR）	1mm以下の砂粒を含む（石英、角閃石）	良好	脚部内面ハケ、丹塗
第41図	75	エリア10	高坏	脚部～裾部				(4.3)	(17.7)	(4.3)	ナデ、ヨコナデ						○	にぶい橙6/4 7.5YR（明赤褐5/6 2.5YR）		にぶい橙6/4 7.5YR	1mm以下の砂粒を含む（長石、石英）	良好	脚部内面ハケ
第42図	76	エリア10	甕?	口縁部～胴部	26.0			(17.0)			ヨコナデ	ハケ						灰白8/2 10YR	灰白8/2 10YR		0.2～1.5mmの砂粒を含む（角閃石）	良	口縁部に把手
第43図	77	エリア11	壺	口縁部～胴部	(15.5)	(25.6)		(32.5)			ヨコナデ、ハケ、ナデ	ナデ、ハケ						浅黄橙8/3 10YR	浅黄橙8/3 10YR にぶい黄橙7/2 10YR		0.2～1mmの砂粒を含む（角閃石、長石、赤褐色粒）	良	口縁部に刻目
第44図	78-1	エリア12	甕	口縁部～胴部	(34.8)			(9.3)			ヨコナデ、M字突帯	ナデ	○	○			○	にぶい黄橙7/3 10YR（赤褐4/6 2.5YR）	にぶい黄橙7/3 10YR		1～2mm以下の砂粒を含む（角閃石、長石、石英）	良好	口縁部に刻目 内面にもうすく丹塗（赤4/8 2.5YR）
第44図	78-2	エリア12	甕	胴部～底部			6.8	(23.0)			ヨコナデ、ハケ、M字突帯	ナデ、ハケ		○			○	にぶい黄橙7/3 10YR（赤褐4/6 2.5YR）	にぶい黄橙7/3 10YR		1～2mm以下の砂粒を含む（角閃石、長石、石英）	良好	胴部下位に穿孔あり
第44図	79	エリア13	甕	胴部～底部			(5.3)	(23.2)			ミガキ、ナデ、刻目突帯	ナデ					○	にぶい黄橙7/3 10YR（赤褐4/6 2.5YR）	にぶい黄橙7/3 10YR		0.5mm程度の砂粒を含む（長石、石英、角閃石）	良好	
第45図	80	エリア14	甕	口縁部～底部	(34.2)	31.1	7.3	33.5			ヨコナデ、ナデ、ミガキ、M字突帯	ヨコナデ、ナデ	○				○	浅黄橙8/3・8/4 10YR（赤4/8・4/8 10R）	浅黄橙8/3・8/4 10YR		0.2～1.5mmの砂粒、小石粒を含む（角閃石、赤褐色粒）	良	口縁と胴部一部反転復元
第45図	81	エリア14	壺	口縁部～底部	(19.0)	27.3	8.1	32.9			ヨコナデ、ハケ、ミガキ、ナデ、刻目突帯	ハケ、ナデ						浅黄橙8/3・8/4 10YR	浅黄橙8/3・8/4 10YR にぶい黄橙7/3 10YR		0.2～1mmの砂粒を含む（角閃石、石英）	良	口縁部に刻目 口縁と胴部一部反転復元
第46図	82	エリア15	長頸壺	口縁部～胴部	(13.6)	(19.6)		(15.8)			ナデ、ミガキ、沈線	ミガキ、指圧痕、ヘラケズリ、ナデ					○	にぶい黄橙7/3 10YR（赤4/6 10R）	にぶい黄橙7/3 10YR		0.5mm程度の砂粒をわずかに含む	良好	
第46図	83		壺	胴部～底部			6.2	(5.9)			ミガキ	ナデ、指圧痕、爪痕					○	にぶい黄橙7/2 10YR（赤褐4/8 2.5YR）	にぶい黄橙7/2 10YR		0.5mm程度の砂粒をわずかに含む（角閃石）	良好	
第46図	84		長頸壺	口縁部				(4.8)			ミガキ	ヨコナデ					○	にぶい黄橙7/3 10YR（明赤褐5/6 7.5YR）	にぶい黄橙7/3 10YR		0.5mm程度の砂粒を含む（石英、角閃石）	良好	丹塗丹塗?
第46図	85		器台?高坏?	裾部				(2.6)			ナデ、ヨコナデ						○	褐灰6/1 10YR（にぶい赤褐5/4 5YR）		にぶい黄橙7/3 10YR（明赤褐5/6 5YR）	1mm以下の砂粒を含む（長石、角閃石、石英）	良好	脚部内面ヨコナデ、丹塗れ 風化激しく丹塗剥落
第46図	86		器台?	口縁部	(6.0)			(5.4)			ナデ	ヨコナデ	○				○	にぶい黄橙7/2 10YR（明赤褐5/8 5YR）	黄灰6/1 2.5Y		1mm以下の砂粒を含む（角閃石、赤褐色粒）	良好	
第46図	87		甕	脚部				(6.6)	(6.1)	(6.6)	ハケ、ナデ	ナデ、指圧痕						にぶい黄橙7/2 10YR	にぶい黄橙7/3 10YR		1～3mmの砂粒をやや多く含む（石英、長石）	良好	底部一部にスス付着
第47図	88		壺	頸部～胴部				(7.7)			ヨコナデ、ナデ	ナデ						にぶい黄橙7/3 10YR	にぶい黄橙7/3 10YR		1mm以下の砂粒を含む（長石、石英、角閃石）	良	
第47図	89		火鉢	口縁部				(3.5)			ナデ、突帯、スタンプ文(花弁状)	ナデ						浅黄7/3 2.5Y	灰黄6/2 2.5Y		0.5mm以下の砂粒を少量含む	良	良品大鉢?
第47図	90		(深鉢)	口縁部				(3.6)			ナデ、刻目突帯、ハケ	ナデ、ハケ						黒褐3/1 10YR	黒褐3/2 10YR		1mm以下の砂粒を含む（長石、角閃石）	良	
第47図	91		深鉢	胴部				(2.6)			縦沈線（綾杉状）	ナデ						褐4/3 7.5YR	褐4/3 7.5YR		1mm以下の砂粒を含む（石英、角閃石）	良好	
第47図	92		(深鉢)	胴部				(3.3)			ナデ、縦沈線	ナデ						黒褐3/1 2.5Y	褐4/4 7.5YR		0.5mm以下の砂粒を少量含む（石英、角閃石）	良	瓦質

第6表　土器観察表（4）

※法量の()内の数値は復元径および残存高を示す
※色調欄()内の色調は内面の色調を示す

挿図番号	遺物番号	遺構・エリア	器種	部位	法量（cm）						調整・文様		胎土					色調			胎土	焼成	備考
					口径	最大胴径	底径	器高	頸部径	頸部高	外面	内面	口縁	胴部	頸部	外面		外面	内面	頸部内面			
第47図	93	エリア17	壺	頸部				(4.6)	(7.2)		ハケ、ナデ	ナデ						明赤褐5/6 2.5YR	にぶい黄橙7/3 10YR	橙7/8 5YR	1～2mm程度の砂粒を多く含む（長石、石英）	良	頸部内面ヨコナデ
第47図	94	エリア17	深鉢	口縁部				(4.9)			ミガキ、櫛消縄文、沈線	ミガキ						黒褐3/2 10YR	にぶい黄橙5/4 10YR		1mm程度の砂粒を含む（長石、角閃石、石英）	良	
第47図	95	エリア17	壺	口縁部				(3.2)			ミガキ、櫛消縄文	ミガキ						黒褐3/2 10YR	にぶい黄橙6/4 10YR		1mm以下の砂粒を含む（赤褐色粒）	良好	

第7表　石器・他観察表

挿図番号	遺物番号	グリッド・遺構名	層位	器種	法量（cm）（g）				石材	備考
					長さ	幅	厚さ	重さ		
第9図	1	SH−02	Ⅲ	磨製石鏃	3.4	3.4	0.35	3.5	粘板岩	石版丁を転用
第9図	2	SH−02	Ⅲ	砥石	8.65	8.65	1.15	23.7	粘板岩	全面に擦痕・研痕　目平片刃石斧の転用か
第48図	3	SX−09・10	Ⅲ	磨製石鏃	(3.25)	(3.25)	0.3	1.9	頁岩	尖端部・基部両側欠損
第48図	4		Ⅲ	磨製石鏃	(4.3)	(4.3)	0.3	2.6	粘板岩	尖端部・基部両側欠損
第48図	5		Ⅲ	磨製石鏃	(3.5)	(3.5)	0.3	2.2	結晶片岩	尖端部・基部欠損
第48図	6		Ⅲ	磨製石鏃	2.85	2.85	0.2	1.2	緑泥凝灰岩	尖端部近くを欠損
第48図	7		Ⅲ	磨製石鏃	(1.9)	(1.9)	0.2	0.3	緑泥凝灰岩	
第48図	8	D−5		磨製石鏃	(2.35)	(2.35)	(0.22)	1.4	凝灰岩	
第48図	9		Ⅱ	三角尖頭器	4.75	4.75	1.45	10.2	黒曜石	小国産
第48図	10		Ⅱ	打製石鏃	(1.85)	(1.85)	0.55	1.4	サヌカイト質安山岩	尖端部・左側基部欠損　凹基無茎式
第48図	11	A−3	Ⅱ	楔形石器	2.5	2.5	0.95	3.8	黒曜石	西北九州産
第48図	12		Ⅲ	スクレイパー	(2.7)	(2.7)	1.1	6.4	サヌカイト質安山岩	左半分欠損
第48図	13	D−4メッシュj		磨製石鏃	(4.65)	(4.65)	0.45	6.6	チャート	尖端部・右側基部欠損　刃部全体に使用痕
第48図	14	SH−02		石匙	4.1	4.1	1.15	11.9	サヌカイト質安山岩	左側欠損　刃部調整なし
第49図	15		Ⅲ	磨石・敲石	9.4	9.4	7.1	1050.0	安山岩	受熱有り
第49図	16	B−4	Ⅱ	磨石・敲石	8.2	8.2	5.2	475.0	安山岩	
第49図	17	調査区外		磨製石斧	11.95	11.95	1.8	198.1	蛇紋岩	刃部は片刃

＊（ ）で表した数値は、残存値である。

銅戈観察表

挿図番号	遺物番号	器種	法量（cm）						形式	備考
			全長	身部長	刃部最大幅	A−A' 厚さ	基部最大幅	茎部長		
第50図	18	銅戈	(28.6)	27.8	3.9	0.5	(7.3)	(1.15)	中広形	鋸歯文

＊（ ）で表した数値は、残存値である。

第Ⅵ章　科学分析

1.リン・カルシウム含量分析

（古環境研究所）

1.はじめに

土壌中に含まれるリンやカルシウムの起源としては、土壌の母材、動物遺体、植物遺体などがある。また、遺跡の生活面や遺構内には遺体、排泄物、代謝物、食物残渣、燃料灰などに由来するリンやカルシウムが蓄積している。カルシウムには一般に水に溶解しやすいが、リンは土壌中の鉄やアルミニウムと強く結合して難溶性の化合物となるため、土壌中における保存性が高い。このようなリンやカルシウムの性質を利用して、墓状遺構などにおける生物遺体（人骨など）の確認、および生活面や遺構面の確認などが試みられている。

2.試　料

分析試料は、地蔵原のSX－01とその周辺から採取された計4点の土壌である。試料の詳細を第1図に示す。

3.分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子（株）製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理は次のとおりである。

1）試料を絶乾（105℃・24時間）
2）メノウ製乳鉢を用いて試料を粉砕
3）試料を塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/-でプレスして錠剤試料を作成
4）測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

4.分析結果

各元素の定量分析結果（Wt%）を第1表に示し、リン酸（P_2O_5）とカルシウム（CaO）の含量を第1図に示す。

5.考　察

一般に、未耕地の土壌中におけるリン酸含量は0.1～0.5%程度、耕地土壌でリン酸肥料が投入された場合は0.1%程度である。農耕地では施肥による影響が大きく、目的とする試料の分析結果のみから遺構・遺物内における生物遺体の存在を確認するのは困難である。このため、比較試料（遺物・遺構外の試料）との対比を行う必要がある。

SX－01の8埋土内上層におけるリン酸含量は1.23%、埋土内下層では1.24%と比較的高い値であり、比較試料として採取されたＳＸ－01近くの地山の1.23%とほぼ同様である。また、壷1におけるリン酸含量は0.96%であり、地山よりも低い値となっている。各試料におけるカルシウム含量は0.40～0.91%であり、地山の1.07%よりも低い値となっている。

これらの結果から、遺構や遺物の内部にリン酸を含む何らかの生物遺体が存在していた可能性は示唆されるものの、比較試料との差異が明確ではないことから、後代の農耕に伴う施肥などの影響も否定できない。なお、今回の測定データは、本遺跡周辺で土壙墓などの判定を行う際の基礎資料として重要と考えられる。

文献

竹迫　紘（1993）リン分析法．日本第四紀学会編．四紀試料分析法2，研究対象別分析法．東京大学出版会，p38-45.

2.赤色顔料の蛍光X線分析

1.試　料

試料は、赤色顔料が付着したA～Dの4点の土器片である。試料の詳細を第2表に示す。ここでは、赤色顔料の構成元素から顔料の種類を同定する目的で蛍光X線分析を行った。なお、各資料について赤色顔料付着部分と付着物の少ない部分の2箇所を測定し、比較検討を行った。

2.分析方法

エネルギー分散型蛍光X線分析システム（日本電子㈱製、JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。試料の処理は次のとおりである。

1）土器片を絶乾後、分析装置の固定試料ステージに固定

2）測定時間300秒、照射径20mm、電圧30keV、試料室内真空の条件で測定

なお、X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

3.分析結果

各元素の定量分析結果（Wt%）を第2表に示す。

4.考　察

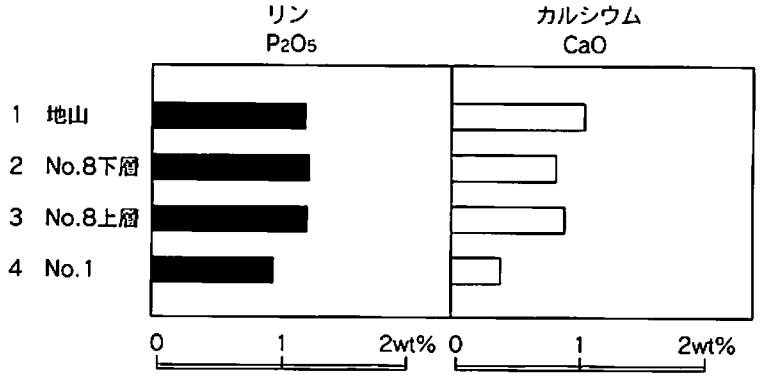
赤色顔料としては、一般的に水銀朱（硫化水銀：HgS）、ベンガラ（酸化鉄：Fe_2O_3など）、鉛丹（酸化鉛：Pb_3O_4）が知られている（市毛，1998，本田，1995）。分析の結果、各土器とも赤色顔料付着部分ではFe（鉄）の明確なピークは検出されなかった。

Fe_2O_3の含量は、試料Aの赤色部では10.68%（褐色部の2.2倍）、試料Bの赤色部では22.48%（褐色部の4.5倍）、試料Dの赤色部では12.17%（褐色部の1.4%）、試料Cの赤色部では20.46%（褐色部の2.5倍）であり、赤色部では褐色部よりもFe_2O_3の含量が明らかに高い数値を示している。

以上の結果から、土器A～Dの表面に付着した赤色顔料は、いずれもベンガラと考えられる。

文献

市毛　勲（1998）新版朱の考古学．考古学選書．雄山閣出版，p. 42-48.
本田光子（1995）古墳時代の赤色顔料．考古学と自然科学．31・32，p. 63-79.



第１図　各資料のリン・カルシウム含量（No.は土器番号）

第1表　蛍光X線分析結果

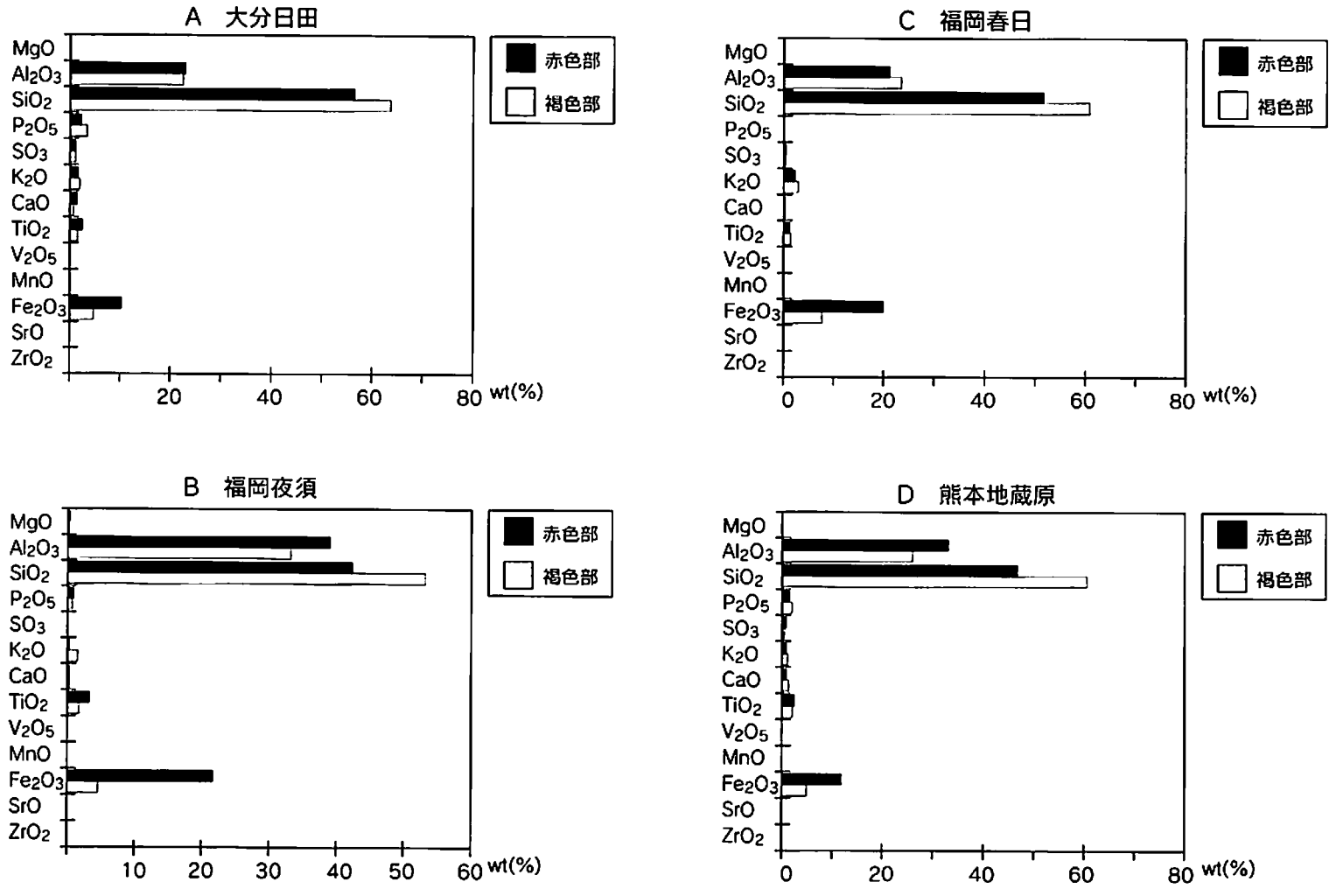
単位:wt(%)

地点・試料		地蔵原			
原子No.	化学式	地山	No.8下層	No.8上層	No.1
12	MgO	0.28	0.12	0.04	0.16
13	Al_2O_3	25.53	25.40	30.48	32.63
14	SiO_2	51.31	51.97	46.04	44.85
15	P_2O_5	1.23	1.24	1.23	0.96
16	SO_3	0.90	1.01	0.93	0.89
19	K_2O	1.07	1.02	1.09	1.29
20	CaO	1.07	0.84	0.91	0.40
22	TiO_2	1.79	1.74	1.82	1.82
23	V_2O_5	0.08	0.07	0.08	0.07
25	MnO	0.47	0.48	0.45	0.45
26	Fe_2O_3	16.18	16.00	16.85	16.40
35	Br	0.04	0.03	0.03	0.03
38	SrO				
40	ZrO_2	0.07	0.07	0.05	0.06

第2表　蛍光X線分析結果

単位:wt(%)

地点・試料		A		B		C		D	
		大分　日田		福岡　夜須		福岡　春日		熊本　地蔵原	
原子No.	化学式	赤色部	褐色部	赤色部	褐色部	赤色部	褐色部	赤色部	褐色部
12	MgO	0.20		0.77	0.36	0.05	0.17		
13	Al_2O_3	23.15	22.59	40.03	34.25	21.69	24.10	33.41	26.10
14	SiO_2	56.77	63.85	29.58	54.60	52.80	62.17	47.50	61.60
15	P_2O_5	2.12	3.26	1.30	1.10	0.20	0.13	1.47	1.50
16	SO_3	1.14	1.04	0.34	0.23	0.58	0.39	0.80	0.56
19	K_2O	1.51	1.90	0.77	1.86	2.21	2.78	1.01	1.68
20	CaO	1.43	0.65	0.61	0.49	0.47	0.32	0.86	1.22
22	TiO_2	2.61	1.77	3.67	1.95	1.37	1.63	2.58	2.01
23	V_2O_5	0.06	0.04	0.08	0.01		0.02	0.04	0.05
25	MnO	0.17	0.11	0.27	0.08		0.10		0.08
26	Fe_2O_3	10.68	4.76	22.48	5.05	20.46	8.08	12.17	5.11
35	Br								
38	SrO	0.05	0.04			0.04	0.02	0.05	0.03
40	ZrO_2	0.11		0.10	0.04	0.12	0.08	0.11	0.06



第２図　蛍光X線分析結果

3.地蔵原遺跡出土土器の蛍光X線分析

小村美代子（パレオ・ラボ）

1.はじめに

ここでは、地蔵原遺跡より出土した丹塗土器と粗製土器の蛍光X線分析を行い化学組織からの比較検討を行った。

2.試料と方法

試料は丹塗土器3点と粗製土器3点の計点である（No.1～6）。

方法は、岩石カッターで約2g採取し、土器表面に付着する土壌等を除去する為表面を削り超音波洗浄した。これらを恒温乾燥機で乾燥した後、セラミック乳鉢（成分Al_2O_3：93.4%、SiO_2：5%）で粉砕し粉末化した。これら粉末を1.8000g秤量し乾燥させた融剤（無水四ホウ酸リチウム（$Li_2B_4O_7$）：リチウムメタボレイド（$LiBO_2$）=8:2）3.6000gと十分混ぜ合わせた。混合試料は、白金るつぼに移し、ビートサンプラー（(株)東京科学製　NT－2000型）により、約1100℃で400秒間融合・350秒間混合を行い、ガラスビードを作成した。測定は、フィリップス社（現在(株)パナリティカルに社名変更）製波長分散型蛍光X線分析装置MagiX（PW2424型）を用いて検量線法による定量分析を行った。測定元素はNa_2O、MgO、Al_2O_3、SiO_2、P_2O_5、K_2O、CaO、TiO_2、MnO、Fe_2O_3、Rb、Srである。

3.分析結果

各遺跡出土土器の蛍光X線分析結果を第3表に示す。(No.1～6）を構成する最も主要な元素はSiO_2で約66～78%含まれ、次いでAl_2O_3が約16～21%、Fe_2O_3が約1～7%、K_2Oが約1～2%含まれている。丹塗土器（No.1～3）と粗製土器（No.4～6）を比較すると、Na_2OやCaOやFe_2O_3の分析値で顕著な差が見られる。

4.考 察

丹塗土器（No.1～3）と粗製土器（No.4～6）には科学組成の差が比較的顕著に確認された。このことは丹塗土器と粗製土器の土器材料が異なることを示すものと考えられる。今後、近隣遺跡での類例を確認していき更に検討を重ねる必要がある。

第3表　蛍光線X線分析による試料の主成分元素（単位：%）と微量元素（単位：ppm）

【主成分元素】Na_2O：酸化ナトリウム，MgO：酸化マグネシウム，Al_2O_3：酸化アルミニウム，SiO_2：酸化ケイ素，P_2O_5：酸化リン，K_2O：酸化カリウム，CaO：酸化カルシウム，TiO_2：酸化チタン，MnO：酸化マンガン，Fe_2O_3：酸化鉄，
【微量元素】Rb：ルビジウム、Sr，ストロンチウム、

No.	遺物	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3	TOTAL	Rb	Sr
1	No.19	0.33	0.75	21.01	66.19	0.077	1.38	0.39	1.03	0.015	6.24	97.40	90.3	65.6
2	No.33	0.46	1.04	18.82	66.66	0.052	1.74	0.23	1.11	0.015	6.53	96.66	111.1	58.4
3	No.46	0.52	0.80	19.53	68.12	0.062	1.71	0.18	1.04	0.014	5.41	97.39	96.8	37.4
4	粗製土器	0.06	0.24	16.16	78.05	0.030	1.72	0.07	0.84	0.019	0.99	98.18	81.5	39.4
5	No.55	0.05	0.23	16.30	77.49	0.029	1.64	0.07	0.85	0.018	0.97	97.65	78.4	37.1
6	粗製土器	0.05	0.25	16.18	76.04	0.032	1.80	0.09	0.83	0.019	0.94	96.22	87.3	40.7

4. 地蔵原遺跡出土土器の胎土分析（薄片法）

藤根　久・小村美代子（パレオ・ラボ）

1. 分析試料

検討した資料は、地蔵原遺跡から出土した試料6点である。各試料の詳細は第4表のとおりである。

2. 処理と方法

ここでは、土器胎土の特徴を最大限に引き出すために、薄片を作成し、偏光顕微鏡による監察による方法を行った。各胎土は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。

(1) 土器試料は、岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥させ、エポキシ系樹脂を用い、固化処理を行う。スライドグラスに接着し平面を作成した後、その平面にエポキシ系樹脂を含浸させ、固化処理を行う。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後、スライドグラスに接着する。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作製する。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で研磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で各分野群ごとに同定・計数する。同定・計数は、100μm格子目盛を用いて任意の位置における約50μm（0.05mm）以上の鉱物および複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50μm前後）を対象とし、微化石と石英・長石類以外の粒子が100個以上になるまで行う。また、この計数とは別に、薄片全面について、微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、胞子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

3. 分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。とくに、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱物や構造的な特徴に基づいて分類する（菱田ほか、1993）。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の科学的性質についてはその記述を省略する。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中に良く見られる。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微少な藻類で、その大きさは10～数百μm程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。ここでは、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについては珪藻化石（海水種）・珪藻化石（汽水種）・珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（?）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50μm前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や亜鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[胞子化石]

胞子状粒子は珪酸質と思われる直径10～30μm程度の小型の無職透明の球状粒子である。これらは、水成堆積中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち、後述する双晶などのように光学的に特徴を持たないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄

色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく傾長石とカリ長石に分類される。傾長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと異帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。又、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英の連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石派、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石に見られることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などのSio2%の多い深成岩屋低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的に黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状に剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などのSiO2%の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にピールピンのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。SiO2%が少ない深成岩、Sio2%が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である．主としてSiO2%の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のようなSiO2%が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[かんらん石]

形は短柱状から円形に近いころころとしたもので不規則な割れ目が見られる。薄片上では無色透明および淡黄色。主にSiO2%が少ない火山岩によく見られる。

[ザクロ石]

満バンザクロ石、灰バンザクロ石、苦バンザクロ石、灰鉄ザクロ石などがある。薄片上では無色透明である。形は、六角形に近いものから丸いものまである。屈折率はジルコンに似て高いが直交ポーラーでは不透明である。

[ガラス・軽石質ガラス]

透明な非結晶の物質で、割れたガラスの電球のように薄くて湾曲したガラス（バブル・ウオール型）、小さな泡をたくさんもつガラス（軽石質ガラス）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考えがる。なお、濁ガラスは非晶質でやや濁りのあるガラスで、火山岩類などにも見られる。

[発泡斑晶質]

発泡斑晶質は、下記の様な斑晶質ではあるが石器状のガラス質の部分が上記の軽石質ガラスのように発泡しているものをいう。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質派、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

[凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山砕屑物が固化したもので、非晶質でモザイックな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。溶結凝灰岩とは、高温で固結した凝灰岩で流理構造上の組織が見られる。

[複合石英類]

復号石英類は石英の集合している粒子で、基質（マトリックス）の部分を持たないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒なものから細粒なものまで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01～0.05mmのものを小型、0.05～0.1mmのものを中型0.1mm以上のものを大型と分類した。

また、等粒で小型の長石あるいは石英が復号した粒子は、複合石英類（等粒）として分類した。この複合石英類(等粒）は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[片理複合鉱物類]

複合石英類で個々の石英あるいは長石類が一定方向に伸びたように並行に配列しているものをいう。なお、これら石英などの粒子のすき間に黄色などの二次的な鉱物（主に雲母類）が見られるものを片理複合鉱物類（含雲母類）とする。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分を持つもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[リング・ガラス]

全体的にはガラス質であるが、高温焼成された際に揮発成分が発泡した穴を伴うものであるムライトという二次鉱物が見られる。無発泡斑晶質とはムライトは見られるが発泡した穴を伴わないものをいう。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや、変質して鉱物あるいは岩片として同定不可能な粒子を不明とする。

4. 各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した（第5表)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するためにプレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No.1:50～200μmが多い（最大粒径1.3mm)。斜長石（双晶）＞単斜輝石＞石英・長石類＞斜方輝石＞斜長石＞(累帯）＞ガラス＞複合石英類、珪藻化石（不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石

No.2：30～200μmが多い（最大粒1.8mm)。泥岩質＞砂岩質＞石英・長石類＞ガラス＞角閃石類、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

No.3:50～150μmが多い（最大粒2.7mm)。斜長石（双晶）＞斜長石（累帯）＞石英・長石類＞斜方輝石＞複合石英類＞単斜輝石＞ガラス＞角閃石類≫発泡斑晶質、珪藻化石（淡水種：Melosila属、Diploneis属、Eunotia属、不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石

No.4:50～400μmが多い（最大粒径3.1mm)。砂岩質＞複合石英類＞泥岩質＞複合石英類＞泥岩質＞石英・長石類≫角閃石類＞斜方輝石＞ジルコン、(骨針化石)、植物珪酸体化石

No.5:30～500μmが多い（最大粒径1mm)。斜長石（双晶）＞斜長石（累帯）＞石英・長石類＞斜方輝石＞単斜輝石＞ガラス＞完晶質、珪藻化石（淡水種Pinnularia属、不明種)、胞子化石、植物珪酸体化石

No.6:50～250μmが多い（最大粒径2.2mm)。石英・長石類＞砂岩質＞泥岩質＞斜長石（双晶）＞ガラス＞複合石英類＞斜方輝石＞石英・長石類（含雲母類)、珪藻化石（不明種)、骨針化石、胞子化石、植物珪酸体化石

5. 微化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これらの微化石類の大きさは、珪藻化石が10～数100μm（実際観察される珪藻化石は大きいもので150μm程度)、放散虫化石が数百μm、骨針化石が10～数100μm前後である（植物珪酸体化石が10～50μm前後)。一方、砕屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9μm以下、シルトが約3.9～62.5μm、砂が62.5μm～2mmである（地学団体研究会・地学辞典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標になると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中にも含まれていること、製作場では灰質が多く混入すること可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した胎土は、微化石類により、a)淡水成粘土を用いた胎土、b)水成粘土を用いた胎土に分類される。以下では、分類される胎土についてその特徴を述べる

a)淡水成粘土を用いた胎土 (No.3,No.5)

これらの胎土は、水成環境に見られる淡水種珪藻化石が含まれる胎土である。

b)水成粘土を用いた胎土 (No.1,No2.No.4,No.6)

これらの胎土中には、水成堆積物中で見られる珪藻化石および骨針化石が含まれる事から判断される。ただし、含まれる珪藻化石が少なかったり、数は多くても破片ばかりであったりしてその堆積環境は明かでない。

6. 砂粒組成による分類

個々で記載された大型の鉱物および岩石片について起源岩石の推定を行った。岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類（含輝石類・含雲母類）が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、斑晶質がテフラ、ガラスがテフラ（火山噴出物）である。さらに、推定した起源岩石類の組合せにより胎土中の砂粒を分類した。その組合せによる分類は第6表の通りである。Cb群は堆積岩を主体として深成岩類を伴う組成である。(1胎土)。Cf群は堆積岩類を主体としてテフラを伴う組成である（2胎土)。Fc群はテフラと堆積岩類を主体として凝灰岩を伴う組成である（2胎土)。Fd群はテフラを主体として火山岩類を伴う組成である（1胎土)。

全体的に堆積岩類とテフラを主体とした組成が特徴的である。

7. まとめ

ここで検討した土器は精製土器と粗製土器である。

丹塗土器では、砂粒組成が全ての胎土で堆積岩類とテフラが主体の組成であり、凝灰岩類を含むという特徴が見られる（第4表)。また、微化石類の多く見られる胎土では微粒組成においてテフラが特徴的に多いといったことが言える。

粗製土器では堆積岩類を含む組成ではあるが、深成岩類を多く含んだり、テフラおよび火山岩類が主体であったりして、まとまりがなかった。

これら丹塗土器の胎土は微化石類や砂粒組成が類似していることから、類似した地域において製作された可能性が指摘できる。

引用文献

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用。東北地理, 42.2　73-88。

地学団体研究会・地学辞典編集委員会編（1981）「増補改訂　地学事典」,平凡社,1612P

菱田　量・車崎正彦・松本　完・藤根　久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について
－弥生時代後期の土器を例にして－。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集, 34－35

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用。第四紀研究, 27,1-20

車崎正彦・松本　完・藤根　久・菱田　量・古橋美智子（1996）(39) 土器胎土の材料－粘土の起源を中心に－。

第４表　地蔵原遺跡出土土器の詳細特徴（No.は土器番号）

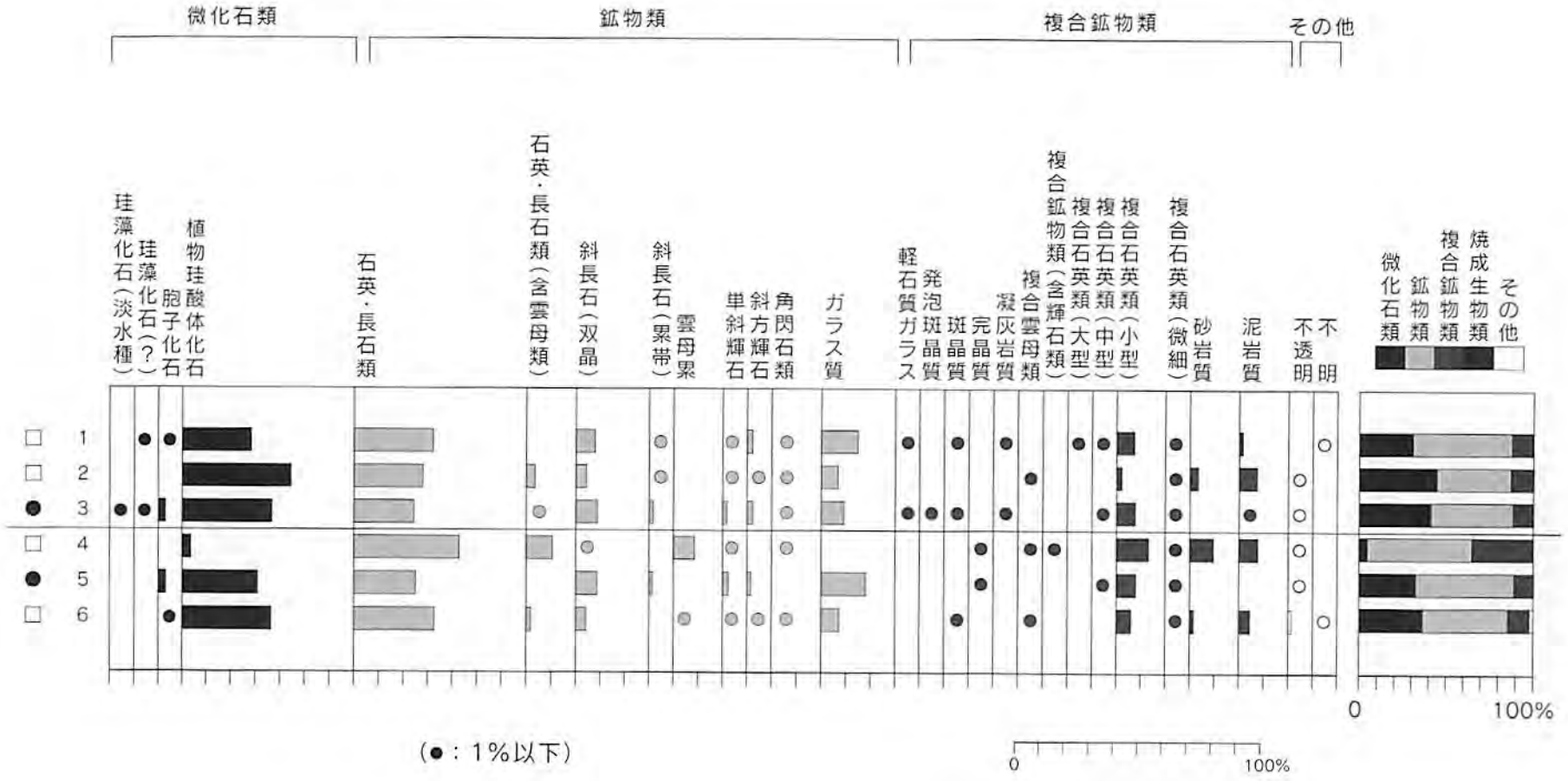
分析No.	備考	粘土の特徴					砂粒の特徴			
		分類	種類	淡水種珪藻化石	不明種珪藻化石	骨針化石	粒度(μm)	最大粒径	分類	頻度順(()は極稀な場合、[]は稀)
No.19	ベンガラ精製	□	水　成		○		50~200	1.3mm	Fc	テフラ)堆積岩類)凝灰岩類
No.33	ベンガラ精製	□	水　成			○	30~200	1.8mm	Cf	堆積岩類)テフラ)凝灰岩類
No.46	ベンガラ精製	●	淡水成	○	○		50~150	2.7mm	Fc	テフラ)堆積岩類)凝灰岩類)火山岩類
	非丹塗(粗製)	□	(水成)			△	50~400	3.1mm	Cb	堆積岩類)深成岩類)火山岩類
No.55	非丹塗(精製)	●	淡水成	△			30~500	1mm	Fd	テフラ)火山岩類)堆積岩類
	非丹塗(粗製)	□	水　成			○	50~250	2.2mm	Cf	堆積岩類)テフラ)火山岩類

第５表　地蔵原遺跡出土土器胎土中の粒子一覧

分類群	1	2	3	4	5	6
微化石類						
珪藻化石（淡水種）	-	-	2	-	-	-
珪藻化石（？）	1	-	3	-	-	-
胞子化石	2	-	7	-	6	1
植物珪酸体化石	87	177	114	8	88	137
鉱物類						
石英・長石類	95	110	74	89	70	120
石英・長石類（含雲母類）	-	11	1	20	-	6
斜長石（双晶）	23	14	27	2	24	14
斜長石（累帯）	2	4	5	-	4	-
雲母累	-	-	-	17	-	3
単斜輝石	2	2	4	2	5	2
斜方輝石	5	1	5	-	3	2
角閃石類	2	2	2	1	-	3
ガラス質	46	27	29	-	52	29
複合鉱物類						
軽石質ガラス	1	-	2	-	-	-
発泡斑晶質	-	-	2	-	-	-
斑晶質	1	-	3	-	-	1
完晶質	-	-	-	2	1	-
凝灰岩質	2	-	3	-	-	-
複合雲母類	-	1	-	1	-	1
複合鉱物類（含輝石類）	-	-	-	2	-	-
複合石英類（大型）	1	-	-	-	-	-
複合石英類（中型）	3	-	1	-	2	-
複合石英類（小型）	22	8	24	28	23	23
複合石英類（微細）	1	2	1	2	1	1
砂岩質	-	13	-	20	-	8
泥岩質	5	27	2	16	-	17
その他						
不透明	-	1	1	2	2	5
不　明	3	-	-	-	-	1
総ポイント数	304	400	312	212	281	374

第６表　起源岩の組み合わせによる分類

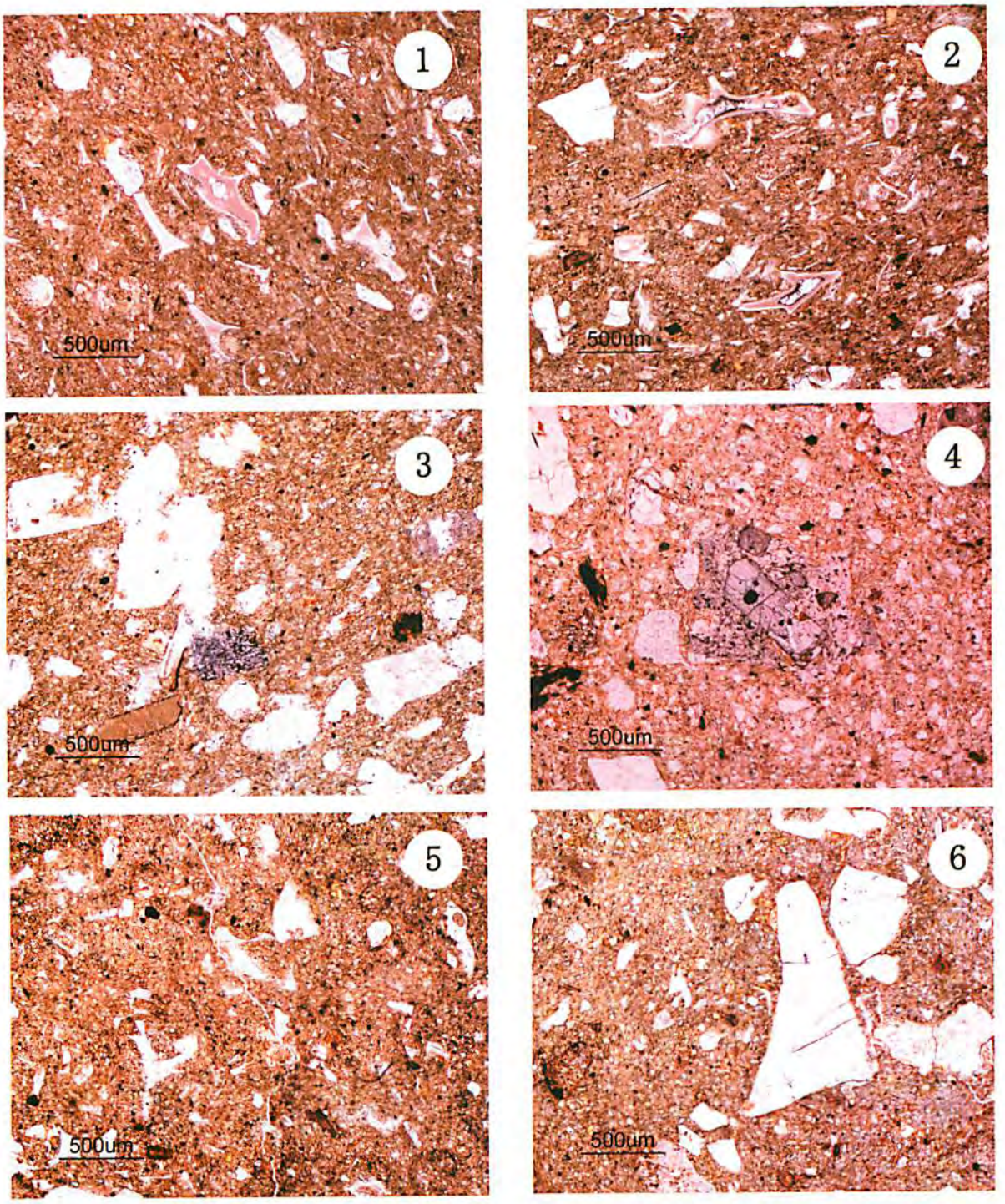
			第1出現群					
			A	B	C	D	E	F
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類		Ba	Ca	Da	Ea	Fa
	b	深成岩類	Ab		Cb	Db	Eb	Fb
	c	堆積岩類	Ac	Bc		Dc	Ec	Fc
	d	火山岩類	Ad	Bd	Cd		Ed	Fd
	e	凝灰岩類	Ae	Be	Ce	De		Fe
	f	テフラ	Af	Bf	Cf	Df	Ef	



第３図　地蔵原遺跡出土土器胎土中の粒子組成図（全分類群を基数とした百分率で表示）

［粘土区分（資料番号左）］

●淡水成粘土（淡水成珪藻化石などの出現）　□水成粘土（不明種珪藻化石および骨針）



図版１．胎土の顕微鏡による状況写真

1．No.19　　2．No.33　　3．No.46

4．非丹塗(粗製)土器　　4．No.55　　6．非丹塗(粗製)土器

第Ⅶ章　総　括

本報告書は一部に第Ⅱ層出土の遺物を含んでいるが主に基本土層第Ⅲ層出土の遺構・遺物を中心とした報告である。以下、遺構・遺物から述べていきたい。

1　遺　構

本遺跡の遺構として住居・土坑・不明遺構があり、その出土層と遺物から弥生期中期後半から後期前半に比定される。

(1)　住居

住居は本遺跡から4基確認されたが、何れも炉が検出できなかった。また柱穴についてもその存在が不明瞭で、ＳＨ－01出土の底部に穿孔を持つ小型丹塗磨研壺1（第6図）の出土から、本来の生活を主体とする空間とは異なる性格を持つものであろうか。

(2)　土坑

土坑は６基であるが、何れも小規模な遺構でまたその性格が明瞭である確証は得られなかった。しかしＳＴ－06は本遺跡検出の土坑とは異なり、溝状を呈しているため周囲に溝の存在を示唆するものか。

(3)　不明遺構

本遺跡で検出された遺構で、その目的が不明瞭な遺構を不明遺構とし「ＳＸ」と表示した。大半は廃棄に伴うものであろうが、遺構から出土した遺物を接合すると、完形資料ではなく欠損部が確認されることから、本来、他の場所で破壊され、その後、廃棄されたことを示唆する。またこのSX－05は単独の掘り込みではなく周囲に巡らす溝の一部ではないかとのご教示を受けた（平田定幸氏　福岡県春日市教育委員会）。この遺構の出土遺物を祭祀場と想定したならば、彩色土器以外の土器22出土はやはり異質で、以外は全て祀事を執り行うと云われる彩色土器である。このことも遺跡の性格を考慮する上で今後の重要な課題である。

またＳＸ－01及びＳＸ－03出土の転倒した甕は、本来の目的を持った容器としての形態ではなく、この使用された土器が二次的なものか意図的に一次的な要素かの判断に苦しむ。また甕棺墓の可能性も考えられたので、土壌分析を行った（第Ⅵ章　科学分析）。ＳＨ－01の小型壺1も含めリン・カルシウム含量分析を行ったが生物遺体の存在が明確でなかったためこれらの可能性は少ない。

またＳＸ－06・07は形状から中世地下式土壙か。

2　遺　物

(1)　土器

本遺跡からは縄文期から近世までの遺物が出土したが、弥生土器の丹塗は科学分析の結果ベンガラ（酸化鉄：FeO_3など）であった。またFeO_3の数値は対象地として、最も近い日田市とあまり差異がない。丹塗土器に関しては筒形器台・甕・壺・高坏・小型壺・蓋・注口脚付小型壺など祭祀としての対象器種が把握できる。また胴部下位の一部分が欠損した土器（11・14・48）があり、欠損部分を観察すると外からの強い敲打痕によるものである。破壊の際の規則性が見られるものか。また（1・27）は底部に穿孔が存在し、この場合は錐状の工具で穿っている。これは本来の器種の目的を放棄することで、儀礼の範疇として考えるべきものであろう。

本遺跡出土の土器は接合による完形資料を除いてその点数は丹塗土器1，343点・非丹塗土器が823点　総計2，166点であった。丹塗土器と非丹塗土器のその割合は6：4である。また同じく科学分析で胎土分析を行い、その結果、粗製土器にはまとまりがなく、丹塗土器には胎土類似の傾向がみられ類似した地域での製作可能性という結果を得ている。土器様式は以西（7・19・30・53）、以東（13・18・51・55）等が挙げられ、本

遺跡は立地・出土土器から東西のほぼ中間に位置するものである。

出土遺物の甕については形式を作成し時間的な軸を設定した。ほぼ同一層での出土であることから、甕に関しては口縁部が上向きから垂れ下がるという傾向と突帯の断面形態から10の分類を行った（第51図）。（　）は土器番号である。

① 「く」の字口縁・△状突帯（43）
② 「く」の字・やや鋤先状口縁・△状突帯（68）
③ 鋤先口縁が水平・△状突帯（47）
④ 鋤先口縁がやや上向く・２条のM字突帯（14）
⑤ 鋤先口縁が水平・２条のM字突帯（78）・（8）
⑥ 鋤先口縁がやや上向く・３条のM字突帯（80）
⑦ 鋤先口縁がやや上向き口唇部にむけてやや垂れ下がる・２条のM字突帯（20）
⑧ 鋤先口縁がやや垂れる・３条のM字突帯が垂れる（11）
⑨ 鋤先口縁が垂れる・２条のM字突帯が垂れる（45）
⑩ 鋤先口縁がかなり垂れる・２条のM字突帯もかなり垂れる・簡略化する（15）・（70）

ここでは縦の時間軸を仮定したが、横軸及び斜行軸も想定されるが提起として留めたい。

（2）　石器

流れ込みであるが、三稜尖頭器の出土は本遺跡近在に旧石器時代の遺跡が存在する可能性を示唆する。本遺跡出土遺物に特異なものとして石器の磨製石鏃の出土が顕著である。埋納された状態ではなくそれぞれ単体での出土であるが、大半が土器集中区（第52図）であり、狭小な面積にはやや出土が目立つ。粘板岩２点1・4、輝緑凝灰岩２点6・7、凝灰岩１点8、頁岩１点3、緑色片岩１点13、結晶片岩１点と材質は異なる。また磨製石斧17は本遺跡近在から水田耕作中、発見されたもので本遺跡から直線距離にして約500mである。1は本来の使用は石包丁であり、これにより同時期での稲作の可能性を想定させる。

3　関連事項

（1）石像物

本遺跡に近接地に六地蔵がある。小國郷土史（禿迷盧）には「地蔵原の六地蔵は屋根形の傘の四角で前後二体宛横各一体刻む、下に法名が多く刻んである。よほど古いもの異風である。地名もここから出て地蔵原という。」とある。総高1.2mで、在住の郷土史家のご教示から室町期のものであるという。銘文等などが刻銘されていたが、現在では読みとれない。また遺跡直下の旧道には道標（031）があり、ここは良質な山水を産出しており古来から交通の要所であったのだろう。

（2）赤という色・サイクル

熊本県牛深市牛深町の事例として、戦前の船員は少年・青年・壮年・老年と年齢の異なる集団が船上で生業営む場合は、少年と老年は赤い褌をしていたという（牛深市　加世田庄治氏・山上勝一氏教示）。これは少年と老年は体力的に他者と劣るため、赤い色が外敵から身を守るという思想が存在していた。また同地では女性の赤い腰巻きを干していたために、観音菩薩が牛深に上陸できなかったという伝承もある。「赤」と云う色は日常生活の中で特殊な位置付けができる色で、魚の鯛が祝い事に好まれるのはその色彩によるものであろう。また「古代の「赤」は自分の安全を願う、身体を守るための祈念であり、生命の表示。」とも云われる。

同じく熊本県天草の事例として日常は「ケ→ハレ→イミ→（ミソギ）→ハレ→ケ」のサイクルであり、「ケ」は日常生活の状態で「ハレ」は祝事のことである。現在でも「ハレ着」「ハレの日」などとして存在し、「イミ」は忌みの意で葬送のことである。この後、日常生活の「ケ」に戻るのであるが、「イミ」から「ハレ」には直接移行は出来ず「ミソギ」の儀礼を通過しないと「ハレ」に行けないという（熊本県本渡市　平田正範氏教示）。また牛深町の事例では「イミ」は出産の際、乳児の産着は出産直後から数日間は襤褸着を使用することから、これも「ケ」とは異なる時期である。従って日常生活にサイクルがあるように人の一生間にもサイクルが生じ

る。以下、葬送についての事例を述べる。

（3）葬送儀礼

『魏志倭人伝』に「はじめて死すれば喪を停めるには十余日、当時に肉を食せず、喪主は哭泣し、他の人は歌舞、飲酒を就す。すでに葬むれば家を挙げて水中に詣り澡い浴う」とある。近親者が鼓舞する事例は熊本県天草郡栖本町に於いて、「カンカン踊り」として報告がある。その内容は『墓堀りの際、若者頭が寺から鉦を借りて来て「カンカン」と鉦をたたかせて踊る』とあることから、この葬送はマツリの要素を示唆するものである。また葬送儀礼での服装では、「大正期、近親者の女性は白無垢（シロギモン）に白の綿帽子（ワタンボウシ）を被る」事例からも、葬送儀礼には色が付随していることを現代の喪服でも窺わせるものである。

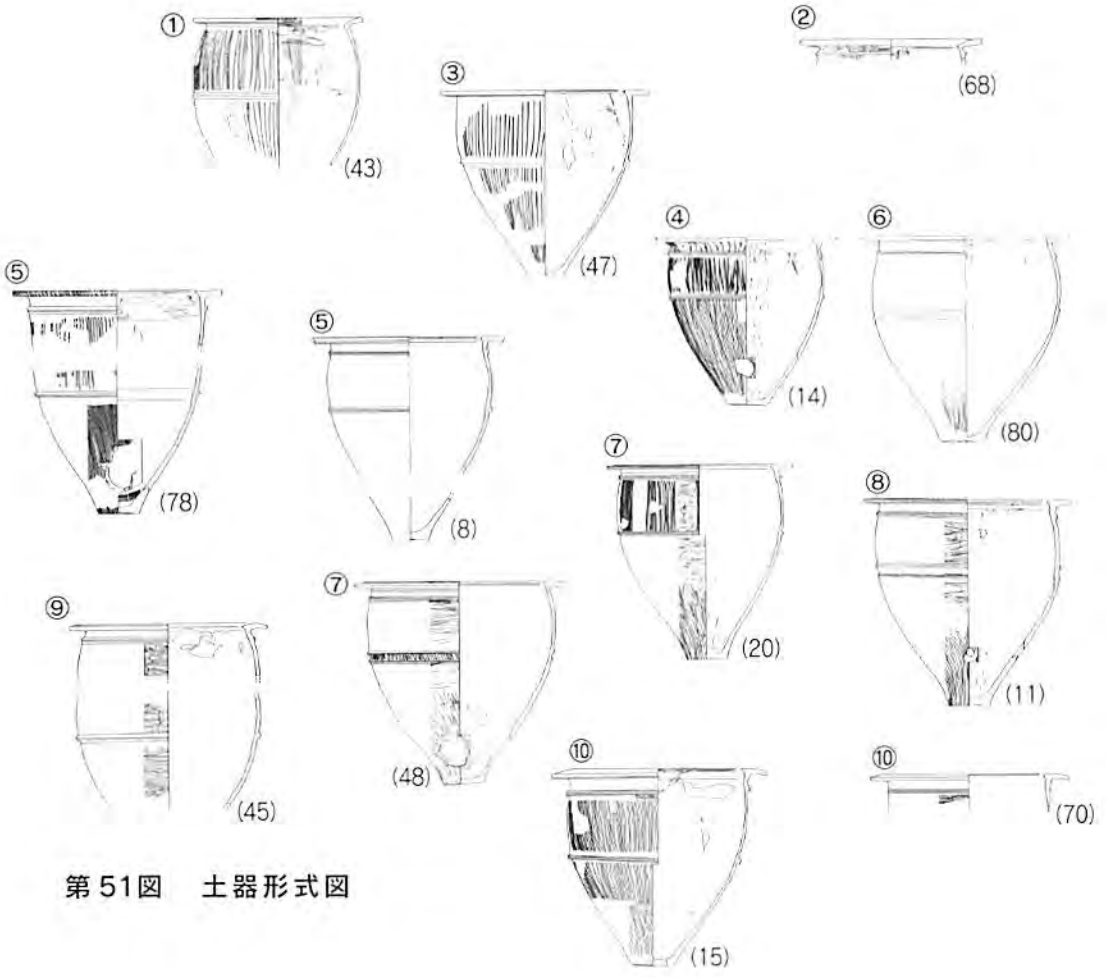
（4）銅製品の出土

本遺跡周辺からの銅製品は小国郷に限定すると南小国町市原天満宮に銅戈１点・小国町両神社所蔵に銅矛１点（中広形）・小国町若宮神社に銅戈４点、など多くの銅製品の存在がある。この中で南小国町市原天満宮に銅戈の実測の機会を得たのでそれを提示する（第50図）。市原天満宮は当遺跡から直線距離にして約2kmである。遺物は何れも伝製品であるためその詳細は不明であるが、在地での出土であるのならば青銅器を産出した重要な基点である。青銅器の道として「筑後川→杖立川→小国町→久住町→大野川」と想定される。（島津義昭氏教示）

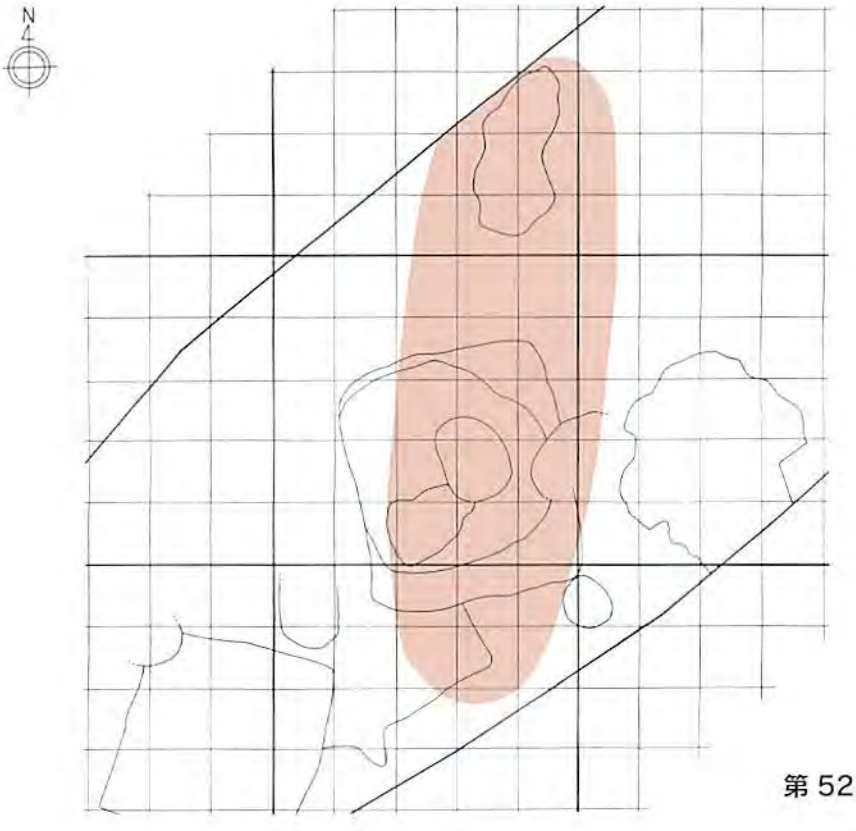
４　本遺跡の持つ意味

本遺跡は狭小であるが丹塗土器大量出土から、生活・生業を中心とした遺跡ではなく祭祀場と想定し、その祭祀は葬送儀礼を提示したが、生業であろう稲作関連の「マツリ」も行われたか。何れにしても「マツリ」を執り行う「場」に関連し、その周囲に生活空間・及び墓域の存在の可能性を示唆する住居址付属地である。またこの住居地（ＳＨ）等の遺構が本来の生活空間としてではなく、これも祭祀に関与するものであろう。また土器集中区（第Ⅳ章　第1項）をふまえ、新たに集中区を作成した（第52図）。この遺物の出土状況から、本来は溝状を呈し遺跡を東西に横断する可能性を示唆する。またＳＴ－06も本来は溝の一部と想定すると環状の可能性も考えられる。

本遺跡は水田を見渡す舌状台地の先端に位置し、基本土層の第Ⅱ層は縄文～中世までの資料が混在していることは、遺跡東側からの山崩れ層が想定され、遺跡は周囲に幅広く連続している可能性が高い。遺跡の立地は杖立川支流の中原川に接し、杖立川は筑後川の支流になることや、現場作業員の会話は大分方言であり、小国地域で大分の地酒の販売があることから、熊本県という中部九州ではなく北部九州の文化圏内の範疇であろう。この遺跡は南小国町大字中原地区の弥生期の僅かな事象の提示である。本遺跡を契機として周辺の関連調査が強く望まれる。

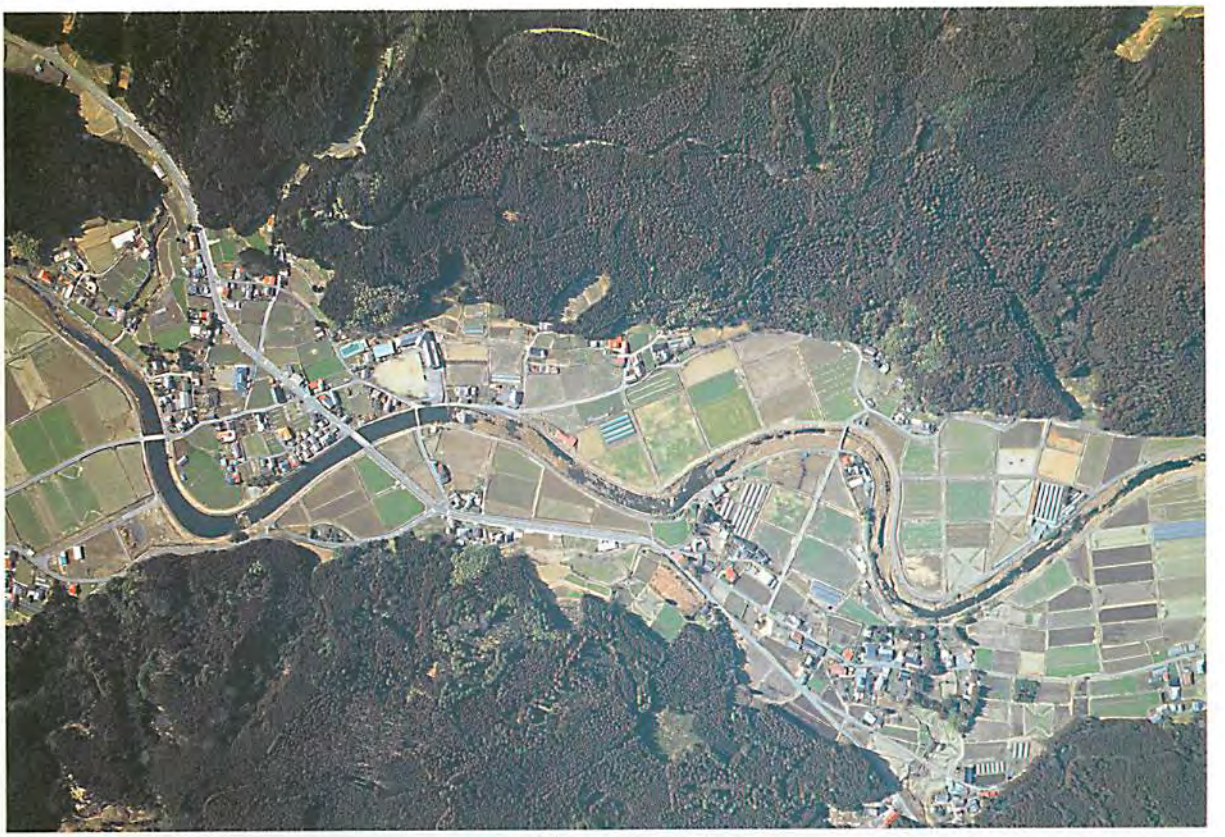


第51図　土器形式図



第52図　遺物集中区

写 真 图 版



遺跡航空写真（1）

遺跡航空写真（2）　北→南

図版2

遺跡航空写真（3）　南→北

六 地 蔵

銅　戈

SH－01
検出状況

SH－01
出土遺物

SH－03
検出状況

図版4

SX－01
出土状況

SX－03
出土状況

SH－03
出土遺物

SX－05
出土状況

丹塗土器（1）

図版6

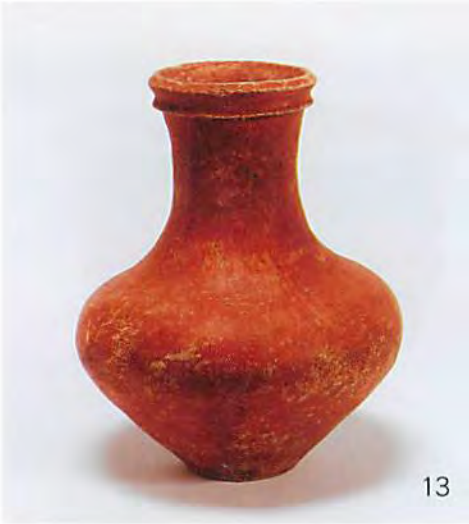
丹塗土器（2）高坏

丹塗土器（3）壷

非丹塗土器

丹塗土器（4）甕

図版8



丹塗土器（5）他

石　器

丹塗土器（6）

参考文献

大城康雄『神水遺跡発掘調査報告書』熊本市教育委員会　1986

山鹿市立博物館『弥生人のくらしと祭り展』　1998

野田拓治・光沢徳行『菊陽町梅ノ木遺跡採集の彩文有孔土器』肥後考古2号　1982

久留米市史　第12巻　資料編　『考古』　1994

小郡市史　　第１巻　通史編　『地理・原始・古代』　1996

馬場弘稔『弥生時代の土器祭祀について』森貞次郎古希記念古文論集　1982

馬場弘稔『栗田遺跡』三輪町教育委員会　第5集　1986

『吹上遺跡－第６次－調査の概要』日田市教育委員会　1995

佐賀県教育委員会　『吉野ヶ里遺跡』　吉川弘文館　1994

武末純一『２九州地方の弥生土器　１、須玖式土器』(弥生文化の研究 4)　1987

緒方勉　古森政次『下城遺跡』熊本県文化財調査報告第50集　1980

木崎康弘『狩尾遺跡群』熊本県文化財調査報告第131集　1993

山田康弘　岩谷史記『高畑赤立遺跡』研究室活動報告29　熊本大学文学部考古学研究室　1994

村崎孝宏『耳切遺跡』熊本県文化財調査報告第180集　1999

『考古資料大観』小学館　2002

禿　迷盧　『小國郷土史』　1960

山下義満　『竹井武助遺稿集』　1997

平田正範　『牛深舟津郷の葬墓制について』　あまくさの民俗と伝承　第８号　1990

前田雨城　『色』　ものと人間の文化史　　法政大学出版局　1980

竹内新吉　『島の息づかい』　1981

山下義満　『産育』　あまくさ雑記　第２号　1991

乙益重隆　他　『高千穂・阿蘇』　神道文化会　1981

寺沢　薫　『王権誕生』日本の歴史　第02巻　2000

報告書抄録

ふりがな	じぞうばるいせき
書　名	地蔵原遺跡
副書名	県道南小国上津江線単県道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告書
シリーズ番号	２２０集
編集者名	山下義満
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862－0950 熊本県熊本市水前寺６－18－１
発行年月日	2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
じぞうばるいせき 地蔵原遺跡	くまもとけん 熊本県 あそぐん 阿蘇郡 みなみおぐにまち 南小国町 おおあざなかばる 大字中原	443	31	33 04 56.2935	131 03 23.0144	平成13年 9月17日 ～ 平成14年 1月28日	1,000㎡	県道南小国上津江線 単県道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
地蔵原遺跡	集　落	弥　生	竪穴住居址　4 土　　坑　6 不明遺構　10	弥生土器	丹塗土器多数出土

編 集 後 記

丹塗土器の出土が夥しいため、これは特異な遺跡であると最初に感じた。調査終盤になり大量出土で最後は期限に追われての調査であったが、その内容は充実していた。

調査中は地元南小国町のみならず隣県の大分県上津江村からも見学者は絶え間なく、調査時間は遺跡説明を行う状態であった。これだけ関心が高く、また様々な面に於いて御協力を頂いた方々に心より感謝申し上げたい。現場作業員の方々は地元にお願いし、発掘作業は初めての体験であり、ご苦労も多かったと思う。現場事務所と調査区に距離があり休息時は焚き火にて暖をとり、厳寒の時期での調査であったが、様々なご配慮をして下さり、温かみのある調査でもあった。解散式は皆下を向かれた。毎年、年賀状を頂く。

整理作業は1次整理から校正まで、編集者の無理難題に対し、いつも笑顔を絶やさず、また時間を砕いて作業を遂行され、なんとか刊行に至ったことは、感謝申し上げるとともに編集者として冥利に尽きる。

調査と整理、いまだに力不足の感は拭えないが、多くの方々に助けを頂いた。ここに記して改めて感謝申し上げたい。

(現場作業員)

安藤アケミ　加賀公雄　河津キミエ　河津ツユ子　河津弘子　菊池良美　佐藤伸三　杉本恭子
武田頼和　中島今朝徳　中島朗裕　本田光子　鞭馬勝彦　森田サチ子　山田安子　山本義光　和田 正

(整理作業員)

今福英子　上田律子　尾方マサミ　大塚トシ子　甲斐正子　木村雅子　重永照代　田崎よし子
橋本由美子　村山紀子　水本寿美子　山元友子　米倉五月　金子美代子　佐藤淳子　田中知恵美
古閑満代　村田百合子　河合章行　宮本千恵子　柿本 慈　上土井朋美

熊本県文化財報告書　第220集
地 蔵 原 遺 跡
平成16年3月31日

編集・発行　熊本県教育委員会
熊本市水前寺6-18-1
〒860-8557　☎096-381-9211

印　刷　敷島印刷株式会社
熊本市近見3丁目12-3
〒861-4101　☎096-326-1571

15　教委　教文
②

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 220 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：地蔵原遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/